

イナズマイレブン 雪
原のパートナー

黄熊

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で転生することになった主人公。

向かった先は主人公の憧れるイナズマイレブン！

そこで主人公は一体どういう道を歩むのか!!

目次

第1話	神様??	1
第2話	主人公設定	8
第3話	新たななる必殺技?	13
第4話	必殺タクティクス!	18
第5話	雷門の試合	24
第6話	練習試合!	30
第7話	特訓開始!	38
第8話	風丸イベント	43
第9話	V S ジェミニストーム 前半戦	49
第10話	ジェミニストーム 後半戦	49
第1話	パーティー	63
第2話	新たななるチームへと	67
第3話	いざ、京都へ	72
第4話	イプシロンの力	79
第5話	V S イプシロン!	86
第6話	イプシロンその後	98
番外編 1		104
第17話	キャラバンでのひととき	108
第18話	戻ってきた影山	116
第19話	V S 真・帝国学園	124
第20話	後半戦へ!	136
第21話	いざ、稲妻町へ!	142

第22話	大阪ナニワランド	150	第33話	ノリノリサッカー!?	260
第23話	VSCCC	159	第34話	完成?究極奥義?	277
第24話	イプシロン戦に向けて		第35話	新メンバー加入!	283
174			第36話	V Sギヤラクシー1	290
第25話	イプシロン再び!	181	第37話	V Sギヤラクシー2	299
第26話	ついに決着!?	187	第38話	V Sギヤラクシー3	306
第27話	裏ノート: : ?	198	第39話	V Sダイヤモンドダスト1	
第28話	ジェネシスの脅威	205	311		
第29話	ジェネシスの脅威後編!		第40話	V Sダイヤモンドダスト2	
217			322		
第30話	いざ沖縄へ!	226	第41話	V Sダイヤモンドダスト3	
第31話	炎のストライカー	238	335		
第32話	大海原中へ!	255	第42話	帰還	341

第43話 日常

第44話 新たなる驚異

352 348

第1話 神様??

『まあーとういうわけで君を殺しちゃったんだ、ごめんね?』

「え?え?とういうこと?俺ってばさっきまで友達と一緒に遊んでたはずなのに」

どうしてこうなったかそれは今から少し時は遡る

「じゃあまた明日学校でな!」

「おお!気を付けて帰れよ!」

「んじゃ!」

俺の名前は高梨佑真。俺は今自分の友達と別れこれから帰ろうとしているところである。

—————そして、このあとまさかこんなことになるとは誰も予想していなかった。

「ねえねえこのあとさ公園でキャッチボールしようぜ!」

「いいねいいね!」

おうおう最近の子どもたちは元気があつていいねー

「あつ!ボールが!」

一人の子どもがボールを落とし拾いに行くと『プップー！』とちようどそこにトラックが走ってきていた

「クソッ！あぶねー！」

俺は咄嗟に体が動いていた。俺は別にヒーローを目指してるわけでもないし、この子を守る力があるわけでもない。ただ俺は無我夢中で動いていた

「どけっ！」ドサッ！

俺は道路にいた子どもを突き飛ばした。これで子どもの命は助かった……がすでにトラックは俺の目の前まで来ていた。

「(終わったな)」ドンッ！ゴロゴロゴロ！ガンッ！

俺はトラックな吹っ飛ばされ電柱に頭を打ち付けていた。本来なら即死だろうけど俺の意識はまだ残っていた。あの子に、あの子の心のケアをしなければ……

「お兄さん！大丈夫！」

「ハハハ……大丈夫さ……きみ……たちこそ…怪我はないか…い?……」

「うん！僕は大丈夫！でも、お兄さんが……」

その子は今にも泣きそうな顔をしていた。それを見た俺は動かないからだにムチをうちその子の頭に手を置いた。

「お兄さん……は……大丈夫……夫だから……ね……次は……同じ……とを……しない

よう……に……ね……」

「うん！ 気を付けるから！」

「……い……い……子……だ」

俺の目の前が段々と暗くなり子どもの頭に乘せていた手も力なく地面に落ちた。そして、段々と意識が遠のいていった

「そうだ！ 俺は、あの子を助けてそれで」

『うん。君はトラックに引かれて死んでしまったのさ』

そうか。やっぱり俺は死んでしまったのか。でも、人を助けて死ねるなら別にいいさ

『うんうんそうかそうか。でね、その事について君に謝らなければいけないんだ』

「神様が俺に謝る？」

『うん。実はあの時本当なら死者は0で終わるはずだったんだ』

「え？ どういうことだよ！」

神様曰く、命の灯火である火を消してしまったため俺は死んでしまったらしい。あの子は俺が助けなくてもギリギリで停まるはずだったそうだ。しかし、灯火が消える寸前に俺が余計な事をしてしまい子どもの心に大きな傷を作ってしまったのか

「ハハハ……なんだよそれ。俺がしたことは無駄だったのかよ……ただその子の心に

傷を作っちゃまっただけじゃねーかよ！クソツ！」

『いいや、君の行いは無駄ではないよ』

「無駄じゃないって？俺がなんにもしなければその子の心に傷を残すことなかったんだぞー！」

『いいや、無駄ではない。確かにあの子の心に傷は残った。だがそれとは別にあの子の中には君というヒーローが生まれたんだ。誰かのために省みず動くその姿はまさにヒーローなんだ』

俺がヒーロー？俺は別にヒーローになりたいから子どもを助けたわけじゃないのに

『じゃがそれがあの子にとつて君はヒーローに見えたのさ』

「そうか。ヒーローか。悪い気はしないな」

『うむ。そしてあの子なんじゃが心の傷は癒え君に憧れ誰かを助けるヒーローになるんだと日々精進してるぞ』

俺がしたことは無駄じゃなかったのか？

『ああ。そうじゃ、決して無駄ではない』

「そうか……ん？待てよ？何か気になることがあったんだが」

『ん？なんじゃ？』

「俺が死んだのってトラックが原因じゃなく神様が原因なんだよな？」

『……………』ダツ！

「待てー！」

神様は無言で逃げ出した。あいつめ！上手いこと纏めて自分がしたことをなかつたことにしようとしやがつて！

「待てやー……………」

『おたすけ……………」』

それから数時間後

「ハア………… ハア………… やつと………… 捕まえたぞ」

『まさかこのわしが捕まるだなんて』

…………まで追いかけて要約捕まえられるなんてやはり腐つても神だな。

『腐つてもは余計じゃ。さて、急なんじゃが、今回はこちらのミスということもありお主には転生をしてもらおう』

「転生？それってよく二次創作で見かけるあれか？」

『ああ、そうじゃ』

俺はその言葉を聞いて喜んだ。まさか俺が転生出来るなんて、テンション上がって来た！

『それでお主が行く世界なんじゃが原作の世界ではなくパラレルワールドの世界にな

る』

「パラレルワールド?」

パラレルワールドって確かIFの世界の話だよな? 例えば俺と神様が出会わない世界や友達がいらない世界のことだよな?

『ん、まあそんな感じだ。だからお主がその世界で何をしようが原作にさ関係ないが大体はその世界も原作通りには進むことになる。』

「ん? そうなのか?」

『ああ、その方が作者にとつて都合がいいからな』

「ん? 作者? 誰だよそれ?」

『まあ、お主が気にすることではない。さてお主はどの世界に行くのか、伝え忘れたがもちろんお詫びとして転生特典をお主に授けるから安心するがよい』

転生特典も、貰えるのか!? だったらあの世界しかないよな! 俺の大好きなあのアニメの世界

「じゃあ、俺はイナズマイレブンの世界に行くぞ!」

『あい、わかった。次に特典についてだが何がいい?』

「1、俺は白恋中に行きたいから北海道に転生させてほしい

2、吹雪とは幼馴染みで

3、最高級の観察眼

4、身体能力の向上

5、他の必殺技も練習すれば使えるようにお願いします。」

『なんじゃ？それだけでいいのか？』

「ああ。これだけあれば十分だ」

『あい、わかった。それではお主を転生させよう。では、達者でな』

「ああ、行ってくる！」

第2話 主人公設定

主人公設定

名前 高梨 蓮

性別 男

身長 156cm

体重 54kg

性格 とにかく頭がキレル。相手のプレーを見てすぐにその対策を考えるのが得意。

明るく、マイペースで家事が得意でいつも白恋中の皆にごはんを作っている。

オリオンの刻印の時の用なプレーは基本せずチームプレをする。

趣味 吹雪とのサッカー。家事。トレーニング

ポジション F W

必殺技 オーバーヘッドペンギン

ペンギン・ザ・ストライク

スプリントワープ

エターナルブリザード

家族構成 父親、母親の3人

キック 88

ドリブル 54

ブロック 32

キヤッチ 20

テクニック 78

スピード 68

スタミナ 62

ラッキー 30

属性 風

チームプレイを心掛けているがたまに圧倒的な個人技を魅せることもある。フオワードとして活躍するが観察眼が強く相手の隙を突くのが上手い。

吹雪との連携が上手くアイコンタクトだけで次のプレーや何を考えているのかわかる。

ここからネタバレになります。

この話ではエイリア学園編から始まります。

吹雪は原作とは違いアツヤと一つになり覚醒しています。

イナズマイレブンオリオンの刻印で出てきた原作キャラが使っていた技をどんどん原作キャラに伝え原作キャラを強化していきます。

主な変更点は以下のようになっています。

- ・吹雪覚醒済み
- ・原作キャラ強化

- ・ダークエンペラーズなし
 - ・風丸、染岡、栗松離脱なし
 - ・敵チームにオリジナルチームあり
 - ・不動は味方になるかもしれない（笑）
- です。

以上の変更点が苦手な方はブラウザバックをオススメします。

前書きにも書いてありますがこの作品は私がやりたいこと、思ったようにやっています。たいと思います。

上記のこと以外には今の所決まっていることは特にはありません（笑）

オリジナルチームと戦うためにその段階で登場している原作キャラで作者が思うチームを作り戦いに挑みたいと思います。

ちなみにオリジナルチームなのですがまだ詳細は今後決めて行きますという何にも決まっています（笑）

後々ヒロインなどをアンケートで決めようとも考えてます。

エイリア学園終わるまでは書き続けようとは思いますが。そしてその段階で皆様の声や、評価がよければ世界編も書こうと思います。

そしてオリオンの刻印のキャラは出てきません。主人公の容姿は原作のバダップの

雰囲気を少し明るくしたような容姿を想像してください。

まあエイリア学園編をやっているのでオリオンの刻印編はもうないんですけどね
(笑)

主人公設定って1000文字ってきつい……

第3話 新たなる必殺技？

俺がイナズマイレブンの世界に来てから10年が経過した。

俺の家は士郎の家の隣なため神様をお願いした通り吹雪の幼馴染になることが出来た。

この10年であったことは

必殺技を撃てるようになったこと

士郎と同じサッカーチームに入ってること

そして吹雪士郎以外の家族が事故で亡くなってしまったこと。

家族が亡くなってしまったため士郎は俺達の家で暮らすことになった。

亡くなってしまった当初はアツヤの形見であるマフラーをしていたが俺が士郎の父

さんの言葉の意味を教え、士郎とアツヤを一つにさせることに成功した。

それからは純粹に士郎とサッカーを楽しんだり必殺技を編み出したりと充実な日々

を過ごしていた。

「ねえ、蓮。蓮は何処の中学に行くの？」

「俺は白恋中に行こうと思う。北海道ではあそこにはサッカー部がないからな」

「良かった。僕も同じ考えなんだ。これでまた一緒にサッカーが出来るね」

「ああ！これからもよろしくな、士郎！」

「うん！」

そして、俺と士郎は白恋中に進学し白恋サッカー部に入部した。

来年はいよいよ原作が始まる。FFには出ないがエイリア学園編に向けさらに力をつけたいとな。

現状俺が使えるのは

オーバーヘッドペンギン

スプリントワープ

この二つだけなのだ。この二つだけでも大丈夫だと思いが念のため士郎との協力必殺技でも練習をするか。

士郎との必殺技となるとやはり最初はホワイトダブルインパクトかな？

ってことで早速練習をしよう！

「おーい士郎！俺と必殺技の練習をしようぜ！」

「うん、いいよ。けど、どんな必殺技にするんだい？」

「それに関してはもう考えてあるんだ。俺と士郎で一緒にエターナルブリザードを撃

つ。その名もホワイトダブルインパクトだ」

「けど、蓮ってエターナルブリザード撃てるの？」

「撃てないよ。だから教えてくれよ士郎」

「うーん。何だか面白そうだしやろうか」

「よっしゃー！早速やろうぜ！」

早速グラウンドに移動しエターナルブリザードの練習を始めた。神様からの特典でもらった練習すれば必殺技を使えるようになるってやつのおかげもあり何とか3日掛けて習得することが出来た。

シユートの威力は士郎よりも劣るが何とか習得したためこれからは新しい必殺技の練習になる。

まず、士郎がボールを回転させながら上に蹴りそこで俺がかかと落としをしボールを凍らせ俺と士郎が両サイドから回転し士郎は右足、俺は左足でボールを蹴る。これで撃てるはずだ。

「行くよ、蓮！ハアア！」

ボールを回転させながら上に蹴る

「オラア！」

俺はそのボールをかかと落としで凍らせ固定

「ハアアアア！ホワイトダブルインパクト!!」

ボールはデカイ氷塊となりゴールへと向かうが途中で軌道が変わってしまった。失敗してしまっただが始めてにしては大分上手く行ったと思う。

後は二人のタイミングを上手く合わせないと

「おいしい！士郎もう一度だ！」

「うん、やろう何度でも！」

それから日が暮れるまで練習を続けた。少しずつだが軌道を変化し真っ直ぐゴールへと向かうようになった。

その日の練習を終わりにし士郎と共に家に帰り夕飯を食べ1日が終わった。

それから毎日グラウンドに行つてはホワイトダブルインパクトの習得を目指して練習している。

他のメンバーは基礎トレーニングのため走り込み、パス練習、ドリブルなどを行っている。今の白恋はパスもドリブルも正直言つて上手くないから少しでも上手くなつてもらわないとFFで優勝出来ないからな。

ちなみに俺と士郎はトレーニングの定番である重りを足に付け学校内で鬼ごっこをしている。重りは片足に5kgで計10kgの重りを足に付けているのだ。

士郎は最初は余裕そうにしていたがこの重りの真価が発揮されると足取りが重く辛

そうにしていた。

「ハア：：ハア：：この重りがこんなに辛くなるなんて：：」

「ああ。試合終盤になるときつともつと足が重くなり疲れると思う。だが今のうちから練習をし試合をフルで戦えるようにするにはもってこいさ」

「うん：：確かにこれはいいね：：」

士郎は大分落ち着いたのか呼吸が安定してきている。

士郎が回復したところで再び鬼ごっこが始まったのだった。

第4話 必殺タクティクス!

あれから数日後のことだ

漸く必殺技が完成した。完成した時に士郎と共に喜び成功したことの感傷に浸っていた。

それからというものの俺と士郎はホワイトダブルインパクトの強化を行った。

ゲームとかでは使えば使うほど技のレベルが上がったが実際はどうなるんだろ？

アニメを見ていると使えば使うほどつてこともなくV2からV3へと簡単にレベルが上がることもあった。

負けたくない、そんな気持ちで進化することもある。きっとサッカーへの熱い思いがレベルアップの秘訣なんだろうな。

だから俺はサッカーをするときは自分の気持ちに正直になりサッカーと心から向かい合い楽しもうと決意した。

俺が決意を決めてから数ヶ月が経った。ホワイトダブルインパクトは順調に威力を増してきた。

そのおかげかエターナルブリザードの威力も格段と上がっていた。

いつも通り部活で練習をしていると士郎が

「ねえ蓮。必殺タクティクスって知ってる？」

「ああ。聞いたことはあるが実際に使っているチームを見るのは少ないよな。それがどうかしたか？」

「実は僕、考えていることがあるんだ。」

「どんなやつだ？」

士郎の話を聞いてみると、自軍の中盤を固め氷の壁でブロックしボール付近の相手選手を行動不能にするとのことだった。

ん？待てよこれ、何処かが聞いたことがあるような…… あっ！これってイナズマイレブングの白恋中の必殺タクティクスの絶対障壁じゃないか！

「いいね！中盤でボールを奪い一気に全線へとパスをすればカウンターのチャンスも生まれる訳だ」

「流石蓮だよ。僕が考えていたこと以上のことを思い付くなんて」

「思い立ったが即練習だね！全員集めるぞ！」

早速士郎と一緒にメンバーを全員集め必殺タクティクスの内容を伝えた。その中でメンバーを考えた。

とりあえず俺と士郎とキーパーである函田先輩は抜いたとして中盤でボールを奪う

となるとMF、DFになるからこのタクティクスを行うメンバーは……

「このタクティクスは居屋、烈斗、喜多海、目深、荒谷、雪野のメンバーでやってもらいたい。絶対障壁は3人、2人、1人の順番になり表面の層を厚くする。そして相手の突破する方向に合わせ移動し行動を不能にするという難易度の高いタクティクスだ。烈斗、それから喜多海を中心にこのタクティクスを完成させてほしい。」

「了解……」

「了解です！」

6人は早速タクティクスの練習をしにグラウンドへと向かった。残ったメンバーでは基礎トレーニングの向上のため走り込み、ドリブル、パス練習を行った。

俺と士郎はバウンドさせずダイレクトパスでの練習を行った。

その内フライング・ルート・パスとかやりたいしね

練習の日々を過ごしあつという間に1年が過ぎてしまい、今年はいよいよ原作が始まる年になった。FFに出ようとも思ったが何故か出場することが出来なかった。もしかして、影山のせいなのか？

いやまさかな……

今までの練習成果を簡単に纏めると

- ・ 必殺タクティクスの絶対障壁の完成
- ・ 基礎能力の向上

・ 俺は相手を見ずとも次の行動がなんとなくわかるようになった。

以上の3点だ。

最後のやつをもっと鍛えれば神のタクトが使えるかもしれないな

「士郎、FFは雷門中が優勝したらしいな」

「うん、みたいだね。僕はてつきり帝国学園かと思っただけどまさかゼウス中なんて学校が出場し帝国がボロボロにされるなんてね」

「ああ。だがあのゼウス中キャプテンであるアフロディイの実力は本物かもな」

「あのシユートは強烈だけれども僕たちのホワイトダブルインパクト、エターナルブリザードのが威力は増すけどね」

「今年は何故かFFには出場出来なかったけど来年こそは出場して僕たち白恋が優勝を頂くよ」

「ああ。俺たちは誰にも負けないさ」

士郎と一緒にFF大会について話していると荒谷に呼ばれ部室に行きテレビ画面を除くとそこには校舎が壊されている雷門中の姿が映されていた。

『我々は遠き星エイリアより舞い降りた星の使徒である。我々はお前たちの星の秩序に従い、自らの力を示すと決めた。』

その秩序とは・・・サッカー!!

サッカーはお前たちの星において、戦いの勝者を決める手段である。サッカーを知る者に伝えよ。サッカーにおいて我々を倒さぬ限り、お前たちはこの地球に存在できなくなるであろう!!』

そこには黒いサッカーボールを持っているレーゼとジエミニストームのメンバーが映りサッカーを使いこの地球を壊すと言っていた。

「・・・ 気に入らないね。サッカーを破壊の道具に使うなんて」

「ああ。土郎の言う通り確かに気に入らない。だがあいつら程度恐れる必要はない。俺と土郎、それに俺たちには頼もしい仲間がいるし何よりなんぴとたりとも絶対障壁を破ることは出来はしない。」

やつらが白恋中に来たら容赦はしないさ」

「そうだね。流石はキャプテンだね」

「それよりも雷門とこいつらの試合データとかはあるか? あれば俺に貸してほしいんだが」

「残念ながら残ってないんだなあ。」

そうか。雷門で戦ったのは元祖雷門イレブンの人達で着いた円堂達が着いた時にはもう壊されていたのか。もし、次見れるとしたらやつらが奈良に行った時、豪炎寺が離脱するときか

まあ豪炎寺のことは俺にはどうすることもできないから瞳子監督、鬼瓦さんに任せるとして俺たちが今するべきことはさらにチームプレーに磨きを掛けエイリア学園に向け練習をすることだな。

「さて、いつも通り練習をするぞみんな！」

「！！！！！！！！」

原作とは違い今の白恋は大分強くなっていると思う。今戦えば確実にジエミニストームに勝つことが出来るが……雷門が戦うかそれとも俺達が戦うか……そのときの雰囲気次第だな。

その後更なる情報が入り傘美野中で雷門イレブンが負けたこと、その内の何人かは怪我をして病院に入院していることが解った。さて、いよいよ奈良での試合が始まりもうすぐ会えるな円堂達と……早く来て、サッカーやろうぜ！

第5話 雷門の試合

あれから2日ほど経つとテレビではエイリア学園と雷門イレブンの試合が奈良で行われようとしていた。

俺と士郎はテレビの前に座りジエミニストームの動きを観察することにした。

「さて、見せてもらおうか。エイリア学園の実力をさ」

「……」

隣の士郎も真剣な顔して画面を見つめていた。そしていよいよ、キックオフ。

試合は原作通りへと進んでいた。豪炎寺の不調、雷門イレブンの怪我などもあり点を取ることが出来ず一方的な試合展開へとなっていた。

テレビやゲームではエイリア学園強いなど思っていたけど転生し士郎とともに力をつける今なら勝てると思っっている自分がいる。

ジエミニストームの特徴はスピード。速さで相手を奔走しパス回しをし得点するという形だ。

雷門イレブンはまだあのスピードにはついてこれてないみたいだが白恋中の皆ならあのスピードについてくる事が出来る筈だ。

「これがエイリア学園の実力か。」

「どう、蓮？ 僕は勝てそうかい？」

「それは愚問だな士郎。俺達が負けるわけない。それにジェミニストームに作戦とかも必要はなさそうだ。あのスピードを活かしたパス回しさえ防いしまえば勝てるさ」

「なるほどね。さて、僕はみんなにこのことを伝えてくるよ」

「ああ。頼んだよ士郎」

士郎は試合結果を伝えるにグラウンドへと向かっていった。

俺は改めてジェミニストームと雷門の試合を振り替えていた。

ジェミニストームはエイリア学園の中でも最弱なチームのはずだが実際に試合をして見ないと何とも言えないが負けることはないと思う。

「さて、もうすぐみんな（雷門中）が来るかな？」

雷門中 side

今は雪原のプリンス吹雪士郎と雪原のストライカー高梨蓮を仲間にしようと北海道

へとむかっていたが急にキャラバンが停止し揺れが起こった。すぐさま吉良監督が古株さんに状況を確認する

「どうしたんですか!？」

「人だ!」

古株さんが示した先には、キャラバンの通る道の傍にある地蔵の隣で寒そうに身体を震わせている男が立っていた。男の外見は小柄な体格に太眉とたれ目、紫色がかつた銀髪に薄めの黄色いユニフォームの上にジャージを着た服装をしており、隣にはサッカーボールが置いてあった。

円堂がキャラバンを出て男に声を掛け、一緒に帰って来てから風が強くなり吹雪が吹く中をキャラバンが進む。男は寒さで口が悴かじかんでいるのか最初は碌に喋れなかったが、毛布に包まって身体が温まったのか、ある程度大丈夫になったようだ。隣に座っている塔子が様子を確認する

「まだ寒い?」

「ううん、もう大丈夫」

「雪原の真ん中で何してたの?」

「あそこは僕にとって特別な場所なんだ。北ヶ峰っていつてね」

「北ヶ峰? 聞いた事あるぞ。確か、雪崩が多いんだよなあ」

「うん、そうだよ」

そんなやり取りをしていると古株さんが男に尋ねた。

「所で坊主、何処までいくんだ？」

「…蹴り上げられたボールみたいに、ひたすらまっすぐに」

「良いなあ、その言い方！」

サッカー好きな円堂が反応し男と笑い合う。そして暫く移動していると再びキャラバンが揺れたのだ。

「雪溜まりにタイヤが取られた。ちよつと見てくるわ」

「駄目だよ。山親父が来るよ」

「山親父？」

「ん？…ひいつ!？」

運転席を離れてキャラバンの外に出ようとした古株さんだったが、男に止められる。山親父という言葉に円堂が首を傾げていると、後ろから目金の悲鳴が聞こえたので皆が目金の席を見やるとなんと窓から熊が現れ、手でキャラバンを揺らして横転させようとしていた

『うわあああつ!!…ん?』

「あれ?彼は…?」

激しい揺れに皆が必死に堪えていると、突如として揺れが収まる。その事に困惑している。

「もう出発しても大丈夫ですよ」

揺れが収まつてからキャラバンの乗車口が開き、男がサッカーボールを持って現れた。窓の外を見ると吹雪でよく見えないが、熊らしき存在が倒れているような…まさかとは思うが、まさか…？

「まさか…？」

「まさかでヤンス…」

「だよねえ？」

「おお、動く…よし、いくぞ!!」

キャラバンが動くのを確認した古株さんが、吹雪を抜けるべく運転を再開。俺達も今は身の安全を優先して男に直接確認するのは止める事に。暫く走ると吹雪を抜ける事に成功し、そこで男がここで降りると告げたので停止し、乗車口にて円堂と男が別れの言葉を交わす

「本当に、此処でいいのか？」

「うん。すぐそこだから」

「んじゃー！」

「ありがとね」

男と別れ、キャラバンは白恋中へと向かった。

吹雪の中で出会った男と別れてから暫くして、俺達は白恋中に到着した。校内にアイススケート場が設置されているのが特徴的な学校で、さつそく吹雪士郎と高梨蓮に会うべく校舎へ向かう。そこで白恋中サッカー部の人達と出会い、自分達がフットボールフロンティアの優勝校だと知っておりサインや握手をねだられ、円堂や壁山が自分達が有名人になつてゐる事を実感する。

円堂が吹雪士郎、高梨蓮に会いに来た事を伝えると、先ほどキャラバンで別れた男ともう一人銀髪が特徴の男が部屋へと入ってきた。

キャラバンで別れた男が吹雪士郎、そしてもう一人が高梨蓮なのである。

第6話 練習試合!

士郎が北ヶ峰に行つてから1時間後士郎が帰つてきた。どうやら北ヶ峰で雷門中に会つたらしく途中まで送つてもらつたとのことだった。

いよいよ雷門イレブン…… 円堂守に会えるとなるとワクワクしている自分がいた。しかし、どこか心配している自分もいたのだ。

それは…… 風丸のことだ。エイリア学園との戦いで負けていく中強さを欲し神のアクアへと手を出そうとしたり強くなつたかと思えばジェネシスにボロボロに負けてしまい風丸はそこで離脱してしまうのだ。

風丸は初期から円堂を支えてきた幼馴染み。そんな彼が離脱するのは円堂にとつてもチームにとつても大ダメージとなるのだ。

現に栗松が抜けるのも風丸がチームを離脱したからでもある。

ダークエンペラーズを作らないためにも風丸、栗松、染岡の離脱を防がなければならぬ。

まずは風丸からだな。染岡は真・帝国学園まで大丈夫だし栗松はメンタルケアし必殺技でも覚えれば自信に繋がるはず。

なので風丸から強化するか。

「まずは、スピードに馴れてもらおうところからだな。そして、更にスピードに磨きをかけそして新しい必殺技を身に付けてもらう。」

疾風ダツシユのレベルを上げると、やはりスピニングフェンスはかなり強力な必殺技だからこれは確実として、福岡に行くまでに風神の舞を使えるようになったらラツキーだな……」

風丸の今後のことについて考えていると土郎が部屋に入ってきた。

「蓮。どうやら僕たちにお客さんが来たみたいだよ」

「ん、客？一体誰だ？」

「どうやら雷門中が来たみたいなんだ」

「なるほど、わかった。今行くよ」

俺と土郎は皆が待つている部屋へと向かった。

そこで待ち受けていたのは瞳子監督率いる雷門中だった。

「みんなお待ちせ。」

「待たせたな」

「……あぁ……！お前はさっきの?!」

雷門中はキャラバンに乗っていた少年が吹雪土郎だとは知らなかったのかとても驚

いていた。

「お前が雪原のプリンス吹雪士郎、そしてその隣にいるのが……」

「ああ。俺が雪原のストライカーと呼ばれてる高梨蓮だ。よろしく頼むよ鬼道くん。」

「フツ…… ああ。よろしくな」

俺の自己紹介後染岡は部屋を出て行ってしまった。それを追い掛けるように木野も部屋を出ていった。

その後は瞳子監督に言われグラウンドへと移動し小さい鎌倉の中へと入っていった。

「私たちはエイリア学園を倒すために仲間を集めてるの。音無さん。」

そう言う音無さんはパソコンをこちらに向け画像を見せてくれた。そこに映っていたのはエイリア学園に学校を壊された北海道の中学校だった。

「これ以上エイリア学園の勝手にさせるわけには行かない。」

「俺たちはやつらを倒すために地上最強のサッカーチームを作ろうとしてるんだ。だから吹雪、高梨に会いに来たんだぜ！」

「地上最強のサッカーチーム……」

「あなたたちの噂を聞いたわ。噂の実力の持ち主なら私たちと一緒に戦ってほしい。あなたたちのプレーを見せてくれる？」

「いいですよ」

「ああ。もちろんだ」

そして俺たちは鎌倉から出て白恋イレブンに試合をすることを伝えた。最初はFF優勝チームとの試合にビビっていたがあの雷門イレブンと試合をするチャンスなんて滅多にないため試合をすることにした。

「相手は日本一のチームだ。俺達の全力を見せてやろうぜ！」

「「おおー！！」」

そして俺たちはピッチに並んだ。

俺はもちろんFW。そして吹雪も今回FWに来てもらっている。

基本吹雪はDFこMFだが今回はチャンスがあれば絶対障壁を試してみたいからな。

『さあいよいよ始まりです！雷門中对白恋中の練習試合。実況は私角間圭太でお送りします！』

古株さんが笛を鳴らしキックオフとなった。

鬼道が染岡にボールを渡しドリブルで突っ込んで来た。染岡単体での突破か…それならチャンスだな！

「今だ！烈斗、喜多海！雷門相手にどこまでやれるか試してみろ！」

「ああ。行くよみんな！」

MF、DFで染岡の突破を防ぐべく立ち向かう。

「どけえええ!」

『染岡!ドリブルで相手陣地へと突っ込んで行く!』

「行くぞ!必殺タクティクス!絶対障壁!」

「何!?グワア!!」

絶対障壁を見事成功させ染岡のドリブルを止めた。

「よし、吹雪くん!」

ボールは喜多海から士郎へと繋がった。士郎はドリブルで左サイドからドンドン掛け上って行く。

「速い、速い!吹雪士郎!凄まじい速さで雷門陣内へと斬り込んで行くぞ!」

「フツお手並み拝見と行こう!」

鬼道が士郎を止めようとするが

「ふふ。さあー風になろうよ!」

士郎は鬼道とマッチアップされる前にドリブルで掛け上がる。

「何?!何て速さなんだ!」

「さあ次は君の番だよ!蓮!」

士郎は鬼道を交わすと俺へとボールを繋げてくれた。

さあーここは一発ド派手に行こうか!

「行くぜ！」

俺はゴールへと向かって一直線にドリブルをした。

途中一ノ瀬、風丸のダブルスライドイングタックルをしてきた。

「へっ！そんなんじやこの俺を止められねーぜ！」

俺は強引に二人を弾き飛ばした。

『二人を弾き飛ばしてしまった!?何てパワーだ!』

「行かせるか！キラーズライド！」

「ハアツ！」

俺は土門のキラーズライドをジャンプで交わし

円堂と一対一になった。

「行くぜ！ピイイ！」

俺は指笛をしペンギンを呼び出した。そしてボールを蹴りあげオーバーヘッドをした

「オーバーヘッドペンギン!!」

「ゴッドハンド！何だ！このパワーは!?!グワァー！」

『高梨の必殺シュートが炸裂！何と先制したのは白恋中だ!』

「何てパワーなんだ。まだ手が痺れてやがる」

「いいかこれが雪原のストライカーだ!」

「高梨!お前のシュートどうしても止めたくなつた!」

「出来るもんならな!」

俺がゴールを決めた途端瞳子監督が試合終了の宣言をした。

そんな瞳子監督になつとく出来ない染岡はボールを俺の方へと蹴つてきた。

染岡とのキック力勝負。

俺は簡単に染岡を吹き飛ばした。

「まだ士郎の実力を見せてないぜ!今度はお前が決める、士郎!」

「はあやれやれ。まあでも確かに僕の実力はこんなもんじゃない。行くよ!円堂くん

!」

吹雪はセンターラインから必殺シュートを放つた

「吹き荒れるろ!エターナルブリザード!!」

士郎のシュートを止めようと財前と壁山がシュートブロックし何とかコースをずら

すことに成功させることが出来た。

「7割くらいの実力でこんなものか。」

このシュートブロックを見た鬼道と円堂は何か作戦を思い付いたみたいだ。

「吹雪!高梨!お前たちすげえんだな!俺お前たちともつとサッカーがやりたい!」

「ああ。俺もだ！円堂！」

「僕もだよ。君たちとなら思いつきりサッカーをやれそうな気がするよ」
こうして俺と土郎のイナズマキヤラバンへの参加が決まった。

第7話 特訓開始!

試合後みんなでお雑煮を食べたり、ストーブで暖まっていると

「た、大変です!これ見てください!」

と、音無さんがパソコンをこちらに向けてるとそこには壊した学校の瓦礫の上にエイリア学園のジエミニストームが映っていた。

『白恋中の者たちよ、お前達は我らエイリア学園に選ばれた。サッカーに応じよ。断ることは出来ない。負ければ破壊が待っている、助かる道は勝利のみ』

レーゼが喋り終わると映像がぎれた

「白恋中に…」

「ああ、ついにやってくるな」

対エイリア学園に向け練習が始まった。まずは俺と士郎がチームに馴染めるように練習をしていた。

俺と士郎は白恋の時のように俺と士郎で攻め上がるプレーをしていると染岡がそのプレーに対して怒ったのだ

「やっぱり無理なんだよ!こんなやつに豪炎寺の変わりなんて!」

「それはどうかかな？」

とここで、風丸が話割り込んできたのだ。

「俺はこいつらに合わせようと思う。俺にもこいつらのようなスピードが必要なんだ。．．．そうでなければまたあのときの繰り返しになってしまう。．．．」

風丸の話の聞き、俺と士郎は顔を見合わせた。この時から風丸は精神的に来ていたんだな

「だったら風になればいいんだよ。ついておいでよ見せてあげる」

「すげえ！校舎の裏がグレンデなのか！」

士郎はスノーボードを履きスタートラインに立った。他の選手には雪玉を作ってもらい待機している

「あれで、どうやって？」

「まあー見てなよ。答えはこれから士郎が見せてくれるからよ」

士郎はスノーボードを始めた。暫くすると雪玉を転がしそれを交わしゴールへと向かった。

これは士郎が小さい頃からやっていた遊びの延長線上で思い付いた特訓なのだ。雪で滑ることにより風を馴れ段々と馴れてくると物がハッキリと見えてくるのだ

早速円堂達はスノーボードでの特訓を始めた。

円堂、壁山、栗松、目金以外はセンスがあるのか次々へとスピードに馴れてきていた。やはり染岡は気に入らないのか練習には参加してなかった。

練習が終わると夕御飯の時間になり瞳子監督の指示により食事のメニュー変更、そして30回囓むという指示が与えられたのだった

夕食後フラフラと散歩をしていると

「今日は助かったよ」

「ん？」

円堂と風丸の話し声が聞こえてきた。

「染岡と高梨達がぶつかつたときあいつらに合わせるって言ってくれただろ？あれで俺気付いたんだ。誰かに変われっていう前にまず自分から変わらなきゃ強くなかなれないって。吹雪達は凄いや。あいつらに負けてなんていられない」

「あいつを活かすにしても誰かがエイリア学園からボールを捕らなきゃな」

「ああ！風になれば出来るさ」

「なれなかつたら？」

「そんなこと言うなよ」

「力が欲しいんだ！神のアクアがあれば……」

なるほど……やはりこの時から風丸は焦っていたんだな。これは早急に対処しない

と大変なことになるな

そして、次の日俺は風丸を呼び出した

「何だ、高梨。話つてのは」

「ああ。昨日たまたま通り掛かったら円堂と話しているのを聞いちゃつてな。力が欲しいのか？」

「……聞いていたのか。ああ、円堂にも話したがエイリア学園に勝つためには力が必要なんだ。神のアクアのような力が……」

「神のアクアってのがどんなにか知らないが聞いた感じドーピングかなんかだろう？ といった辞めときな。あの手のドーピングはその後のお前のサッカー人生にも関わってくるぞ」

「そんなことは解っている！ だが！ あいつらに勝つためにはそれしか……」

「そんなに力が欲しいなら来いよ、この俺がお前に特訓してやる。この雪原のストライカーがな」

「何？ お前がか？」

「ああ。俺と士郎は幼馴染みでな。士郎のあのスピードを鍛えたのも俺だ。お前には士郎といや士郎以上の素質がある。だから特訓さえすればお前は士郎よりも速くなる」

「それほ本当なのか?」

「ああ、勿論だ」

「わかった。その特訓お願いするよ!」

「ついてきな」

こうして密かに風丸との秘密の特訓が始まったのだった。

第8話 風丸イベント

こうして風丸との特訓が始まりますは風丸に今後のことを伝えた。

「んじやまあ、やつらがいつ白恋中に来るかわからないからな。やってもらうことを言うぞ。とりあえず士郎の言ったスノーボードは続けてもらう。スピードに馴れてもらわないといけないからな。そして、次にこの重りを足につけ俺と鬼ごっこをするぞ」

「ちよ、ちよつと待て！スノーボードや重りは解るが何で鬼ごっこをする必要があるんだ！」

「これは試合にフル出場し試合終了まで疲れないようにするため…簡単に言えばスタミナを付けるためだ」

「なるほどな。」

「午前はこの特訓をしてもらい、午後は新必殺技の練習に必殺技の強化を行う。新必殺技に関してはイメージを伝えるからそれを実現させてみる。必殺技の強化に関しては疾風ダツシユをしながらドリブルをしあの木を交わしてみろ」

「な、何だか無茶苦茶だな」

「強くなりたんだろ？」

「……!? あ、ああ!」

「だったらやってみせろ。ちなみに重りは俺が言いと言うまで付けててもらおうぞ」
「わかった! やってやる!」

説明を終え早速鬼ごっこを始めた。やはり士郎と同じで最初はすぐに捕まっていた。しかしスタミナは陸上をやっていたらしくあの頃の士郎よりはあった。

何よりも強くなりたいたいという気持ちで風丸を強く動かしていた。

午前中の特訓が終わると風丸は疲れきってしまいその場で倒れこんだ

「おいおい大丈夫か?」

「ハア……ハア……。な、なんとかな。」

「最初は誰でもそうなるさ。あの士郎でも、俺でもそうだったんだからな。」

「そ、そうだったのか?」

「当たり前だ。誰でも最初から強いやつなんていないさ。みんな地道コツコツと努力し力をつけているだけだからな」

「なるほど……。な。ハア……。よしもう大丈夫だ。」

「んじや昼飯食って午後の特訓を始めるぞ!」

「ああ!」

それからエイリア学園が来るまで毎日風丸との特訓をするのであった

夕方になると意外な人物が俺に話掛けてきたのだ

「ちよつといいか、高梨」

「そちらから話しかけてくるなんて珍しいな鬼道」

「ああ。特訓も一段落したのでな。お前に聞きたいことがあったんだ。俺たちとの練習試合で見せたあのタクティクスについてだ」

「絶対障壁のことか？」

「そうだ。あのタクティクスは一体どういう仕組みなんだ？」

絶対障壁の仕組みか…… まあ鬼道ならいつか突破されることだし教えるか

「なるほどな。そういう仕組みだったのか」

「まあな。それで絶対障壁のことを聞きにわざわざ来たわけではないんだろ？」

「フツ：。まあな。実は新しいタクティクスについて考えがあつてな是非ともお前の意見を聞きたくてな」

「いいぜ、聞いてやるよ」

鬼道から聞いたタクティクスはどれも攻めに使えるタクティクスだった。柔と剛ならまだしもまさかここでルート・オブ・スカイが出てくるとはな。

どうやら俺と士郎のダイレクトパスをしているのを見て思い付いたらしいのだ。

「なるほど。どれも使い道はあるが柔と剛ならすぐにも試せば出来ると思うぜ。もうひとつの方はまず落とさずダイレクトパスで繋げる練習をする必要があるからな」

「やはり、高梨もそういう考えか。助かったありがとう」

「いや、気にするな。またいつでも聞いてくれよ」

「ああ。頼りにさせてもらおう」

そう言い鬼道は部屋を出ていったのだ。流石は天才ゲームメーカーだな。必殺タクティクスをこの頃から思い付くなんてな。それに柔と剛はオリオンの刻印編で出てきたタクティクスだしね

「さてさて、今後が楽しみだ」

あれから数日、着実に風丸は強くなっていた。土郎の言ったスノーボードもクリアしスタミナもつき今なら試合をフルで戦える。そして足の重りはなんと片足10kgまで行くことが出来た。

新必殺技に関しては段々と形にはなってきたがまだ実践で使えるのは難しいのでこれは引き続き行う予定だ。

疾風ダツシユの強化は前までとは見違えるほど速くなっていた。

最初は木にぶつかったり、ドリブルを失敗してたりしていたが今では疾風ダツシユのままドリブルをし木を交わせるまでになってきていたのだ。

「どうだ？風丸、今の具合はよ」

「ああ！高梨のおかげで自分でも分かるくらい強くなっているよ。これでようやくスピードをものにすることが出来た！」

「まあ今の風丸ならジェミニストームからボールを奪うのは簡単だろうよ。だが、折角なんだ更に上を目指すぞ」

「勿論だ！とことんやってやるさー！」

うんうんこれで暫く風丸の離脱、神のアクアに頼ることはなくなるな。後は風丸自身で続けてもらおう。

「んじゃこのまま頑張れよー！」

「ありがとな蓮ー！」

こうして俺は風丸と別れグラウンドへ向かうとそこには染岡が待っていた。

「よう、高梨待ってたぜ！俺と勝負をしないか？」

「勝負だと？」

「ああ。特訓の成果をお前で試そうと思っただけだよ」

こうして俺と染岡との勝負が始まった。

最初は染岡がドリブルをしていたのを俺がスライディングをしボールを奪う

「やはり高梨は速い！」

「雷門のストライカーはこの俺だ！」

「だが、染岡も高梨の動きについていつてる！」

そこからは激しいボールの奪いあいになった。染岡は無理矢理ボールをゴールへと蹴ったがボールはホストに当たり跳ね返ってきたのを俺はゴールへとシュートしようとしたが

「へっ！もらった……！」

すぐ近くにリスがいたためシュートを撃つことが出来ずにいると後ろから染岡のタックルをくらいボールを奪われてしまった

「今度こそもらったぜ！」

染岡はそのままボールをゴールへと決めた。その時ボールに凄いパワーが集まっていた。

もうすぐワイバーンクラッシュが完成するんだな……

「つち今回は俺の負けか」

「ふふ。そうみたいだね蓮。よく気が付いたねあの子がいたことに」

「まあな、これでも眼はいいんでね」

士郎と話していると空が急に暗くなるとエイリア学園のジェミニストームが現れた「待ってたぜ、エイリア学園。勝負だ！これ以上サッカーを破壊の道具にさせない！」

第9話 VS ジェミニストーム 前半戦

「またお前達か……なぜここにいる？」

「俺達が代わりに戦う！」

「フツ……地球人の学習能力は低いな。2度も敗れたのになぜわからないのだ。我々には勝てない」と

「宇宙人の創造力も対したことないね。私たちがパワーアップしたとは思わないの？」
「ほう……いいだろう。地球にはこんな言葉がある2度あることは3度あると！」

レーゼは持っていたボールを蹴ってきた。俺はそれをトラップし止めた

「よく知ってるな宇宙人！だが、地球にはこんな言葉もある3度目の正直ってな！」
俺はトラップしたボールをレーゼへと蹴り返した。

「ふっ……新しい仲間でも見つけたか。いいだろう相手をしてやろう」

「いよいよ、エイリア学園との試合が始まろうとしていた。」

そこにはたたくさんのカメラがありテレビ中継されているのだ。

「私たちの学校壊されちゃうの？」

「大丈夫だって！白恋中は俺らがちゃんと守るからよ！」

「そうだね。安心して見ていてよ」

「吹雪！高梨！頑張ろうぜ！」

「吹雪くん、あなたセンターバックに入ってそれから高梨くんあなたはベンチよ」

「！！「ええー！！！！」」

「ディフェンスに専念するのよ。絶対に前線へと上がらないで。エターナルブリザードは封印してもらいます」

「はい」

「うち！わかったよ」

みんなが意見するが瞳子監督は聞く耳も持たず去ってしまった

「風丸！」

「何だ、高梨？」

「前半は重りを着けたまま戦え、それを取るのは後半からだ」

「えっ!?!: : : ああわかった！」

何か風丸がやたらと素直に俺の言うことを聞くようになったな。特訓して何かあったのか？

『さあー両チームとも気合いは十分！天は人類に味方するのか！それとも見放すのか！』

運命の一戦まもなくキックオフ!』

「さあ風になろう!」

「うん!みんな、フアイトだ!」

古株さんが笛をならしいよいよキックオフとなった。染岡が鬼道にボールを渡し再びボールを染岡へとパスをした

「見せてやるぜ!パワーアップした俺達を!」

染岡がレーゼを抜いたがすぐにボールを奪われボールはレーゼ、そしてディアンヌへとパスをしたがそれを土門がカットした。

そこからは攻防一体となっていた

「みなさん、ジェミニストームの動きについていけてますね!」

「ええ、特訓の成果だわ!」

「ジェミニストームはただスピードの速いチームでそんな対したことのないチームだ。円堂達はスピードに馴れてないからやつらの動きを捉えられなかったが今はあの特訓のおかげでやつらの動きに対応できるのさ。やつらの動きに対応さえ出来れば円堂達なら勝てるさ」

「凄い自信なのね、高梨くん」

「まあな。きつと監督は前半はやつらのスピードにようにするためあえて土郎をDFま

で下げた。士郎はやつらの動きを捉えるのは簡単だからな。」

まあ実際士郎がDFにいる限り点を取られることはないだろうな。

試合の方を見ていると財前が必殺技でボールを奪い鬼道へとパスをしそのボールをダイレクトで風丸へ

「行くぞ！疾風ダツシュ！」

「っな!？」

『速い速いぞ風丸！あつという間に交わした！そのままグングン上がって行くぞ』

「行け！染岡！」

風丸から染岡へとパスをし決定的なチャンスとなった

「ドラゴーンクラッシュ！」

「ブラックホール」

だがボールはキーパーに止められ先制点とはならなかった。

そしてボールはレーゼへと渡りドリブルで仕掛けて来るがそれを円堂の指示により士郎がアイスグラウンドでボールを奪った

それからは士郎がどんどんとボールをカットしシュートチャンス潰していったが再びレーゼへとボールが渡りセンターラインからシュートを撃とうとしていた

「アストロブレイク！」

レーゼの必殺シュートの威力を削るべく財前、壁山がシュートブロックをしたがすぐに破られてしまった

「入れさせるか！爆裂パンチ！グワツ！」

そして円堂もシュートを止めれずエイリア学園にゴールを許してしまった

『何と先制点はエイリア学園だ！』

と、ここで前半が終了した。

「吹雪くん、シュートを解禁よ。FWに上がって、点を取りに行くわ」

「DFはどうするでヤンス？」

「ああ？心配すんなってお前らはやつらの動きについていける。考えてみる、今までで前半を一点で抑えられたことなんてないだろ？」

「俺ももう大丈夫です！」

鬼道が漸く瞳子監督の作戦がわかったのかみんなに説明し納得させていた。

「吹雪！どんどんゴールを狙っていけ！」

「うん、任せてよキャプテン！」

さて、ここでそろそろもう一つ解禁させるか。ここからはあいつ無双になるぞ
ついで……

「おーい風丸。後半戦だ。いよいよ解禁させるぞ」

「やっとか。ありがたい」

「前半はどうだったよ実際にやつらのスピードを見てみて」

「ああ。高梨の特訓のおかげでやつらの動きを完璧に捉えることが出来てる。それに疾風ダツシユも速くなっているのがわかる！」

「そいつは良かった。後半はどんどんボールを奪って染岡、士郎へとボールを繋げてガンガン攻めてけよ！」

「ああ！」

風丸は大分自信がついたのか表情に余裕が見られる。

第10話 ジェミニストーム 後半戦

『さあー後半開始だ!』

古株さ笛の合図で後半戦が始まった。

「みんな行け!ゴールを奪うんだ!」

試合開始早々にFWに上がった士郎がアイスグラウンドでボールを奪うと一気にゴール目指して走り出した

「さあ!まずは一点貰うよ!吹き荒れる!エターナルブリザードオオオオ!」

「ブラックホール……グワア!」

後半戦5分で士郎が早速一点を返した。キーパーのゴルレオを吹き飛ばしゴールごと凍らせたのである。

「なん……だど!?我々が失点するなどあつてはならんだ!!」

失点されたことにより今度はジェミニストームが雷門陣内へと攻め込んで来たがスピードに馴れた雷門の敵ではなく次々へと対応されていた。

それを見かねたレーゼは一人でドリブルで持ち上がってきた。

「さあ!出番だぜ、見せてやれ風丸!」

「ああー！」

風丸はDFラインから一気にレーゼの元まで走り簡単にボールを奪ったのだ

「な、なにいいいい!？」

「は、はいい！」

「前半までの風丸との動きとは違うぞ!？」

「ハハ：：。いいぞ！風丸そのまま攻め込んで行け！」

風丸はボールを奪うとすさまじく速さでゴールへとボールを運んだ

「行かせるか！グラビティシヨン！」

「遅い！疾風ダツシュ改！」

ガニメデの必殺技が発動し終わる前に風丸は進化した疾風ダツシュで相手をかわした。そしてゴール前、やはり士郎にマークは厳しくついていたがその分染岡のマークが手薄になっていた。

「行け！染岡！」

風丸はマークの薄い染岡へとパスを繋げた

「見せてやるぜ！俺の新必殺技をな！ワイバーン：：。クラツシュ！」

「止める！ブラックホール！：：。なにいい!？」

『ゴールール！雷門追加点だ！シュートを決めたのは11番染岡！新しい必殺シュート

でジェミニストームのゴールをこじ開けた!』

「バカな…… そんなことがあって…… あつてたまるかあ!!」

それから徹底して相手の攻撃を要所要所で封じ、攻撃に転じていく雷門。雷門優勢な状況は依然として変わらず、試合終了の時間が刻一刻と近づく。それが分かっているのか、ジェミニストームの動きにムラが出てきた。強引なプレーで雷門を潰そうとして来たのだ

「どけえー!」

「くっ……」

全力のスピードでぶつかってくるレーゼによつて、鬼道が持っていたボールが弾かれる。それをすぐさまダイヤモンドが拾うと、レーゼの所へ走っていく。それを見た鬼道がすぐに指示を出す

「DF! シュートの威力を削ぐんだ!」

『ユニバースブラスト!!』

レーゼとダイヤモンドの必殺シュートが雷門ゴールへと迫る

「ザ・タワー……!…… きやあ!」

「ザ・ウォール!……! うわああ!」

最後にシュートを受け止めていた壁山が吹き飛ばされると同時に、円堂は右拳を大き

く空へと掲げ、その背に金色の魔神を出現させる

「マジン・ザ・ハンドオ!!!」

限界までシュートを引き付けてから円堂が右手を前に突き出し、マジン・ザ・ハンドとユニバースブラストが真つ向から激突する

「（止めてやる！怪我をした仲間達の痛み…学校を壊された人達の悲しみ…そして、サツカーを破壊の道具にされた怒り!!今ここで、終わらせる!!）」

円堂の思いが通じたのか、マジン・ザ・ハンドはユニバースブラストを受け止め切り、円堂の右手にしっかりとボールが受け止められる。

「追加点だ！風丸！」

「ああ！」

追加点をとるべく円堂はすぐさま風丸へとパスをした。再び風丸はドリブルで駆け上がる

「疾風ダツシュ改！」

一人交わし

「疾風ダツシュ改！」

二人を交わし

「疾風ダツシュ改!!」

三人、四人と次々と交わしていく。

ゴール前は士郎と染岡がおりどちらもマークが厳しくなっていた。

それを見た風丸はそのままゴール目指してドリブルし自分でシュートを撃とうとした。風丸の新必殺技シュート……

「行くぞ！ハア！刹那ブースト！」

「何?！」

まさか自分で撃つてくるとは思わなかったゴルレオは反応に遅れそのままゴールへと突き刺さった。

『「ゴー……ゴール！追加点だ！なんとシュートを決めたのはDF風丸！凄まじい速さでゴールを奪った!」』

「選手交代！一之瀬くんに変わり高梨くんが入ります。さあ高梨くんこの試合を終わらせてきてちょうだい」

「了解です。」

俺は一之瀬と変わり試合に出た。フォーメーションも少し変わり3トップになり風丸がMFの位置まで来ていた。

「さて、最後はあれで決めるぞ、士郎！」

「うん、あれだね！」

「我々エイリア学園がただの人間ごときに負けるわけには行かないんだ！」

再びレーゼがドリブルで上がってくる。冷静さを失ったのかパスをせず独断で攻め込んできた

「スピードはお前たちだけのものじゃない！行け！高梨！」

風丸がレーゼから簡単にボールを奪い俺にパスをしてきた

「ナイスパスだ、風丸！」

俺は士郎と共にゴールを目指して駆け上がる。DFを士郎とのワンツーで交わしていく。

「行くよ！ハア！」

「オラア！」

「ハアアアアア！ホワイトダブルインパクト!!」

「うわあああああ！」

俺と士郎の連携シュートが炸裂した。ゴルレオはゴール前から逃げたためそのままゴールへと突き刺さった。

『ゴー……ール！吹雪と高梨の連携シュート炸裂！再び追加点だ！そして、ここで試合終了！雷門中の勝利だ！ジェミニストームを見事破り勝利しました。これでサッカーでの破壊はなくなり見事地球は救われました！』

「やった…： やったぞー！ー！」

笛と同時に円堂の喜びの叫びが聞こえると雷門イレブン全員で喜んだ

「お疲れ様士郎、風丸！」

「うん！」

「ああ！」

「こんな馬鹿な…： 我々が地球人に負けるなんて…：」

俺たちが喜び監督に報告をすると

「お前達は知らないのだ…： 本当のエイリア学園の恐ろしさを…： 我々はセカンドラ
ンクに過ぎない。我々の力などイプシロンに比べれば…：」

『無様だぞレーゼ』

何処からか声が聞こえると黒い煙とともにイプシロンが現れた

「デザーム様…：」

「覚悟は出来ているな？お前たちを追放する。」

「デザーム様…：」

デザームが黒いボールを蹴りジエミニストームの前に止まると光を放つとなんと
ジエミニストームは消えていた

「我々はエイリア学園ファーストランクチームイプシロン。地球の民たちよエイリア学

園の真の力を知るだろう」
「イプシロン：宇宙人との戦いはまだ終わってないんだ」

第11話 パーティー

ジェミニストームとの試合が終わり喜んでいたが新たな敵であるイプシロンが出てきたことによりまだ戦いは終わっていないんだと知った。

戦いはまだ終わってはいないがまずはジェミニストームとの試合に勝ったことを祝い白恋中でパーティーをすることになった。

そのときに円堂は怪我をしている雷門メンバーへとビデオ通話で話していた。

円堂の話によると怪我は思ったよりも大きくなりハビリさえすればすぐに復帰出来るかもしれないとのことだった。

(原作ではダメージが大きすぎて全然復帰は出来なかつたらしいか傘美野中との試合で何かがあつたんだらうな。だが、これは好都合だこのまま復帰してもらえればダークエンペラーズは完璧になくなる。)

復帰出来ると知った雷門イレブンは喜び半田達の復帰を心待にしていたのである。

「どうだった風丸? 特訓の成果はよ」

「やっぱり蓮が特訓していたんだね。どうりであの速さになるわけだよ」

「まあな。元々風丸は陸上部だったらしいからな。あの頃の士郎とはスタートが違う

し、何よりも風丸の強くなりたいたいという気持ちで頑張りますを強くしたんだよ」

「いや、これは高梨のおかげだよ。あの時高梨に声を掛けてもらってなかったら俺はここまでこれてなかった。だから感謝するよ高梨。ありがとう！」

風丸と話していると雰囲気も明るくなっており何よりも自信に満ちた顔をしていた。

これで暫く安全だな。

「強くなつたからといって慢心するんじゃないぞ。それに俺に比べればまだまだだからな」

「ああ。勿論わかってはいるさ。まだ新しいDF技は完成してないからな。その内高梨を越えてみせるさ！」

「ああ。俺も更なる高みを目指し風丸の壁となろう。」

「二人だけずるいなー。僕も負けないからね風丸くん。風になるのは僕さ」
「俺も吹雪に負けないような突破力を身に付けてやるさ」

いい感じになつてきたな。風丸の速さがあればきつとホワイトダブルインパクトもきつと更に進化するだろうな。まあまずは新しいDF技が先だけども

そこからパーティーは続きそろそろ終わる雰囲気になると円堂が急に何かを思い出したかのように叫んだ。どうやら風丸のあのスピードそしてあのシュート技を思い出したらしく風丸は円堂達に質問責めにされていた。助け船を出す間もなく風丸は揉み

くちやにされてしまったのである。

唯一俺のところに来たのは……

「なぜ、俺のところに来たんだ？」

……
「鬼道」

「なに、鍛えた本人から聞くのが手っ取り早いと思っただ。それでどんな特訓をしたんだ？」

もう、鬼道には隠し事が出来る気がしないんだが……

俺は素直に特訓の内容を話した結果明日からの練習に早速取り入れるとのことだ。

試合まで付けた状態で過ごす条件もつけて……

そんなこんなしていると風丸から話を聞いた円堂達は俺のところに来て新必殺技のアイディアをもらいに来たらしい。

面倒なので一人ずつ簡単に紹介

円堂……ゴッドハンドV

鬼道……デスクラッシュャーゾーン

風丸……氷の矢

壁山……モグラフェイント

一之瀬……ペガサスショット

土門・・・ボルケイノカット

財前・・・パーフェクトタワー

栗松・・・スピニングカット

染岡・・・ワイバーンブリザード

士郎・・・ウルフレジエンド

目金・・・ひたすら基礎練↑

以上だ。

俺が伝えたのはあくまでこんな感じの雰囲気だけで完成形を伝えてはない。あとはあいつ次第だしこの教えが吉と出るか凶とでるかはお楽しみ。

イプシロン大丈夫かなー？

第12話 新たなるチームへと

あの後はずぐに解散し一日が終わった。暫くイブシロンの予告があるまでは白恋中で出来る限りのスピードアップを目指すのと同時にそれぞれが協力して新必殺技の特訓をしている。

昨日鬼道が言った通り重りをつけての特訓となる両足に5kgの重りに円堂はそれに加えて両腕にも重りをつけ、キーパー力向上を目指した。

そんななか俺はというと鬼道と共に新たなタクティクスを考えていた。この間の柔と剛、それからルート・オブ・スカイなど攻撃面でのタクティクスはあるが士郎がFWになるとDF面が少し不安になってしまふこともあり守備のタクティクスを考えることにした。

「さて、新しいタクティクスだが鬼道はどう考える？」

「今は風丸、吹雪、高梨がいることにより攻撃面では相当な戦力となっている。…がその3人が攻撃に参加し万が一ボールを取られた場合人数が少ない中のデイフェンスとなる。それに俺たちは多分……」

「カウンターに弱い」

そう。俺たちの攻撃は前線に上がるのが俺、風丸、士郎、染岡、鬼道、一之瀬と半分は攻撃に参加するケースが多くその場合カウンターで大勢で攻められたら対処が難しくなるのだ。

なので、それを見越して鬼道は残ってる4人で出来るタクティクスがあればいいんだがそんな少数のタクティクスは難しいな

「少数でのタクティクスは今のところ思いつかないな……だが守備が不安になるならいつそのことキーパー意外での全員攻撃力をすればいい。言うならば超攻撃型のチームだな。」

「ほう。それは面白そうだな。だが守りはどうするつもりだ？まさかDF一人も残さず本場に円堂だけを残すのか？」

「ああ。俺はそのつもりだ。それにそうなればタクティクスを使えば一気に得点チャンスになるしな」

「……いいだろう。試しにやってみよう。タクティクスも含めてな」

鬼道も納得してくれ超攻撃チームへのフォーメーションになりタクティクスも全員へと伝えられた。

反対するものも勿論いたが全て鬼道が論破しなんとか納得させた。円堂も鬼道が言うことだからかすぐに納得し受け入れた。

鬼道は早速練習を始めた。俺はそれには参加せず別のやつと特訓を始めた。

「さあ、高梨！どんどん撃ってこい！」

そう。俺は円堂の新必殺技の特訓の手伝いをしている。超攻撃的サッカーを提案したんだしもしものためにも円堂にはもつと強くなってもらわないとな。

今後のエイリアチームのためにもね

「行くぞ！円堂！ピィィィ！」

俺は指笛でペンギンを呼び出した。ちなみにペンギンの色は黒色だ。

「オーバーヘッドペンギン！」

「行くぞ！ハアアアア！」

円堂はエネルギーを手に込め止めようとするが……

「グワツ！」

もちろん、必殺技でもないため止めることが出来ずそのままゴールを許してしまうのだ。

それから俺はオーバーヘッドペンギンを撃ち続けた。

円堂も何回も試すが上手く行かず全く止められなかったのだ。

「クツソー！どうしても出来ない！一体どうしたら……！」

「らしくないな、円堂。」

そこで声を掛けたのは俺ではなく途中から見ていた風丸だった。

「風丸……俺の必殺技は全部じいちゃんのノートをヒントに完成させることが出来てきた。でも、今回はじいちゃんのヒントがないんだよ。一体どうしたら……」

「円堂。確かに今までは円堂のおじいさんのノートを頼りにしてたかもしれない。それはつまり今までは円堂のおじいさんのサッカーをやっている決してそれは円堂守のサッカーではなかった。だが、今は円堂のおじいさんのサッカーではなく円堂守のサッカーをしようとしているんだ。お前は円堂のおじいさんじゃない、お前は円堂守だ、これからは円堂守のサッカーをすればいい。そうすればきつとヒントは見えてくる。」

「風丸……確かにそう……だよな！俺は俺円堂守だ！今度はおれ自身のサッカーでじいちゃんも考え付かなかったような必殺技を編み出してやるんだ！」

「ああ！頑張れよ、円堂！」

「サンキューな風丸！よし、早速続き頼む高梨！」

「ああ、なんだかよくわからないが任せろ！」

風丸がまさかの円堂に鼓舞をするとはな。ほんと風丸は一皮剥けたな。

そこからはまた必殺技の特訓をした。俺も一つだけ円堂に助言することにした。

それは……

『必殺技の組み合わせ』だ。今まで誰も試したことはないだろう。自分の撃てる必殺技を組み合わせるってことは。俺も知っていたがしたことはない。

それを円堂は試している。

そしてかれこれ特訓を続けること5時間経った。もちろん休憩をしながらだが。

そしてついに……

「オーバーヘッドペンギン！」

「ハアアアア！ゴッドハンド…… V！」

見事円堂はゴッドハンドVを完成させることが出来た。パワーも申し分なしだ。

まさかオーバーヘッドペンギンが止められるとはな。

俺ももつと力をつけないと

「いいいいいいよっしやーーーーー！ついに出来た！」

「すげえな円堂！」

「ああ！高梨のヒントのおかげさ！必殺技を組み合わせる……マジン・ザ・ハンドのパワーにゴッドハンドを組み合わせて見たら上手くいっただんだ！」

「よし、それじゃあ次はもつと技の練度を上げるぞ！」

「おう！」

こうして、また新たに一人パワーアップしたのであった

第13話 いざ、京都へ

新しいフォーメーションはこうなった

F
W

高梨 風丸 染岡 士郎

M
F

鬼道 一之瀬

財前 土門

D
F

壁山 栗松

G
K 円堂

という感じになった。風丸がまさかのDFからFWに代わり、財前がMFへと変わった。

一応、財前、一之瀬、土門が相手からボールを奪う必殺技を使えるし鬼道は司令塔として配置し、DFも壁山、栗松の二人だけになっているがこの二人もちろん攻撃にどん

どん参加してもらうつもりだ。

このフォーメーションは次のイプシロンの時に試そうと思っている。

「漫遊寺中に、イプシロンからの襲撃予告が来た?！」

俺達は暫く白恋に滞在したあとイプシロンが次に何処を襲撃するのか理事長からの連絡が来るのを待ちながら、連絡後すぐに動けるように北海道を出て南に向かつており、移動の途中で立ち寄ったコンビニの駐車場にて休憩を行っていた。そんな中、瞳子監督から次の襲撃場所が告げられた。

「ええ」

「まさか漫遊寺中に襲撃予告をするなんて……」

「知っているのか、高梨?！」

「円堂…… ああ。漫遊寺中は学校のモットーが心と身体を鍛える事で、サッカー部も対抗試合はしないんだ。だから試合の経験はほぼ無いんだが、それでもフットボールフロンティアに出れば確実に優勝候補筆頭だと他の学校が思う程に強い。言わば隠れた強豪校なんだ」

「俺も漫遊寺中の事は知っている。帝国が表の優勝校だとすると、漫遊寺は裏の優勝校だと言われていたからな」

「へえ〜！そんな凄い所なのか！」

鬼道の説明を聞いて円堂がはしゃぐ。喜ぶ顔から、凄いサッカー選手がいると思つてワクワクしているのだとまる分かりだ。そんな円堂を見てから、俺は話を続ける

「それで、世間にはあまり知られてない隠れた強豪校をイプシロンが最初に襲うつて事に驚いたんだ。今まで通りなら、今こうしている間にも周囲の学校を襲っていただろうし」

「つまりジェミニストームみてーに、学校を無差別に襲つてないって訳か」

「うん」

染岡の言葉に俺が頷くと、瞳子監督が俺達に告げる

「イプシロンを倒せば、エイリア学園の本当の狙いが分かるかもしれないわね…すぐ漫遊寺に向かうわよ！」

『はいっ！』

瞳子監督に皆で返事をし、俺達が席に戻ると同時にキャラバンが発進する。こうして俺達はイプシロンを倒すべく、京都へと向かう

「なんか、のんびりしてるよな…」

京都の漫遊寺中に到着した俺達が見たのは、襲撃予告があつたにも関わらずのんびりとした様子の漫遊寺中の生徒達の姿であつた。柵で囲っている場所の地面に大きな穴が空いているので、黒いサッカーボールが落下したのだろうと判断出来るが：・

「まさか、戦うつもりが無いのか？」

『え!?!』

「あ、いや：・。ここの学校はあくまでここは心と身体を鍛えるのがモットーで、争い事は嫌つてる。それで試合や勝負は受けない主義だから多分、話し合いで解決しようとしてるんじゃないかなつて：・」

皆が俺の方を見て驚いたので、俺は推測を口にする。瞳子監督の言葉に返事をする
と、染岡が顔を顰めて言う

「そんな話を通じる相手じゃねーだろ！」

「とにかく、サッカー部の人に聞いてみよう」

「サッカー部なら奥の道場みたいだよ」

染岡を宥めていると、後ろから土郎の声がしたので俺達は振り返る。すると、土郎が
両隣に漫遊寺中の女子生徒を連れていた

「どうもありがとう」

『どういたしまして』

「また何があつたら、よろしくね」

『はーい!』

頬を赤らめる漫遊寺中の女子生徒2人と会話をする土郎。そんな土郎を見て、俺以外は呆然となるのであつた。

そういえば土郎は昔から女の子に好かれてたよなー

その後俺達は校舎の中を歩いて奥へと向かう。少し離れた場所に蹴球道場と書かれた看板を掛けた道場を見つける

「あ、あれじゃないかしら?」

「みたいだな」

「間違いない!よし、いくぞ皆!」

円堂が走り出すと急に足を滑らせ、円堂、染岡、財前、土門、栗松、目金、壁山、風丸の順で転び下敷きになった。

目金は壁山の体重のせいもあり足を捻ると言うトラブルも発生した

「なんでここだけツルツルしてるんだよ...」

「これって... ワックスじゃないかしら?」

『『ワックス?』』

木野さんが実際に触り確かめていた。

「うっしっし！ざまあーみろ！フットボールフロンティアで優勝したからっていい気になつて…。」

「お前よくもやったな！」

財前が逃げるのを追いつけようとして柵から飛び降りると今度は落とし穴に落ちこちていた

「木暮ー！ー！！」

どこからか呼ぶ声が聞こえると木暮は逃げていった

「全くしようがないやつだ。ちよつと目を離れたすきにすぐにサボりおつて。大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫これくらい」

「申し訳ありませんでした。うちの部員がとんでもないことをしまして」

「うちの部員… あいつサッカー部?！」

「ええまあ…。」

そこから木暮の話になった。どうにも全てを敵だと思つているとか。そのため一から修行をしているとか。

そして、小さい頃に親に裏切られ人を信じられなくなつたとか

その話を聞いた途端音無さんの表情が少し暗くなっているのに気がついた

そしていよいよ本題となり場所をサッカー部の部室にと移動した

円堂が事情を説明すると、明日襲撃してくるはずのイプシロンから学校を守る為に一緒に戦おうと告げる。しかし、漫遊寺中イレブンの中央に座っている影田はその申し出を拒否。エイリア学園に戦う意思の無い事を話してお引き取りして頂く予定だと言うのだ。染岡がそんな話を通じる相手ではないと告げるも、「それは貴方に邪念があるからです」と、逆に注意されてしまう始末であった。ここで少し笑ってしまったのは内緒だ

そこで円堂が明日襲撃しに来るイプシロンに備えて今出来る事をするだけだと言い、特訓しようと呼び掛ける。その際に士郎が漫遊寺中の女子生徒2人（来た時とは別の人達だった）から河川敷でならサッカーが出来ると教えてもらい再び特訓を始めたのである

第14話 イプシロンの力

再びイプシロンに向け特訓することになった。折角だから必殺タクティクスの練習をすることにした。

まずは比較的簡単であろう柔と剛からすることにした。

柔と剛は緩いパス回しで相手を引き付けてからの強力なロングパスで一気に前線に運ぶ。というタクティクスなのだ。

パス回しは相手に取られないかつ速いパス回しをする必要があるためダイレクトパスで行う必要がある。

ルート・オブ・スカイはいわば柔と剛の進化版みたいなものだしな

「行くぞ！必殺タクティクス！柔と剛」

「一之瀬！」

「土門！」

「財前！」

「いっけー！ー！ー！」

鬼道から一之瀬、土門、財前の順にパスを回し最後に財前が前線にいる染岡へとパス

をした

「行くぞ、吹雪！」

「うん、やろう！」

「ワイバーン！」

「ブリザード！」

あれは！完成していたのか！

「止めて見せる！ゴッドハンド……V！」

新必殺技には新必殺技で対抗した円堂。見事ワイバーンブリザードを止めたのだ。何てパワーしてやがるんだよ

「ハハッ！いいシユートだ！染岡、吹雪！」

「ツチ。止められたか」

「流石はキャプテンだね」

いい感じで歯車が回り始めてきたな。着々とみんな力を付けてきている。

壁山と栗松は二人で必殺技の特訓、一之瀬と土門も基本は二人で特訓をしている。

目金は捻挫のためベンチだ。

こうして、漫遊寺での一日が終わった。

次の日の朝、突如黒い霧が漫遊寺中方面に発生した。つまりイブシロンがここにやつ

てきたということだ

俺達がグラウンドに駆け付けるとすでに漫遊寺イレブンとイプシロンが向き合っていた。

「何度言われようとも私たちは戦う意思はありません」

「では、仕方ない」

デザームが黒いボールを上に掲げると白髪の方がボールを蹴り漫遊寺中の一角を破壊した。

大事な校舎が崩壊する光景を見て影田は振り返り、目を見開いてデザームを睨む。それに対してデザームは挑発的な目付きで影田を見ると、微かに口元を上げた。それを見た影田が、怒りの籠った声で告げる

「…… やむを得ません。その勝負、お受けいたしましょう！」

デザームからの試合の申し入れを受けた影田。漫遊寺中对イプシロンの戦いが、始まろうとしていた……

漫遊寺中グラウンドにて、ユニフォームを纏いイプシロンと相対する漫遊寺中サッカークラブ。全員で左手の掌と右拳を合わせる、包拳という動作を行いながら、影田が呟く「お許しください。一時の激情に負けた、心弱き私達を……」

審判の古株さんが試合開始のホイッスルを鳴らすと、影田が全員へと言葉を送る

「遠慮はいりません！邪悪なる魂に天罰を下すのです!!」

漫遊寺のボールでキックオフ。

「なんてキレのあるボール捌きだ！」

「これなら、イプシロンに勝てるかもしれないっす！」

「いや、そんな簡単に勝てる相手ではないはず……目金！しっかりビデオでやつらの動きを記録しとけよ！」

「ええ、もちろん。わかっていますよ」

壁山の楽観的な言葉を聞きながら、俺は目金にビデオで撮るよう指示をした。するとデザームがあることを告げた

「愚かな……6分で片付けてやる」

ボールを持って走る阿太郎の前に、ブロンドヘアの女が立ちはだかる。それを見た阿太郎が、必殺技を発動させる

「竜巻旋風！」

ボールを落とした際に発生させた竜巻で、相手を吹っ飛ばそうとしたのだろう。しかし、ブロンドヘアの女は竜巻を突き破って阿太郎からあっさりとボールを奪った

『え?!』

いとも容易く必殺技を破った事に驚愕する俺達。漫遊寺ゴールへ向かうブロンドヘアーの女からボールを奪い返そうと学舎が進路を塞ごうとするが、ブロンドヘアーの女がボールを蹴り上げると既に青髪の特徴的な髪型の女が跳び上がっており、そのまま学舎は抜かれてしまう

「四股踏み……ぐあつ?!」

真仮名がディフェンス技でボールを止めようとしたが砂塵の衝撃波を真正面から受けながらも歩みを止めず、必殺技を受けながらシュートを放つ。そのシュートは砂塵の衝撃波を突き破って真仮名に激突し、なんとそのまま真仮名ごとゴールネットへと突き刺さった。ゴールを決め不敵に笑う

漫遊寺 0ー1 イブシロン

「クンフーアタック!」

阿太郎が渾身の必殺技を放つも、GKのデザームは必殺技を使う事なく、右手だけで受け止めてしまう

「火炎放射!……ぐああつ!!」

垣田が口から吐いた炎でボールにぶつけて白髪の子の放ったノーマルシュートを止めようとするが、ボールは炎を突き破って垣田の身体に直撃。背中から地面に倒れる

漫遊寺 0ー2 イブシロン

それから、ただの蹂躪であった。イプシロンの攻撃で1人、また1人と漫遊寺イレブンがグラウンドに倒れていく。最後の1人となった影田が、ボロボロの身体で呟く「む、無念だ……」

呟いた直後に、影田も倒れてしまう。漫遊寺イレブン全員が、試合続行不能な状態となってしまった。慌てて古株さんが試合終了のホイッスルを鳴らす。本当に、6分で漫遊寺に勝ってしまった……！

漫遊寺 0—15 イプシロン

「あいつ等、本当に6分で決めやがった……！」

「これが、ファーストランクチームの力……」

「ジェミニストームとは比べ物にならないくらい強いでヤンス……！」

確かに強い……ジェミニストームとは比べ物にならないほどの強さもあるがそれよりもこいつらは……サッカーが上手いんだ。

簡単に例えるならジェミニストームは素人のチームでイプシロンはサッカー上級者のチームなのだ。

相手の動きを一つ一つ封じ確実に得点へと繋げる。そして、何よりも厄介なのはデザームのキーパー力。

何とかゴールを破らないとな

皆がイプシロンの実力に驚いている中、俺はイプシロンのチーム力に冷や汗を流す。おそらく鬼道も気付いているだろう。ジェミニストームとイプシロンでは、チームとしての力がまるで違うという事に…

「やれ」

「っ、待てっ!」

デザームが左手で黒いサッカーボールを上に掲げたのを見て、円堂が止めた。そして、デザームに向かって宣言する

「まだ、試合は終わっちゃいない!俺達が相手だ!!」

「お前達が…?ふん、いいだろう」

円堂の挑戦を、デザームが承諾する。漫遊寺に代わって、俺達がイプシロンを倒すんだ!

第15話 VSイブシロン!

イブシロンが俺達との試合を承諾した後、音無さんが木暮を試合に参加させてほしいと懇願し、それを円堂と瞳子監督が認めた事で、木暮はこの試合に出る事になった。ポジションは瞳子監督に言われてDFとして出る事になり、土門や塔子等は先日の木暮の行動や垣田からの話で試合に参加させる事に不安を感じており、木暮も宇宙人との試合を怖がっていたが、音無さんに信じてると言われて一応試合に出る気にはなったようだ。

FW

高梨 風丸 染岡 土郎

MF

鬼道 一之瀬

DF 財前 土門

DF

壁山 木暮

G K 円堂

ベンチ：目金、栗松

となった。

目金にはまたビデオでの記録をお願いしている。

「さて、今回の作戦だがどうする鬼道？」

「ちようどいい機会だ。超攻撃的サッカーを試してみよう。俺らの後ろには円堂がいる。」

「ああ！ゴールは任せとけ！」

「よし、勝つぞ！この試合！」

『『『おぉー……！』』』

「雷門中。ジェミニストームを打ち破った唯一のサッカーチーム。たったそれだけの事で勝とうとは……我等イプシロンも舐められたものだな!!」

「なんだよこいつ等……本気で宇宙人に勝つ気なのかよ……？信じられねえ……俺、此処で何してんだ」

「デザームが発した言葉を受けて、俺達は軽い準備運動を行い試合へ意識を集中させていく。そんな俺達を見て木暮が襟を掴んで震えていると、デザームが告げる

「諸君！キックオフといこうか！」

「暴れ足りねえなあ…レーゼに勝ったなら、少しは手応えあんじゃねーの？」

「お手並み拝見といきましょう」

「ぶっ潰す」

「命知らずってマキユアだーい好き」

「聞けい、雷門中！破壊されるべきは漫遊寺中にあらず。我等エイリア学園に齒向かい続けるお前達、雷門イレブンと決まった!!」

「勝手に決めちゃってるよ…」

勝手に破壊対象にされた事に一之瀬が呆れた表情を浮かべていると、デザームは俺達に向かって更に告げる

「漫遊寺中は6分で片付けた。だが、お前達はジエミニストームを倒した。その実力を讃え、3分で決着とする！光栄に思うが良い」

「3分!?!」

漫遊寺中の半分の時間で倒すと宣言され、表情を顰める円堂。そしてそれは俺達も同様だった

「だから何で勝手に決めちゃうかな…」

「ホント腹立つな…私そーゆーの大っ嫌い!」

「だったら、僕達も3分で片付けちゃおう」

「面白え!!」

「あいつ等の思い通りになんて、絶対させてたまるか!」

各自でイプシロンへの戦意を滾らせる。ホイッスルが鳴れば、すぐにでも自分達の間を見てやろうと燃えていた

「エイリア学園ファーストランクチーム、イプシロンの力…思い知るがいい!」

『はい、お待たせ致しました。それでは、雷門中对エイリア学園ファーストランクチームイプシロン! 雷門イレブンの攻撃より、スタートです!』

先程までいなかったはずの角馬の実況がグラウンドに響いた直後、試合開始のホイッスルが鳴った

染岡が士郎にボールを渡し試合が始まった。士郎はすぐさま鬼道にボールを渡し前線へと上がる

「戦闘開始」

デザームの合図とともにFWへとマークを徹底させてきた。

だが、こうしてくることは漫遊寺との試合で予想済みだ!

「行け! 風丸!」

「ああ!」

ボールは鬼道から風丸へ。風丸はドリブルで掛け上がる

『風丸が上がっていくぞ!だがしかし、ここでケンビルとタイタンが立ち塞がる!』
「なるほど、ジェミニストームより確かに速いな。だが、それでも俺達のが速い!」

「風丸こつちだ!」

俺は風丸の後ろへと回り込みボールをもらう

「行くぜー!スプリントワープ!」

高速のジグザグドリブルで風丸をマークしていたケンビルとタイタンを交わし士郎へと目配せをした。士郎は目配せと同時に猛スピードでゴールへと上がる

「行け!士郎!」

「うん。吹き荒れる!エターナルブリザード!」

イブシロンのDF陣の上を通過して、吹雪のエターナルブリザードがデザームに迫る。それに対してデザームは口元を上げ

「ワームホール!」

「な...何!」

なんと士郎のエターナルブリザードが止められてしまったのだ。

デザーム...なんてやつなんだ。士郎のエターナルブリザードを止めるとは相当な力だぞ!」

「(…この滾るような感覚、何だ?)」

シュートを受け止めたデザームは、ボールを眺めながら自身が感じた物について思案していたが、少しして吹雪を見やる

「エターナルブリザードを…」

「止めやがった…!」

エターナルブリザードが通じなかったという事実が、円堂達に衝撃を与える。中でも特にシヨックを受けていたのは、シュートを止められた士郎であった

「…っ!」

「敵ながら良いシュートを撃つ。気に入ったぞ」

「…っ、褒めてくれてありがとう」

「お前達は我らエイリア学園にとって大きな価値がある。残り2分40秒、存分に戦って貰おう」

そう告げた後に、デザームは前線へ向かって右手にボールを持ち替えてロングスローを行い、ボールが弾丸のような速度で投げられた

「カットするんだ!」

『おうっ!』

鬼道の指示を聞いた染岡と風丸がボールをカットしようとするが、モールとケンピル

がマークに付いてボールに近付けず、スオームにボールが渡ってしまふ

スオームはダイレクトでフアドラへとボールを送り、サイドを走って一之瀬と土門を抜いたフアドラが逆サイドのクリプトにボールを飛ばす。ボールを持って走るクリプトを追う財前だが、距離が縮まらない

「くっ…追い付けない！」

クリプトはメトロンへとパス。巧みかつ正確な動きでパスを繋ぎ、次々と雷門のディフェンスを突破していくイブシロン。このままではまずいと感じた鬼道が、試合開始からずっと立ったままの木暮へと指示を出す

「木暮！お前も…」

「無理！絶対無理い！」

怯えている木暮を無視してメトロンはゼルへとボールを渡し、ゼルが円堂目掛けてシュートを放つ

「ガニメデプロトン！」

磁力の様なものをボールに浴びせて右手の前に浮かばせると、両手にエネルギーを溜めてそれをボールに向かって突き出し、手から放たれたエネルギーと共にボールが撃ち出された

「任せろ！マジン・ザ・ハンド改！」

『円堂！ナイスキャッチ！見事ゼルのシュートを防いだ！』

「行け、鬼道！ゴールは任せろ！」

「ほう、面白い。開始より1分。残る2分更に楽しませてもらうか」

「ゴールに円堂、木暮を残し再び全員で攻め上がる

「行くぞ！必殺タクティクス柔と剛」

鬼道から一之瀬、土門、財前へとパスをし一気に全線にいる土郎へとパスをした。

「今度こそ！エターナルブリザード！」

「ワームホール」

土郎が再びエターナルブリザードを放つがデザームに止められてしまったのである。

「クッ……」

土郎…… お前……

「面白いぞ！残り1分、私を楽しませろ！」

再びイプシロンのカウンターが始まる。前線へと上がっていたメンバーは急いで守備の方へと向かおうとしていたが土郎は動かなかつた

「土郎！急げディフェンスだ！」

「……………」

シュートを止められ動けなくなっている土郎

そんな士郎を見た俺は

「士郎…… 歯食いしばれ」

「え……」パンツ

士郎の頬を叩いた。周りが戸惑っているがそんなのは関係ない。

「士郎。シュートを2回止められたくらいでなんだその態度は」

「……」

「確かにお前のエターナルブリザードは強力な必殺技だ。止められたのも初で戸惑うのもわかる。だが、例え止められたとしても他のことを怠けるのは許さない！そんなじゃ雪原のプリンスの名が泣くぞー！」

「蓮」

「それに一人でダメなら二人でやればいい。あのと時約束しただろ。俺達はチームと一つになり完璧になるんだって」

「うん、そうだったね。ごめん蓮」

「ふっ…… 行くぞ！士郎」

「ああ！」

俺は士郎と共にデیفエンスへと向かう

「全く流石だよ雪原のストライカーは。俺も負けてられないな！ハア！スピニングフエ

ンスー！」

風丸は5人に分身し一人一人竜巻をおこしクリプトからボールを奪った。

「頼んだぞー！」

風丸からパスをもらい士郎とともに掛け上がる

「決めるよ、蓮！」

「ああ！任せろ！」

「ハアアアア！ホワイトダブルインパクト！」

「面白い止めて見せる！ワームホール…なにっ!？」

ホワイトダブルインパクトがワームホールを氷つかせたがシュートコースがそれポストへと当たってしまい外してしまった。

「まもなく3分。我等は次の一撃を持ってこのゲームを終了する」

「何…!？」

「また決めてるし…」

「聞けい、人間共！我等は10日の後に、もう1度勝負をしてやろう」

「10日？」

「だが、お前達は勝負のその日まで、果たして生き残ってられるかな？」

「何…どういう意味だ!？」

意味深な発言をしたデザームに鬼道が問うが、その答えを聞く前にデザームはゴール前からボールを蹴る。しかしその威力は、ノーマルシュートというにはあまりにも威力があつた

シュートから発生する風圧でボールは凄まじい速度でゴール前に立っている木暮に向かつて接近する

「うわあああつ!?!」

必死に逃げようとする木暮だが、既に自身の後ろにまでシュートは迫っており、もう横に避ける時間も無かつた

「木暮ー!伏せてろー!!」

「駄目、避け切れないわー!」

「木暮君!」

「うわっ!?!」

円堂、木野さん、音無さんが叫ぶ中、無我夢中で走っていた木暮は焦つて足を滑らせてしまい、転んでしまう。そんな木暮の両足の間にボールが偶然挟まってしまい、木暮の身体がシュートの勢いで横に回転し、巨大な竜巻を生み出した

『え!?!』

暫くして竜巻が消えると、逆立ちの体勢で回転する木暮が姿を現し、回転が弱まって

ボールが木暮の近くを転がり、木暮の身体が地面に倒れた

「いてっ!?! いてて…あれ?」

「…! 消えた!?!」

デザームのシュートを止めた木暮に全員が驚いていると、田堂がイプシロンがグラウンドからいなくなっている事に気付く

「イプシロンがない…?」

「3分経ってる…」

雷門さんが時間を確認し、3分が経過していた事を伝える。宣言通りイプシロンは、3分で雷門との試合に決着を付けた。試合結果こそ0-0で終わったのだ

第16話 イブシロンその後

イブシロンが漫遊寺中を去った後、俺達はデザームのシュートを止めてみせた木暮の実力を褒めた。木暮は俺達に自身に秘められた力を見せ付ける事に見事成功したのだ。しかし、実力を疑問視していた壁山達が謝罪すると木暮は調子に乗ってしまった、その後俺達に駆け寄って来た漫遊寺中サッカー部の人達がやたら大きな落とし穴に落ちたのを見て笑って逃げ出す始末になり、それに憤慨した音無さんが木暮を追い掛けようとする、漫遊寺中の監督が現れて音無さん呼び止める。監督さんは、自分の教え子達がどういふ決断をするのかを何も言わずに見守っていたらしい。そしてそれは木暮も同じで、音無さんの言葉はきつと木暮の心に伝わっているはずだと、音無さんの木暮への心遣いに感謝を述べた。

そこで俺達は、木暮をチームに加えるのか瞳子監督に確認する。デザームのシュートを止めたアレを完全に自分の物に出来れば、きつと戦力になるだろう。瞳子監督はその判断は木暮自身が本人の意思で私達といく事を望むのであれば、と言って木暮にどうするかを委ねるようだ

話が終わり俺はすぐに士郎に謝りに言った。怒っているかと思ったが士郎は笑って

許してくれたのだ。

今の状態の士郎のシュートを止めるなんて……やはりエイリア学園は侮れないな。俺の知らないエイリア石の力があるのかもしれないな。

「よし、士郎！昨日の場所で特訓だ！」

「うん、いいよ」

「ちよつと待てくれ。俺もそれに混ぜてくれないか？」

俺達に話掛けてきたのは染岡だった。今日の試合で何も出来なかつた自分が嫌になつたとのこだ。染岡とはなんだかんだ和解し少しづつだが話すようになってきている。

「ああ、いいぜ。来いよ染岡」

「一緒にやろう！」

「ああ！お前らには負けないぜ！」

F Wチームは昨日の場所へ

「風丸さん！俺達にも特訓をお願いしたいでヤンス！」

「お願いするっす！」

栗松と壁山は風丸と共に自然豊かな森の中へ

「一之瀬！俺らも負けてられねーぞ！早いところ完成させないとな！」

「ああ！行くぞ土門！」

一之瀬と土門は漫遊寺のグラウンドへ

「円堂、俺に少し付き合ってもらってもいいか？試したいことがあるんだ」

「ん？いいぜ、鬼道！」

鬼道と円堂もどこかへと消えていった

「さて、僕はビデオの編集をしますか」

目金も目金なりに戦っていた

「じゃあ私たちは」

「はい！美味しいご飯を作しましょう！」

「いいね！私も手伝うよ！」

女性陣チームは夕御飯の支度をするのであった

歯車が1枚又1枚と動き始めたのだ。

「(いいチームだわ。高梨くんが来てから雷門の雰囲気が変わった。やはりあの子をチームに声を掛けたのは正解だったわね。私は必ず止めて見せるから……父さん……)」

俺と士郎と染岡は移動を終えると染岡、士郎で新しい必殺技の練習を始めたため、俺も一人で新必殺技の特訓を始めた。

オーバーヘッドペンギンを越える更なるシユートを身に付ける必要がある。

「ハアアアアア！」

俺はペンギンを呼び出すのと同時にボールを高く蹴り上げボールに力を注ぐと呼び出したペンギンがボールへと引き寄せられた。すると、ボールが金色に輝いたのだ

「ハアアアアア！ いっけえー！ ー！」

俺はそのボールをオーバーヘッドで蹴る

すると周りから金色のペンギンが何体も飛び出しボールにくつつき巨大化した。

これこそ俺の新たな必殺技

「パーフェクトペンギン！」

パーフェクトペンギンは地面を抉りながらどんどん進んでいくが途中で分散してしまつたのだ。

「つち。もう一度だ」

こうして俺はパーフェクトペンギン、士郎と染岡もワイバーンブリザードの習得へと励んだ。

結果パーフェクトペンギンは未完成のまま、ワイバーンブリザードは見事完成した

とのことだ。

原作でも1発で出来ていたしな。

さて、次はいよいよ真・帝国学園との試合だな。

佐久間を徹底マークして封じないと。そして一番は染岡へのスライディングだな。
なんとかして染岡の離脱は防がないと

「色々ご迷惑をおかけしました。我々の為に戦った事、感謝します」

「こちらこそ、色々ありがとうございます」

次の日の朝。一旦雷門に戻り、イブシロンとの再戦に向けて調整を行う為東京に向かうべく漫遊寺中を出る俺達。垣田と円堂が握手を交わす。しかし、朝になっても木暮は姿を現さず、栗松等は来ないのかと思っていた。俺はどうせ乗っているだろうと思いい気にせず先にキャラバンへと乗った。

その後キャラバンが発進し、俺達一行は京都を出て東京へ向かう。そんな中、土門が木暮について話し出した

「いやあー、なんだかんだ言って木暮って奴は面白かったよなー」

「チームに入れなくて良かったのか？」

「ですが、あの性格ですからねえ……チームに入れたら宇宙人に勝てるものも勝てなくなるかもしれないよ」

「シビアだなあ、目金君」

「あ、あの……お話し中の所すみませんが……」

「なんだい？」

風丸や一之瀬達が話していると、最後列に座っている壁山が申し訳なさそうに告げる。皆が壁山の方を見やると、最後列を覗いた染岡が驚いた表情を浮かべた

「マジかよ!？」

「うしししっ!？」

『えええくっ!?!』

「木暮君!？」

「あはは……」

なんと壁山の隣に、いつの間にかキャラバンに乗っていた木暮の姿があったのだ。驚く俺達を見てイタズラが成功したと笑っている木暮を見て、笑うのであった。

番外編 1

番外編

「これは漫遊寺でのイブシロンとの戦いが終わってからのお話

「なあ鬼道。そろそろみんなの重りをレベルアップしようと思うんだが」

「いいだろう。だが今の重りより重い重りはどこにある？」

「それなら雷門さんに頼んで準備してもらったよ。特製をね」

俺と鬼道は全員を集め今使っている重りを預かり新しい重りも渡した。

「お、重いッス……」

「こんなんつけて練習するでヤンスか？」

今みんなに渡したのは一個 10 kg の重りだ。並みの中学生なら歩くのさえ困難になるが 5 kg の重りをつけたまま練習を出来るようになった今ならこれくらいつけても大丈夫だろう。

新しく重りをつけ直し各自練習が始まった。

ウォーキングをしたりランニングをしたりと重りになれることから始めたのだ。

「風丸。新しい必殺技はどうだ？」

「高梨か。何とか形にはなってきたよ。」

風丸が今練習をしているのはパスの技だ。中々パスの必殺技は聞かないがその練習をしている

どんだんと必殺技を覚えていくがいいのだろうか？

まあこの後のことは後々考えるところか

イブシロンが終われば次は福岡でジェネシスとの試合が行われる。

果たして今の自分達に勝てるのだろうか……そしてこのまま誰も離脱しないまま行けるのだろうかと考えれば考えるほど不安になってくる。

だけど、安心出来る部分もある。

それは今もなお成長し続けている雷門イレブン。凄いスピードで成長していつているのだ。

まるでスポンジのように次々へと吸収し自分の物へとしているのだ。

FFの頃と比べると桁違いの強さとなってるだろう。

今はみんなを信じてひたすら練習するのみだな。俺もこいつらに負けてられないからな！

「よし、風丸！一緒に練習しようぜ。その必殺技を完成させるんだ！」

「ああー」

俺は風丸と共に新しい必殺技の特訓を始めたのだ。

ちなみに他の選手も今それぞれ必殺技の特訓をしたり基礎トレーニングの向上を計ったりしている。

鬼道には目金についてももらい基礎くらいみっちり強いてもらっている。

目金が覚醒する日々はやってくるのだろうか…… お楽しみに？

絶対あいつらの思い通りにはさせないからな待つてろよ！ 『エイリア学園』

今現状の主人公のステータス

キック 35 ↓ 41

ボディ 76 ↓ 80

コントロール 32 ↓ 40

ガード 30 ↓ 35

スピード 50 ↓ 61

スタミナ 45 ↓ 51

ガッツ 37 ↓ 42

使える技

オーバーヘッドペンギン

スプリントワープ

未習得

ペンギン・ザ・ストライク

覚える予定

デスクラツシヤーゾーン

パーフェクトペンギン

オリジナル技

第17話 キャラバンでのひととき

漫遊寺中を出る際に、いつの間にかキャラバンに乗っていた木暮。勝手について来た状態なので1度漫遊寺に連絡を入れるべく、近くのコンビニに寄ってキャラバンを停止すると、瞳子監督が漫遊寺に連絡をしにキャラバンを降りていった。そんな中、栗松が木暮をチームに入れるのを反対していた

「俺は反対でヤンスー！こんな奴!!」

「うあああああ~~~~!!」

栗松が木暮を見ながら告げるが、木暮は何処吹く風で席に座って何かしている。すると、木暮が手に持っている物を見て目金が突如絶叫し、木暮が持っていた物を奪う。それは、目金が大事にしていた人形であった。ただし、その顔には髭の落書きが施されている。そして木暮の右手には、ペンらしき物が握られていた

「僕のレイナちゃんがあ!!」

「うししししっ!」

「ぼ、僕もこんな奴が、雷門イレブンに参加するなんて断固反対です!!」

「ふんっ、たかがおもちやぐらいで」

「何をー!!」

「あー!!」

「今度は何だよ?」

悪びれもしない木暮の態度に、目金が激怒する。すると、今度は栗松が叫んだ

「俺の雑誌が…」

栗松が手に取った雑誌の表面には、目金の人形同様落書きが書かれていた。目に見えて落ち込む2人に、染岡が呆れた表情を浮かべて告げる

「お前らなあ、イタズラされたぐらいで大げさなんだよ。こいつの悪ふざけに一々反応するからいけねーんだ」

「…くっ!?!」

染岡の後ろで、何故か風丸が突然口元を押さえてプルプルと身体を震えさせていた。何事かと思つて俺は染岡の背中を確認すると、でかかど「バカ」と書かれた張り紙が付いている。これを見て風丸は笑いを堪えてるのだろう

「染岡、背中……」

「ああ……?て、てめえ……木暮ー!」

「うっしししー!」

風丸が染岡に背中の張り紙を教えると、染岡は背中を確認して剥がす。そして張り紙

を見て即座に顔を真っ赤に染めて激怒。笑いながら走って逃げる木暮を追おうとする

「待てー!ぶっ殺す!!」

「染岡、ストップストップ!」

「一々反応するなってさつき言ったのはお前だろ!」

「放せー!あの野郎ー!!」

「うししししっ!」

「木暮君!」

拳を握った染岡を見て流石に暴力沙汰はまずいと思い、一之瀬と土門で押さえるも抵抗する染岡。そんな光景を見て笑う木暮を、音無さんが叱った

「皆に謝りなさい!ちゃんと謝らないと、漫遊寺に帰ってもらうからね!」

「…ごめんよ」

音無さんに言われて、木暮は目金達に謝罪の言葉を口にする。イプシロンとの試合前に信じていると言われたからか、音無さん相手だと比較的大人しいようだ。他にも2人の間に何かやりとりがあつたようだが、そこに自分から首を突っ込むような真似はするべきではないだろう

「まあ、本人も謝ってるんだからさ。な?栗松、目金、染岡」

「…キャプテンにそう言われたら、仕方ないでヤンス…」

「今回だけですよ?」

「ちっ…」

円堂が木暮の前に立って、これ以上関係が悪化させないようにと仲裁する。円堂の言葉を受けて、渋々怒りを押さえる3人。これで一件落着…とはいかなかった。俺は特に注意することなくただただ士郎と共に静観していた。

円堂からこっそり離れようとしている木暮の姿だった。円堂が仲裁をしている間に、木暮は円堂にもイタズラを仕掛けていたのだ

「っ、木暮——!!」

流石の円堂もこれには怒り、瞳子監督が戻って来るまでキャラバンの中は騒がしかった。その後、瞳子監督が戻って来て漫遊寺中の監督から許可を貰い、木暮を正式にチームに加える事になったのだった

改めて東京に向かう俺達一行。しばらくすると瞳子監督の携帯が鳴り出した。瞳子監督が確認すると、響木監督からのメールらしく、内容を読み始める

「響木さんからだわ…影山が脱走し、愛媛に真・帝国学園を設立した?」

『なんだって?!』

瞳子監督の言葉に驚愕する。中でも、円堂と鬼道が特に驚いた表情を浮かべる

「あいつ、まだ性懲りもなくそんな事やってんのかよ！」

「しかも、真・帝国学園だつて!？」

「っ…」

「鬼道?」

左手を強く握り締めて鬼道は身体を震わせる。その表情には明らかな怒りが浮かんでおり、隣に座る塔子さんはそんな鬼道を見やり心配していた。普段冷静な鬼道が、ここまで怒りを露にするのを始めて見たからだ

「よしっ！愛媛に行こう！」

「ああっ！影山のやろうとしてる事を、ぶっ潰そう!!」

「そうよ！あいつを許しちゃいけないわ!!」

円堂の発言に土門と夏末さんが同意を示す。勿論、俺も影山を放置する訳にはいかないと思っっている。すると、皆が突如怒り出した事が気になったのか、塔子さんが鬼道に尋ねた

「なあ、影山って中学サッカー協会の副会長だつたんだろ？」

「そうだ。そして帝国学園の総帥だつた。…俺達の、チームの…」

「そんな人を、何故倒さなきゃならないんだ？」

塔子さんの疑問に、鬼道の代わりに後ろの席に座る円堂が怒りを含んだ声で答える

「勝つ為には手段を選ばない奴だったんだよ!!」

「それも自分の手は汚さず、人を使って相手チームを蹴落そうとする」

「きつたねーの…」

「ああ、卑怯が服を着て歩いてるような男さ」

「それだけじゃない。あいつは勝つ為に神のアクアを作り出した」

「神のアクア?」

「人間の身体を、根本から変えてしまう物さ。神の領域にまでな」

「塔子さんに告げていた。しかし、今の栗松や風丸には迷っている表情は見られなかった。」

「結局それが、影山の逮捕に繋がったのよ」

「そいつが脱走したんだ」

「またサツカーを使って何か企んでいるのか…!」

「うわあ〜!?!」

拳を鳴らして気合を入れる円堂。すると突然壁山の叫び声がキャラバンに響いた

「壁山、どうした!?!」

「木暮君が酷いんす。これ、見てくださいよ!!」

『…っ、あははははっ!!』

そう告げた壁山の顔には、落書きがされていた。その顔を見て思わず大笑いしてしまう俺達。木暮が席を立って、前の方に立つと右手でペンを掲げる。あれで落書きをしたのだらう

「居眠りした隙に…って、何で皆笑うんスカ!? うう、栗松〜!」

「ちよ、その顔で近付かな…ぶふっ! はははははははっ!! や、ヤバイでヤンス…!!」

「くくくっ…!」

「わ、笑ってなんかないよ!」

涙目で顔を近付けた壁山を見て、栗松が嘔き出してしまう。栗松の隣に座る目金も笑い過ぎて腹を抱えて涙目になっていた。円堂が壁山に笑ってないと言うが、表情は明らかに笑っておりその発言に意味は無かった

「うしししし!」

「木暮君! シートベルトはちゃんとする! 席から立たない! 守れないなら降りてもらおうよ!」

前まで出て笑っていた木暮を、音無さんが席から立ち上がって木暮に説教をし、慌てて席に戻るとシートベルトを着用した

「しょうがない奴だなあ…」

「もおっ……」

それを見て円堂が呆れた表情で呟いた後に、音無さんも席に座った。その時だった。キャラバンの中に、まるでオナラをしたような音が音無さんの所から響いて来た。一瞬硬直した俺達だったが、顔を真っ赤にした音無さんが自身の下に置いてあったゴム状のクッションらしき物……ブーブーブーブークッションを取り出し、身体を震わせて大声で叫んだ

「……木暮君……!!!」

キャラバンに音無さんの特大の怒声が響き渡るのだった。

しかし、木暮が仲間に加わってからキャラバンによりいつそう笑顔が溢れるようになったのだ

第18話 戻ってきた影山

影山を止めるべく愛媛に着いた俺達は、一旦コンビニに寄って休憩を取っていた。各自で買い物をしたり電話をしたりして過ごしていた。

ちなみに俺もコンビニに行きドリンクと甘いチョコを買ってきた。

駐車場に戻ると、モヒカンヘアーに頭に赤いボディペイントが特徴的な男が円堂に向かってシュートを放ち、円堂がシュートを受け止めていた。それを見て俺達は円堂の所へ駆け寄る

「っ!?!大丈夫か円堂!」

「ああ…何だよいきなり!」

「愛媛まで時間が掛かりすぎじゃね? って事だよ」

「何だあいつは…」

「君、真・帝国学園の生徒ね。そつちこそ遅いんじゃない? 人を偽のメールで呼び出してにおいて、今頃現れるのは」

男が話している間に、他の皆が集まりだした。全員、今の円堂への行動で警戒心を露にしていると、瞳子監督が何処からかやって来て男に告げた

「監督、偽のメールって？」

「そもそも、この愛媛まで私達を誘導した、響木さんのメールが偽物だったの。もう確認済みよ」

「ええっ!!」

「すぐに分かるような嘘を何故付いたの？」

円堂の問いに答えた瞳子監督が男に尋ねると、男は腕を組んで瞳子監督に言葉を返す
「俺、不動明王つてんだけどさあ。俺の名前でメールしたら、ここまで来たのか？響木の名前を騙ったから、色々調べて愛媛まで来る気になったんだろ？違うか？」

「そうね。で？貴方の狙いは何？」

「なあに。あんた等を真・帝国学園にご招待してやろうってのにな」

言いながら男…不動は鬼道を見やると、話を続ける

「あんた、鬼道有人だろ？うちにはさあ、あんたにとつてのスペシャルゲストがいるぜ？」

「スペシャルゲスト…？」

「ああ、かつての帝国学園のお仲間だよ」

「何!?!」

不動の言葉に、鬼道が強く反応する。当然だ。帝国学園のメンバーは、雷門との試合

の折に全員が影山の支配下から抜ける事を望んだ。そのメンバーが真・帝国学園にいるという事は、再び影山に従う選択をしたという事に他ならない

「ありえない…影山の汚さを身を持って知っている帝国学園イレブンが、あいつに従うはずがない!!」

「そうだ!絶対ありえない!」

「下手な嘘つくんじゃねーよ!!」

拳を握って振るわせながら鬼道が叫び、円堂と染岡が続けて告げる。しかし不動は3人の言葉を受けても笑っていた

「貴様っ…誰がいるっていうんだ、誰が!?!」

「おいおい、教えちまったら面白くないだろう?着いてからのお楽しみさ(言えるかつーの)」

「くっ…!」

怒る鬼道を見て不動は静かに汗を流していた、

その後俺達一行は、不動の指示を受けてキャラバンで工場地帯を走っていた

「何処にあるの?真・帝国学園は」

「俺の言う通り走ってりや着くよ。…あ、そここの門から入ってくれよ」

不動の指定した場所から入ると、大型倉庫が並ぶ埠頭に到着。キャラバンを降りた俺達は周囲を確認するも、学校と呼べるような建物は何処にも見当たらない事に円堂が呟く

「何処にも学校なんかないじゃないか」

「てめえ！やっぱ俺達を騙したのか!!」

「短気な奴だなあ。真・帝国学園だったら、ほら…」

染岡の怒声を流して、不動は海を指差す。その直後、突如海水が噴き上がる。何事かと構えた俺達の目の前に、巨大な潜水艦が水中から飛び出し、姿を現す

「これは……」

「まさか、この潜水艦が真・帝国学園!？」

鬼道と風丸が驚いていると潜水艦の中央部分が中心から左右に開きだし、船から階段が出てきて埠頭から潜水艦の中に入れるようになった。そして階段の上には、影山が立っていた

「か、影山……」

「久し振りだな円堂。それに鬼道」

「影山……っ!!」

影山の姿を見た瞬間、鬼道が今まで見た事がない程怒りを露わに叫ぶ。それ程まで

に、今の鬼道にとって影山は忌み嫌う存在なのだ

「もう総帥とは呼んでくれんのか」

「今度は何を企んでるんだ！」

「私の計画はお前達には理解出来ん。この真・帝国学園の意味さえもな。私から逃げたしたりしなければ、お前には分かったはずだ」

「俺は逃げたんじゃないっ！あんたと決別したんだ!!」

「ふふふっ…」

「影山零治！」

指を指して告げる鬼道を見て余裕の笑みを浮かべた影山だったが、瞳子監督の声に表情を変える

「…吉良、瞳子監督だね」

「貴方はエイリア学園と何か関係があるの!？」

「さてどうかな。ただ、エイリア皇帝陛下のお力を借りてるのは事実だ」

「…!」

「エイリア皇帝陛下?」

「誰だよそいつは?」

「宇宙人の親玉っスかね?」

「つまり、エイリア学園が影山の脱走を手引きをしたって事か…？それに何の意味が…」
「さあ鬼道。昔の仲間に合わせてあげよう」

俺達がエイリア皇帝陛下という存在を推測している間に、影山は踵を返して潜水艦の中へと戻っていく

「待て影山！くっ…!!」

「鬼道！…俺もいく!!」

「おいっ！」

「円堂がいくなら、私も…っ！」

影山の跡を追って鬼道が潜水艦の中へと走っていき、遅れて円堂が染岡の声を無視して鬼道を追っていく。次いで財前が円堂を追おうとして、不動が階段の前に立って財前を止める

「お前野暮だなあ。感動の再会にぞろぞろ付いてってどうすんだよ。デリカシーがあるなら此処で待ってな」

そう言っつて潜水艦の中に入っていく不動だが原作よりも少し様子が変だと思いつつその後についていくことにした。

暫く不動の後を着いていくと辺りをキョロキョロ確認し、確認し終えると

「ハア〜マジめんどくせーな」

と言う不動の声が聞こえた

「何で俺がこんなことしなきゃなんねーんだよ」

どうやら不動は自ら影山に従っている様子ではなく嫌々従っているようだ

「そいつは興味深い話だな」

俺が不動の前へと現れると驚いた表情をしていた。流石に気づかなかつたらしい

「つち。今の聞かれてたのかよ」

「ああ、きつちりとな。詳しく説明してもらおうか」

「へいへい」

どうやら不動は本当に影山に従ってはおらず昔に不動の父親が影山相手に借金をしその返済が終わる前に蒸発してしまい、そこで影山は不動に目を付け今回の作戦に加えたとのことだ。

そして、スペシャルゲストとは帝国学園の佐久間と源田とのことだ。

影山から借りた紫色の石を見せた途端人が変わったかのように仲間になったらしい。

そして、更に禁断の技のことについても聞いた

「なるほどな。そんなことがあったとは」

「まあそれもこの試合が終わったら俺には関係のない話だけだな」

「その禁断の技ってのは厄介だな」

「ああ。それはそちらさんで上手いことやってくれや。だが最低1回は撃たせてもらおうぜ。じゃないと影山に怪しまれるからな」

「任せとけ」

俺と不動はそこで別れ俺はみんなの所に戻ることにした。ポケットに手を入れてみると紙切れに電話番号が書いてあった

不動の電話番号ゲットだぜ！

第19話 VS真・帝国学園

俺は不動とのやり取りの後はそのまま皆がいるところへと戻った。何をしていたか聞かれたが跡を追ったが道に迷ったと伝えておいた。

暫くすると円堂と鬼道が俺達の所へと戻り道案内をしてくれた

真・帝国学園の中央部分。そこに展開されたサッカーフィールドの上に、俺達は集まっていた。この潜水艦が浮上した際に左右に開いた場所は、観客席となっている。予めここで試合をする為に設計されているようだ。

「ただ金をつぎ込んだんだよ……」

「影山がどんな汚いやり方を使ってきたとしても、俺達は正々堂々と打ち破ってやる！いくぞ、皆！！」

「この試合、絶対に勝つぞ！源田と佐久間を救う為にも！！」

『おおっ！！』

円堂と鬼道の言葉に、皆で応える。次いで俺は真・帝国学園側のベンチ近くにいる帝国学園のメンバー……佐久間と源田を見る。

そこには帝国学園に似たユニフォームを着た佐久間と源田の姿を目撃した皆は驚き、

鬼道が事情を説明する

世宇子に勝って勝利の喜びを掴んだ自分とは違い、敗北の屈辱しかなかった佐久間と源田は、不動に問われた際に勝利を、強さを求めているのだと気付き、再び影山の下に付いたのだと。それが間違いだと気付かせる為にも、円堂が不動達に試合を挑んだと告げる鬼道。そして2人を救うべく協力してほしいと頭を下げた鬼道に、俺達は鬼道の想いに応えるべく、彼等を止める為に真・帝国学園との試合を始めようとしていた

「鬼道君、今日の試合貴方に任せるわ」

「ありがとうございます」

瞳子監督も俺達が試合をする事を許可し、今日の試合は鬼道に任せるようだ。影山がエイリア学園と繋がっているというのものもあるのだろうか、許可した時に普段よりも明らかに感情的な様子を浮かべていたのが気になったが…

改めて俺は佐久間と源田を見やる。右目に付けていた眼帯の中央が破けて奥から黒い瞳が見える佐久間に、髪の毛の量が増えて右頬に爪の傷のような物が二筋がある源田。見た目も雰囲気も違う2人に違和感を感じていた。何故なら、彼等は入院している状態だったはずだからだ。

やはり禁断の技を取得したことにより鬼道よりも優れていると思えば自信に満ちた顔をしていた。

だけど、佐久間、源田の思い通りには行かせねーぞ。とりあえずは最初の1発だけだ。

「この試合は、佐久間と源田を助ける為の試合なんだ…！絶対に勝つ！」

「『俺達には秘策があるのさ』…まさか、アレを使う気じゃないよな？アレは…あの技は…！」

「(鬼道、お前に見せ付けてやる…！)」

「(俺達が総帥の下で新たに得た力を、強さを!!)」

「(早く終わらねーかね…)」

不穏な雰囲気が出ているフィールドで様々な思惑が交差する中、審判がホイッスルを鳴らして試合が始まった

F W

高梨 風丸 染岡 士郎

M F

鬼道 一之瀬

財前 土門

D F

壁山 栗松

G K 円堂

ベンチ：目金、木暮

今回は木暮をベンチに下げ栗松がDFへと入った

『さあ、ついに始まりました！雷門中对、真・帝国学園の試合！』

真・帝国学園のキックオフで試合が始まった。不動が比得からボールを受け取ったと同時に佐久間が一人で攻め上がり、一気にゴール前付近まで進む。それを見て口元を上げた不動が溜め息をつきながら、佐久間に向かってボールを飛ばす

「佐久間、見せてやれ、お前の力を!!」

「やらせないでヤンスー……えっ!？」

佐久間へのパスをカットしようと跳んだ栗松だったが、後から跳んだ佐久間が栗松を抜いてボールに追い付き、パスを受け取る。病み上がりのはずの佐久間がエイリア学園との戦いで成長している自分よりも速い事に驚愕する栗松を置き去りにし、佐久間は着地すると同時にゴール前まで駆けると、何故かその場で止まる

「……うおおおおっ!」

「やめろっ!佐久間ー!!」

そして佐久間は、一度深呼吸をすると唸り声を上げて口笛を吹こうとする。その動き

を見た鬼道が、慌てて佐久間の所へ向かいながら制止の声を掛けるも、佐久間は動きを止めず口笛を鳴らす。直後、グラウンドから5匹の赤いペンギンが飛び出て空を舞う

「それは……！」

5匹の赤いペンギンは空を舞うと、振り下げられた佐久間の右足に次々と噛み付きを行い、痛みを堪えながら佐久間がボールを蹴ろうとする

「禁断の技だああ!!」

「皇帝ペンギン、1号!!ぐあああつ!!くつ……！」

鬼道が叫んだ瞬間と同じタイミングで、佐久間がボールを蹴った。同時に佐久間の右足に噛み付いていたペンギン達が再び空を飛んでボールに追い付くと、嘴で押しながらシュートにパワーを送る。最後に加速したボールの回りを囲うように飛んで、ゴールに向かっていく。だが、シュートを撃った直後に佐久間は辛そうな声を上げて両肩を掴み、身体を震わせる

「ゴツドハンド!!」

シュートのスピードにマジン・ザ・ハンドでは間に合わないと判断した円堂は、ゴツドハンドで迎え撃とうとして、シュートと激突。かつての皇帝ペンギン2号に破られた時と同じく、ゴツドハンドの5本の指にペンギン達の嘴が突き刺さる。流星は禁断の技と言われているだけのことはあるな……

だがゴッドハンドVなら止められる！

「(何だ!?!この凄いパワーは!?) うわあっ!?!」

数秒だけ耐えてゴッドハンドが粉碎され、シユートが円堂の身体ごとゴールネットに叩き込まれた

雷門 0—1 真・帝国学園

『ゴール!真・帝国学園先制!!佐久間のシユートが円堂を吹き飛ばしたー!!』

「とりあえずは一人と…!」

佐久間の放ったシユートの威力に司令室から試合を眺めていた影山もまた、嬉しげに口元を上げていた

すぐに立ち上がるうとした円堂だが、身体から伝わる痛み顔に顔を顰めて膝を地に着け左手で腹を押さえ、汗が顔に出ている

「身体中が痛い…こんなシユート、初めてだ…!なっ!?!」

痛みを堪えながら佐久間を見る円堂だったが、シユートを撃った佐久間の方が円堂よりも辛そうな表情で痛み耐えながら地面に膝と両手を着けて項垂れ、荒い呼吸を繰り返しているのを見て目を見開く。そんな佐久間に鬼道が近寄って問う

「佐久間、お前、何故…!」

「見たか鬼道、俺の皇帝ペンギン1号!」

言いながら立ち上がった佐久間は、顔に汗をだしながら口元を上げて鬼道に振り返る。その表情を見て、鬼道が顔を顰めながらはつきりと告げた

「皇帝ペンギン1号は禁断の技だ！2度と撃つな!!」

『!?』

鬼道の言葉に雷門の皆が驚く中、佐久間は鬼道の言葉を聞いて笑みを浮かべた

「怖いのか？俺如きに追い抜かれるのが…!」

「違うっ！分からないのか!?このままでは、お前の身体は…!!」

「敗北に価値は無い…勝利の為なら、俺は何度でも撃つ!!」

「佐久間…」

「鬼道！禁断の技ってどういう意味だ？それに、2度と撃つなって…」

心配する鬼道を尻目に、佐久間は歩いて自陣へと戻っていく。佐久間の後ろ姿を見てから、影山がいるであろう場所を睨む鬼道に、円堂が駆け寄って問い掛けた。他のメンバーも鬼道から説明を聞きたいのか、鬼道の周りに集まっていた

「皇帝ペンギン1号は、影山零治が考案したシュート。恐ろしい程の威力を持つ反面、全身の筋肉は悲鳴を上げ激痛が走る。身体に掛かる負担が大きい為、2度と使用しない禁断の技として封印された。あの技を撃つのは、1試合2回が限界。3回目は…」

「2度とサッカーが出来なくなるといふ事か…ぐっ!」

「円堂！お前ももう一度まともに受けたら、立っていられなくなる!!」
『っ!?』

「そんなっ……!」

円堂が鬼道の言葉を察すると同時に、体に走る痛みで顔を顰め、次いで放たれた鬼道の言葉に雷門の皆が絶句する。自分が壊れる前提で放たれる、相手の身体をボロボロにする必殺技に壁山や栗松、木暮や目金が顔を青ざめる

「この試合の作戦が決まった。佐久間にボールを渡すな!」

「うんっ!」

「その作戦、大賛成だ。目の前でそんな最悪な光景は見たくない」

つまり、佐久間にシュートを撃たせないようにすればいいんだな

ってことはこれは……よし! 試す価値はあるな

「みんな、俺に作戦がある。」

俺が声を掛けると皆の視線が一気に俺の方へも集まる。

「佐久間にボールを渡さないようにするってことはFWを封じるってことだ。」

それならつい最近俺らも体験しただろ? それと同じようにすればいいんだよ。」

「俺らも体験って……まさか!」

「なるほどな。イブシロンと同じ動きをすればいいってことだな」

一之瀬、鬼道はすぐに気付いた。それに対して俺は頷き

「そうだ。FWに仕事をさせないプレーをするんだよ。俺らが真似すればイプシロンの弱点もわかるかもしれないしな」

「やってみる価値はありそうだな。風丸、佐久間のマークしてくれ」

「ああ、任せろ！」

俺が染岡にパスを出して試合再開。染岡からパスを受け取った一之瀬が自分に迫って来る佐久間を見て不動の頭上を越えるループパスで鬼道にボールを渡し、次いで佐久間のマークに付く。2人の後ろから風丸が上がって来て、佐久間にパスが来てもカット出来るように構える

「くっ…!?!」

「お前にボールは渡さない！」

鬼道がドリブルで駆け上がり、目座のディフェンスを突破。そのまま一気にゴール前まで到達すると同時に、一之瀬と染岡が左右から鬼道の所へ集まった

「(1号を改良して、威力は落ちるが3人で撃つ事で負担を減らし、使える技にしたのが2号!) 思い出せ、これが本当の皇帝ペンギンだ! 皇帝ペンギン!!」

『2号!!』

鬼道、一之瀬、染岡の3人で皇帝ペンギン2号が放たれ、源田の守るゴールへ向かつ

て飛んでいく。それを見て、源田は口元を上げた

「ビーストフアング！」

「なっ!？」

「うおおおおおっ!」

必殺技の名に鬼道が驚いている中、源田は両手首をくっ付けるとシユートの正面に手を構え、唸り声を上げながらシユートに合わせて両手を広げ、まるで噛み付くように上下からボールを挟んで力を込める。シユートの勢いが完全に殺され、源田の両手に収まった

「がっ……ぐおおおおおっ!」

皇帝ペンギン2号を完璧に止めた源田が口元を上げたその時、突然その場で膝を着いて蹲ると、辛そうな叫びがフィールドに響き渡った

「まさか、ビーストフアングまで……」

「鬼道! ひよつとして、今の技も……」

「ああ。ビーストフアングだ。皇帝ペンギン1号と共に封印された禁断の技だ……!」

『っ!!』

「つて事は、ビーストフアングも同じく身体を破壊する技……」

「源田にあの技を出させるな!」

「シュートを撃つなって事だな」

ボールは痛みを耐え抜いて立ち上がった源田から弥谷、弥谷から不動へとボールが回る

「佐久間！」

「渡す訳にはいかない！」

不動が佐久間に向かってパスを出すのが、風丸がカットし、俺にパスをした

「頼んだぜ、士郎！」

シュートを撃てないと誰しもが思っていた。

だが、しかし俺はゴール前にいる士郎へとパスをしたことに驚いていた。

「遅いよ！エターナルブリザーード！！」

咄嗟にビーストファンングを出そうとした源田だったが、もう遅かった。士郎のエターナルブリザーードがボールに叩き込まれ、シュートは源田の横を通過して、ゴールネットをボールが揺らした

雷門 1-1 真・帝国学園

『ゴール！！源田は反応出来ない！！雷門追い付いたー！！！！』

「っ、よしー！」

源田にビーストファンングを出させずに点が入った事に、俺が拳を握って笑みを浮かべ

る。そして喜んでいるのは当然、俺だけではない

「いやったあー！」

「ビーストフアングを出させず、本当にゴールを決めちまいやがった！」

「ナイスシュートだ士郎！」

よし、これで同点となり前半終了のホイッスルが鳴った。

後半はこう上手く行くだろうか…。何かしら対策をしてくるはずだ

第20話 後半戦へ！

後半戦が開始した。

得点は1ー1の同点でスタートし後半早々佐久間が前線へと走るが風丸、そして士郎も佐久間のマークにつきパスをすべてカットしていた。

イブシロン対漫遊寺の時のようにFWに満足の行く仕事をさせないプレーを心掛けたのだ。

不動は仕方なく他のFWへとパスをするが全てDFに阻まれていた。

雷門がボールを奪うと一気に攻撃へとシフト変更をした。鬼道を中心にパスを回し相手を翻弄した。

そして、もう1点を取るために染岡と士郎が前線へと上がっていたがやはり士郎へのマークは厳しく中々パスを出せる状態ではなかったため俺へとパスが集中していた。

「行くぞー！スプリントワープ！」

俺はドリブルで攻め上がる。源田に必殺技を出す暇を与えないためにもスピードのあるシユートか不意打ちによるシユートのどちらかが必要だ。

だが、今は士郎へのマークが厳しいためエターナルブリザードによるシユートは厳し

い。かといってこのまま俺がシュートを撃つても源田に必殺技を使われるだけなら、ここは！

「行け！風丸！」

「つな!!」

俺がパスを出した方には今まで佐久間のマークをしていた風丸が前線へと上がっていた。風丸も同じことを思ったのか佐久間のマークを一之瀬、土門に任せ前線まで来てくれていたのだ

「ハア！刹那ブースト！」

「くっ……」

源田は咄嗟のことでブーストフアングが間に合わず得点を許してしまったのだ。

『ゴール！雷門追加点だ！源田にブーストフアングを使わせるまもなくシュートを決めた！』

きつと、パワーシールドなら間に合っただろう。けども源田は使わなかった。

禁断の技を使い鬼道に勝ちたかつたんだろうな。さて、後はひたすらFWの役割を潰してしまえば問題なく勝てるな。

こんなかでも一番シュート力があるのは佐久間の皇帝ペンギン1号だ。

それさえ封じてしまえば円堂に止められないボールはないしな

後半はあつという間に終わりを告げようとしていた。ボールを奪ってはパスで回すことによりボールを相手に渡さないようにしつつ、時間を稼いだ。

そして気がつけば試合終了の笛が鳴っていた

『試合終了です！見事雷門中が真・帝国学園をくだし勝利しました！』

「負けた、だと…がっ!？」

「佐久間!？」

試合終了を宣言され、敗北したという事実を認識した佐久間が身体を走る激痛により意識を失い、その場に崩れ落ちる。倒れた佐久間に駆け寄る鬼道達。そんな光景を見て、瞳子監督が携帯で救急車を呼ぶ

「救護を要請します!！」

「佐久間!！」

「おい!しつかりしろ!!」

「佐久間は無事か!？」

「源田…」

「佐久間…佐久間!！」

倒れた佐久間に鬼道と土門が呼び掛けるも返事は返ってこない。それだけ酷い状態

なのだと認識していると、右肩を左手で抑えながら源田がやって来た。気付けば、佐久間と源田以外の真・帝国学園のメンバーはいつの間にかフィールドからいなくなっている。源田は佐久間の傍によると、痛む身体を無視して佐久間を抱え呼び掛ける。禁断の技を使い、ボロボロになっていて二人の姿を見て、鬼道は歯を噛み締め、身体を震わせてこの状況を作った元凶の名を叫んだ

「っ、影山——

!!!」

叫ぶ鬼道の姿を、司令室で試合を眺めていた影山は無言で見つめる。そんな影山の後ろには、いつの間にか姿を消していた不動の姿があった

「まさかあれ程ヤワだとは。使えねー奴等だ。ねえ、影山総帥」

「使えないのはお前だ！」

「……」

不動には視線を移さず、その声に怒りと軽蔑を混ぜて影山は不動に告げる

「まさかお前が裏切るとはな…ふっ覚えているがいい。」

そう告げて、影山は機械を操作して座っていた椅子ごと真・帝国学園の…潜水艦の上部へと移動する。すると、空をから声が響き渡る

【見つけたぞ影山！もう逃げられんぞ!!】

「この声…鬼瓦さんの声だ！」

突然聞こえた声に円堂が上を見上げるとヘリが飛んでおり、それに乗って鬼瓦が拡声器を手に持って影山に向かって叫んでいた。その直後、爆発が発生し、潜水艦が激しく揺れる

【全員、脱出しろー!!】

鬼瓦の指示に従い、急いで脱出しようとする俺たちだが鬼道の姿が無い事に気付く

「つ、鬼道がいない!?!」

「え!?!…まさか!?!」

「お兄ちゃん…!」

鬼道を心配する円堂達。その鬼道は一人、影山のいる場所にまでやって来て影山と対峙していた

「佐久間と源田をあんな目に遭わせて満足か!!」

「満足? 出来るわけなからう! 常に勝利する最高のチームを作り上げるまではな!!」

「くっ…」

「これまで私が手掛けた最高の作品を教えてやろう!」

そう言って、影山は唇を噛み締める鬼道に指を差して告げる

「それは…鬼道! お前だ!!」

「!!」

影山の言葉に、目を見開く鬼道。すると潜水艦が爆発で沈み始め、ヘリから縄梯子でぶら下がった鬼瓦が鬼道を掴んで真・帝国学園から離れさせる。そして潜水艦は脱出ボードに乗った円堂達が見守る中、一際大きな爆発を起こし、巨大な水柱を発生させて沈んでいった

「影山——
!!!!!!」

第21話 いざ、稲妻町へ!

埠頭に戻った俺達は鬼道と鬼瓦さん、更に影山に呼ばれてやって来ていたらしい響木監督と合流。そして今、瞳子監督が呼んだ救急車に佐久間と源田が運ばれようとしていた

「悪いな、鬼道……久し振りだっというのに、握手も出来ない」

「構わない」

佐久間の手に自身の手を重ねながら鬼道が言うと、佐久間は鬼道の方を見やると微笑しながら告げた

「おかげで目が覚めたよ……でも、嬉しかった。一瞬でも、お前の見ている世界が見えたかな……身体、治ったら……またサッカー、一緒に……やろうぜ……」

「ああ……待ってる」

鬼道の返事を聞いた後に、救急車に乗せられる佐久間。そして源田も救急車に乗り、2人の乗った救急車は去っていく。俺達は見えなくなるまで、佐久間と源田の乗った救急車を見つめる事しか出来なかった……

そこでキャラバンへと戻ろうとした際、瞳子監督と響木監督の声が聞こえたのでその

場所へと近づいた

「瞳子監督：君は間違っている。監督の仕事は選手を守る事だ。それが、相手チームの選手だったとしても」

「選手の身に起こった事は、全て私が責任を負います」

「だが佐久間と源田はああなつた。同じような事が起こらないと約束出来るか？」

「では、他の方法があつたとしても言うんですか!? 私は勝たなければならぬんです、どんな事をしても! これは、そういう戦いのはずです!!」

普段の瞳子監督からは聞かない、感情的な言葉が聞こえる。それに驚きながらも、俺は静かに2人の会話を聞き続ける

「俺は、この戦いは何かを守る為の物だと思つていたのでがな…本当にこれが望んだ結末なのかね? 何が君を動かしている?」

「…失礼します」

瞳子監督がこちらに向かってくるのを見て俺はすぐさまみんなの方へと戻つたのだ。

真・帝国学園との試合を終えた俺達雷門中サッカー部は、キャラバンに乗つて東京に向かつていた。元々、イブシロンとの試合後に調整の為一旦戻る予定だったので、影山の脱走で遅れてしまったのだ

「皆、見えて来たぞ!稲妻町だ!」

古株さんの言葉に、久しぶりの稲妻町の町並みを皆で嬉しげに眺める

「戻って来たなあ!」

「ああつ!」

「久しぶりっス!」

「なんか懐かしい感じがするでヤンス!」

「何々?皆感動しちゃって?」

「お、あの馬鹿でかい、稲妻の付いた鉄塔はなんだ?」

稲妻町に来たのが初めての塔子さんは皆の反応に少し驚いているようだ。窓から外を眺めていた木暮が鉄塔に気付くと、円堂が木暮に教える

「あれが稲妻町のシンボルなんだ!」

「へえ〜」

少し興味を持ったのか、じつと鉄塔を眺める木暮を見て軽く笑い、円堂は皆に告げた
「イブシロンとの次の試合まで1週間だ!皆!バツチリ調整して、レベルアップしていこうぜ!」

『おおーっ!』

そうしている間にキャラバンが河川敷を通りかかると、河川敷のグラウンドを見て円

堂が急に声を上げた

「古株さん！止めて下さい!!」

円堂の言葉に、古株さんがキャラバンを止める。すると円堂はバスを降りて河川敷を見やる。その直後、雷門サッカー部のジャージを着た白い髪の男がボールを蹴り上げて俺達のいる高さまで跳び上がって姿を現すと、空中で右に回転。足に黒い炎を纏わせてシュートを放った

「ダークトルネード!」

放たれたシュートは、一直線にゴール前に構える男に向かっていって……って、特徴的な頭にあのユニフォームは!?

「杉森!」

「ロケット拳!」

ゴール前で構えていた男：御影専農中のGKである杉森が、右手を前に突き出して右拳の形をした気の塊が発射し、白髪の男が放ったシュートと激突。暫く拮抗するも、右拳を押し返してシュートが打ち勝った

「ぐうっ!!」

迫るシュートを止めるべく両手で受け止めようとした杉森だったが、シュートの威力に負けて両手を弾かれて体の横をシュートが通過。そのままボールはゴールネットを

揺らした。その光景を見て、円堂が目を輝かせる

「今のシユートすげー!」

「あいつ、雷門中のジャージ着てるけど誰だ?」

「杉森と練習してるみたいだけど…」

「杉森!」

風丸と俺が白髪の子について考えている間に円堂がグラウンドに向かって走り出し、次いで風丸と俺もキャラバンを降りて円堂の後を追う。駆け寄りながら円堂が杉森を呼ぶと、杉森と白髪の子がこちらに気付いた

「おお、円堂!」

「久しぶりだな!」

「帰って来てたのか」

「ああ。皆で今、雷門中に戻るところなんだ!」

「そうか」

円堂の話の聞いて、キャラバンを見やる杉森。

「それで、そつちの雷門のジャージを着てる人は?」

「ああ、こいつの名前は闇野カゲト。皆、シヤドウって呼んでいる」

「シヤドウ?」

「宜しくな、シャドウ！なあ、なんでうちのジャージ着てるんだ？」

「雷門の転校生だそうだが……」

『転校生？』

杉森の言葉に3人で入部希望の転校生なんて、一之瀬以外いたかなと首を傾げていると、先程まで黙っていた白髪の男……シャドウが口を開いた

「学校が壊された日にな」

「エイリア学園が来た、あの日か……」

「俺は強い奴が好きだ。だから雷門に来た。ところがお前達はもう、旅立った後だった」

「それは……悪かったな」

「お前達の所為じゃない」

シャドウからしたらせつかく雷門に転校したのに学校は破壊されていて俺達はおらず、1人放置されていたようなものだ。流星に同情してしまうな……

「だから、うちにスカウトしたんだ」

「スカウトって……？」

「対エイリア学園の、バックアップチームだ」

『ええっ!?!』

「実はお前達がエイリア学園と戦っていると聞いて、じつとしていられなくなっとな。」

「強い奴を集めている所なんだ」

「そうだったのか……」

「日本一になったお前達でも、何度も挑戦しなければ倒せなかった相手なんだろう？ 噂では、次の敵は更に強いと言うじゃないか。だからな、俺達がバツクに控えてるんだと思つて、安心して戦つてほしいんだ」

「杉森……」

杉森の言葉に感動したのか、円堂が目を潤ませて喜びの涙を流す。円堂はそれを手で拭うとシャドウに尋ねた

「シャドウ、お前も？」

「ああ。だが、俺の今のシユートでは宇宙人に勝てない。完成したその時に、チームに加えてもらおう」

「円堂、皆応援している。絶対、負けるなよ！」

「ああ……ありがとう。ありがとう、杉森！ すぐー元氣もらったぜ!!」

笑みを浮かべて右手を握り合う円堂と杉森。それからキャラバンでの移動を再開し、俺達は雷門中に到着。理事長が新しい雷門の校舎の建設を見守っており、俺達の姿を見てこれまでの戦いを労ってくれた。理事長は瞳子監督とこれからについて話し合うらしく、俺達はつかの間の休息を頂く事となった

自分の家族に顔を見せたい者もおり、一旦解散する事にした俺達。皆がそれぞれ動く中、稲妻町に来るのが始めての者達かというと、木暮は音無さんに何処かに連れていかれ、塔子さんは父である財前総理に色々連絡をするらしい。

そして俺と士郎は円堂の家の元へと向かったのだ。

第22話 大阪ナニワランド

次の日、俺達は次なる目的地……これまでの行動パターンからエイリア学園のアジトがあると推測される大阪に、調査に向かおうとしていた。

木暮は音無さんとの練習のおかげで見事旋風陣を取得したのである。

「気を付けてくれたまえ！吉報を待っているぞ！」

『はいっ！……いってきます!!』

理事長の言葉に全員で返事をして、キャラバンは大阪に向かって動き出す。俺は稲妻町を見るのは暫く先になるためしっかりと目に焼き付けておいた。

エイリア学園のアジトを探すべく、大阪にやって来た俺達。そして、そのアジトがあるという場所に来たのだが……

「着いたは、いいけど……此処が奴等のアジト!?!」

「遊園地、だな……」

「ジェットコースター！空飛ぶ絨毯！フリードロップも！すつごいなく!!」

着いた場所は、ナニワランドと呼ばれる遊園地であった。円堂と風丸が困惑した声を

漏らす中、木暮だけがはしゃいでいた。きつと始めてなんだろうなこういうところに来るのが……

「こんな所にアジトなんてあるのかしら？」

「間違いないわね。再度確認してもらったけど、奴等のアジトがあるのは、このナニワランドの何処かよ」

「つてもなあ……」

「どう見ても、ただの遊園地にしか見えないでヤンス」

「とにかく手分けして探すわよ。ここでじっとしても仕方ないわ」

確かにここにはエイリア学園の特訓場がある。そこを使えば今よりもっとパワーアップすることが出来るだろう。それにそろそろ必殺技を完成させたいしね

「ああつ……あれ、吹雪は？」

「円堂」

雷門さんの言葉に返事をした円堂は、士郎の姿が見えない事に気付き周囲を見渡す。そこで俺は円堂に呼び掛け、指である方向を指し示す。示した先には、女の人にナンパされている士郎の姿があった

「怪しいアジトですよね〜？」

「だったら、あつちだと思えます」

「うん」

「…は、ははは…」

女の人に挟まれながら歩いていく土郎に、俺達は呆れた表情を浮かべるしかないのであった。

「この世界の女性はめっちゃめっちゃ積極的だよな」

それから、俺達は各自でナニワランドの捜査を行う事にした。

「蓮先輩！私と一緒に探しませんか？」

「ああ、いいよ。音無さん」

「それでは行きましょう！」

そう言うと音無さんは俺の手を引っ張りどんどん中へと進んでいった。メリーゴーランドやジェットコースターなどただただ遊園地を満喫した。

そして俺たちは今

「…此処からでも、分からないか」

観覧車に乗っていた。遊園地全体の建物の上を確認したいからだだった。

結局何も分からず観覧車を降りて出ていく途中

「さて。高い所には何も無いとすると、後は建物の中かな？…あ、風丸、土門！」

「高梨」

「お、そつちはどうだった？」

遊園地で一番大きな建物であるお城に入ろうとすると、中から風丸と土門が出て来たので合流。3人で情報を共有するも、いずれも有力な手掛かりはなかった。それから一旦他の皆の報告を聞こうと入り口付近に戻り、暫くして一之瀬と土郎以外のメンバーが揃った

「そつちもなかったか」

「ああ」

「もうっ！だから遊びに来たんじゃないって言ってるでしょ!!」

「ちえっ……」

円堂と鬼道が情報を共有している横で、音無さんが木暮の首根っこを掴んで説教をしていた。どうやらずっと遊んでいたようだ

俺達？俺達はちゃんと上から探したさ

「あれ、一之瀬君は？」

「そう言えば、まだだな」

「一之瀬なら外みたいだよ」

一之瀬の行方について話していると、土郎の声が聞こえたので俺達は揃って声の方を見やると、土郎がいた。…さつきとはまた別の女の人を両隣に連れて

「この子達が、出ていくのを見たんだって」

『こんにちは〜!』

『……………はあ』

女の人を連れて微笑む士郎に、俺達は呆れ果てるしかなかった：

一之瀬を探すべく士郎が連れていた女性から場所を聞いた俺達は、その場所に…商店街にあるお好み焼き屋に来ていた

「此処だな、あの子達が言っていたのは。よしっ」

「エイリア学園って、またけつたいな名前やなあ…あ、いらつしやいー!」

「あつ、円堂!」

円堂がお店の扉を開けると、エプロンを付けた水色の髪と肌黒が特徴的な女の子の対面に座っている一之瀬を発見する。声が若干嬉しそうだが…何かやったのだろうか?

「何やってるんだこんな所で?」

「あ! お好み焼き!! ズルいっスよ先輩だけえっ!!」

「ちよつと、色々あつてさ…」

「こいつ等か? さつき言つてた仲間うちゅーんは?」

「うん。じゃあそういう訳だから。お好み焼きどうもありがとう。ほんとすっごい美味

しかったよ」

「そうはいかへんで!!」

水色の髪の女の子にそう言つて、一之瀬は椅子から立ち上がつて俺達の所に戻ろうと足早に店を出ようとした。が、それを水色の髪の女の子は一之瀬の前に立つて手で制した

「あんた、ウチの特製ラブラブ焼き食つたやろ?あれ食べたなら結婚せなあかん決まりやねんで?」

「けっ…」

『結婚——!?!』

水色の髪の女の子の発言に、一之瀬と俺達は驚愕して叫ぶ。…つて、なんでお好み焼き食べたなら結婚しないといけないんだ!?

「で、でもそんな話一言も…!」

「当たり前やん。そんなん言うたら食べへんかつたやろ?ま、そういう事やからエイリア学園なんか知らんけどお、そいつ等はあんたらだけで倒してなあー。そんなわけだーダーリンはウチとここで幸せな家庭築よつてな」

「ダーリン!?!」

一之瀬の抗議を切り捨て、木野さんがダーリン呼びに驚いている間に水色の髪の女の

子によって俺達は店の前から追い出されてしまう

「お好み焼き食わへんのやったら、出ていってな。商売の邪魔やから」

「お、おい。ちよつと待てよ…」

「ほなさいなら！」

円堂が必死に呼び止めようとするが水色の髪の女の子は一切止まらず、扉を閉めて表札を閉店に変えてしまう。次いで、店の中から慌しい音が響き出した

「ダ〜リンそんな逃げんでもええやん〜」

「だからダーリンじゃないって！」

「またまたも〜照れてもうてから〜」

「うわあつ！円堂ー！！土門ー！！」

店の中から一之瀬の必死の叫びが聞こえる。…一体どうしてこうなった

「一之瀬先輩、このままお好み焼き屋さんになっちゃうんスカ？」

「そんな事ある訳ないだろ！何が結婚だ!!」

壁山の言葉を否定し、円堂が一之瀬を救うべく店の扉に手を掛けようとした。…あつ

「円堂ー！」

「うわっ!!？」

「ちよ、どいてんか」

慌てて円堂の肩を掴んで右に引き寄せると、ピンクと白を基調にしたユニフォームを着た女の子が円堂のいた場所に割り込んで来た。今の、俺が円堂を引き寄せなかつたらぶつかってたな

「何するんだ!」

「何って、リカ呼びに来たに決まってるやろ」

割って入って来た女の子に風丸が文句を言うのと、横から同じユニフォームを着た、赤い眼鏡と頭に花柄のバンダナを巻いた小柄な女の子が現れ、更にその後ろには同じユニフォームを着た1人の子達が集まっていた

「キュート!」

「シック!」

「クール!」

「ウチ等浪速のサッカー娘!」

「キュートで、シックで、クールな大阪ギャルズ、CCC!!」

何故か自己紹介をする女の子達。見た感じは女子サッカーチームのようだが…なんかややこしい事態になってないかこれ?

「何やっとなのやりカ!練習時間とつくに過ぎてんで…って、えっ、嘘…?皆、リカが結婚相手見つけたでー!!」

『結婚相手〜!?!』

案の上、店の中を見て：正確にはラブラブ焼きとやらを食べた一之瀬を見て女の子達は店の前で無茶苦茶騒ぎ出した。もう収拾がつかないだろこれ。

俺はこの状況を楽しんでいるといつのまにか目金が提案していた。雷門と大阪ギヤルズCCCで試合を行い、勝ったチームが一之瀬を連れて行けるといふ物であった。その条件を水色の髪の子：リカさんが承諾し、試合場所へと一之瀬を連れてチームの人達と一緒に向かってしまう。

第23話 VSCCC

「やっぱり目金があんな条件出したのが悪いんじゃないの？」

「ですが塔子さん、あのまま一之瀬君を放っておく訳にもいきませんし、これが現状一番確実に助けられる方法だったんですよ？」

「まあ、そりやそうかもしれないけどさ。はあ……」

目金の反論に、明らかにめんどくさそうな表情を浮かべる財前さん。まあ確かに、相手が普通の女子チームだから、皆のやる気は著しく削がれていた。

女子チームが相手だからと油断をしているなこいつら……

「女の子だからなんて関係ない！しまつていこうぜー！」

「よーし決めるぞ、旋風陣！」

普段通りの円堂とついに完成した旋風陣を使って試合で活躍したい木暮、そして自身の将来が掛かっている一之瀬。

そして楽しそうに見ている音無さん。

『雷門ファンの皆さんお待ちせしました！本日は此処大阪から、一之瀬の運命を賭けた1戦！雷門中対キュートでシツクでクールな大阪ギャルズCCCの試合をお送りいた

します!!』

そんな事を考えている間に、いつの間にか来ている角馬の実況を聞いて俺は試合に意識を向け、ポジションに着く。

フォーメーションはいつもと同じ攻撃的フォーメーションとなっている。

F
W

高梨 風丸 染岡 士郎

M
F

鬼道 一之瀬

D
F 財前 土門

壁山 木暮

G
K 円堂

控え：目金、栗松

「フレツフレツ、ギャルズー!そんな東京モンに負けたらあかんでー!!」

相手のベンチから、浦部さんに似た女性が旗を振って檄を飛ばす。あの人が大坂ギャ

ルズの監督なのだろうか？

「つてか絶対親子だろ!？」

「任しときー! ウチが必殺通天閣シュート、ぶち込んだるでー!!」

『通天閣シュート!?!』

「そんなシュートあつたつけ？」

「アホやなあ。そんなん適当に言うとならええねん。どうせ分からへんねんから」

『だああ?!』

確かに適当に言つても俺達はわかりもしないから作戦としては間違つてないな。

それにしても既にこつちのペースを崩されてるようなと思つていると、審判役の古株さんがホイッスルを鳴らし、試合が開始した

大阪ギャルズのキックオフで試合が開始した。浦部からボールをもらつた御堂がドリブルで左サイドから上がつていく。士郎が止めようとするも、天王寺が御堂を庇う様に立つて士郎の行く手を阻む

「よしっ…えっ!?!」

止めようと御堂の正面に回り込んだ風丸だったが、御堂は風丸に向かってウイंकし、それを見て思わず驚いた風丸の隙を突いて跳び上がって突破すると、再度跳び上

がって浦部の頭上へとパスを繰り出す

「リカー！」

「えいつ！」

それを浦部は跳び上がって受け取ると同時にボレーシュート。弾丸のような速度のシュートが一直線に雷門ゴールに向かって放たれた

「っ!？」

しかし放たれたシュートは円堂の正面に飛んで来たので、シュートのスピードに驚きながらも円堂はボールをしっかりと両手でキャッチする。そして受け止めたシュートの威力にまでも驚く

「この威力…すげえ！」

「ちっ…」

「おしい〜」

「アホかりカ！そんな正面からだないすんねん！コーナー狙わんかコーナー!!」

「そんなん言われんでも分かつとるわ!!ちよつとミスっただけやろ!!」

何故か試合中に味方の監督と選手で口喧嘩が発生している中、土郎が風丸に駆け寄って声を掛ける

それにしては女子にしては中々のシュート力だな…やはりエイリアの特訓場はそ

んなにも凄いのか

早く使つてみたいなあー

「風丸君、動きが鈍かったけど体調悪いの?」

「いや、大丈夫だ。今のは……っ!」

士郎の心配に大丈夫だと言いつつ、風丸は御堂を見やるとまたウイंकが送られてきて、若干顔を赤くする風丸

男の子だねー風丸も

「ドンマイドンマイ、次は止めてくぞー!」

円堂がボールを投げ、土門が受け取る。そこから鬼道、一之瀬、俺へとパスを軽快に繋いで攻め上がり、串田と万博が止めに来たタイミングで俺が後ろにパス。後方から上がって来た土門がボールを受け取り、左サイドを駆け上がってゴールを狙う

「きゃー!」

「えっ、当たった?」

堀のディフェンスをかわそうとした土門だったが、突然堀が倒れたのを見て慌てて動きを止めてしまい、その隙に串田が土門からボールを奪って浪川に繋ぐ

「玲華、いくでー!」

「こっちこっち〜!」

「つて、届く訳ないか〜…ふっ!」

「くっ!」

一之瀬が浪川を止めようとして、浪川はゴール前の御堂へのロングパス…と見せかけて、ボールを足で挟んで高く跳び上がり、遅れて一之瀬も負けじと跳び上がってボールを狙って足を振り、浪川の足からボールを弾き飛ばす。弾かれたボールを塔子が拾う

「よしっ!」

「デیفエンス!」

「うえっ!」

「つて、デیفエンスウチかいな」

「何だよそれ!」

「(やはり厄介な相手だな!) だが行かせねーぞ!」

「鬼道!」

「……………」

しかし梅田の言動に釣られて、ボールを奪われてしまう。だが前線から戻って来た俺がスライディングで梅田からボールをすぐに奪い返し、俺は鬼道へとボールを送る。雷門が苦戦している中、瞳子監督は無言で大阪ギャルズの選手達を見つめていた

「吹雪…なっ!」

ドリブルで上がりながら前線の吹雪にパスを出そうとした鬼道だったが、ボールを蹴ろうとした瞬間、なんと突然現れた虎浜がボールの上に乗れり、素早く足を動かし玉乗りで鬼道から離れていく。その光景に流石の鬼道も啞然となる

「何だ…」

そこから大阪ギャルズは空を舞うように高さを使ったプレーとこちらのペースを乱すプレーを入れ混ぜ、雷門にボールを奪わせない展開を仕掛ける。対する雷門も大阪ギャルズの実力に全力で対抗するも、なかなかボールを奪えない。前半残り僅かとなったタイミングで、蛸谷から御堂がボールを受け取ってゴールへ走る。それを止めようと、風丸が御堂に突っ込む

「これ以上いかせるか!」

「プリマドンナ!」

「なっ…」

御堂が蹴り上げたボールからピンク色の光が放たれ、それに風丸が困惑していると、御堂が風丸の手を掴んでクルクルとその場で回転しだし、いつのまにか御堂の動きに乗せられていた風丸と共にダンスを行い、最後は華麗なジャンプを披露。ジャンプしてから自分が何をしてたのか気付いた風丸が、その場でガクリと膝を着いて項垂れる

「不覚…」

項垂れている風丸を尻目に、前線まで駆け上がった御堂が浪川にボールを送る。そこに、チャンスと見た木暮がボールを受け取った直後の浪川に迫る

「今だ！旋風陣!!」

「ううっ!？」

逆立ちの体勢から横に高速回転し、浪川からボールを奪う事に成功する

「やったあ!」

「へへっ」

旋風陣の成功にベンチで見えていた音無が喜び、ボールを奪った木暮が音無に向かって親指を立ててポーズを決める。その直後に、中谷の慌てた声が木暮の耳に届く

「木暮、早くパスを!」

「もろたで!」

「うわあっ!？」

「木暮君…」

一之瀬の声に反応する間もなく、近付いていた浦部にボールを取られてしまう木暮。格好付けた所為でミスをした木暮に、音無は引き攣った表情を浮かべる

「リカ!玲華!」

ボールを奪った浦部は一度堀へとボールを戻すと、一気にゴール前まで駆け上がる。

そして堀がゴール前へとボールを高く上げると、浦部と御堂はボールの所まで跳び上がって手を繋ぎ、浦部が左足で、御堂が右足で体を外へと広げながら同時にボールを蹴った

『バタフライドリム!!』

空中から放たれたシュートはゴールの左側へと飛んでいく。円堂はすぐにシュートの正面に移動し、シュートまでの距離からパンチングで弾く事を選択して爆裂パンチを迎え撃とうとした

「爆裂パンチ…えっ!？」

だが、パンチをボールに叩き込もうとして突如シュートの軌道が変わり、パンチが空振る。そしてまるで蝶が飛んでいるかのような不規則な動きをして驚いている円堂の横を通過し、ゴールが決まった

雷門 0ー1 ギャルズ

『決まったー!なんと大阪ギャルズ先制です!!』

「いよっしやー!」

ベンチの選手達と共に喜びリカママ。ここで前半終了を告げるホイッスルが鳴り、まさかの大阪ギャルズ優勢で前半が終わってしまった

「嘘だろ、リードされて前半終了なんて」

「いや、強いよ彼女達」

「何であんなに強いでヤンスか？信じられないでヤンス」

ハーフタイムになって、リカママの用意したたこ焼きを食べている大阪ギャルズの選手達を見ながら土門達が会話をしていると、円堂が皆を集めて円陣を組んで告げる

「とにかく、相手のペースに惑わされるな。相手が誰だろうと関係無い！俺達は俺達のサッカーをするだけだ!!」

「まだ点差は1点だ。取りにいくぞ！」

「よし！それじゃあいくぜ!!」

『おおっ!!』

ハーフタイムが終わり、雷門のキックオフで後半戦が開始。染岡からボールを受け取った土郎がドリブルで前線に向かってる

「行くよ！染岡君！」

「ああ！決めてやる！」

「ワイバーン！」

「ブリザード！」

染岡と土郎の凄まじい威力のシュートが放たれる。迫るシュートを止めようと、G Kの土洲が必殺技で対抗する

「花吹雪……ああつ!?!」

だが、土洲の放った必殺技はワイバーンブリザードには全く通じずそのままシュートが決まった

雷門 1—1 ギャルズ

『決まったー!後半開始早々、いきなり同点ゴールだ雷門ー!!』

「やったな、吹雪!!」

「うん!」

染岡と土郎はハイタッチをした。

よし、いいぞ。これで流れが変わるぞ

そして土郎と染岡を、驚愕した表情で眺める大阪ギャルズの選手達

「なんなん、今のシュート……」

「あんなシュート、見た事ないで……」

そんな中、浦部は楽しそうな表情で拳を握って雷門を眺めていた

「……ふつ、なんかおもしろなってきたやん!」

後半開始早々に同点となり、漸く雷門の動きが良くなってきた。動きに慣れて来たの

もあって、大阪ギャルズの攻撃に対応出来るようになってきたのだ

「ザ・タワー!」

「ザ・ウォール!」

「フレイム、ダンス!!」

「あ〜ん! 必殺技使う時のダーリン格好良い!!」

「リカ、ボール取られてんのに喜んでる場合ちゃうで!」

そしてディフェンスが機能し出した事で、前半よりも余裕を持って攻撃が出来るようになっていた。

「疾風ダツシュ改!」

「スプリントワープ!」

「イリユージョンボール!」

次々に必殺技を使って攻め上がる雷門。大阪ギャルズも必死に守るが、本来の実力を発揮し出した雷門を止めるには1対1では足りず、数を使つての守備を強いられてしまい、後半ギリギリで体力が尽き掛けてしまう

「この試合、ウチが絶対に決める!」

それでも諦めず、浦部がボールを持って駆け上がり、栗松のディフェンスをかわして円堂と1対1に持ち込む

「オチは最後まで取っとくもんやで！ローズ・スプラッシュ！」

ボールに赤いエネルギーを溜め、シュート。薔薇の花びらを散らしながら、ゴールに迫る

「マジン・ザ・ハンド!!」

それに対して、円堂はマジン・ザ・ハンドで真っ向から迎え撃つ。数秒ぶつかり合つて、円堂の右手にボールが収まった

「なんやて!?!」

「土門!」

「おおっ!」

とつておきのシュートを止められて浦部が驚いている間に、円堂がボールを土門に送る。そこから鬼道にパスを出して、自身も駆け上がる

「行くぞ、必殺タクティクス!柔と剛!」

ボールは鬼道から財前、土門へとそして俺へと繋がった。

「最後はお前が決める、一之瀬!」

「行くぞ!ペガサスシュート!」

一之瀬はボールを両足で挟み込みバクテンをしつつボールを上空へと上げ青いエネルギーを溜めシュートした。

一之瀬の背後にはペガサスがいた

「花吹雪！」

花吹雪を起こして広範囲をカバーしようとする土洲だったが、一之瀬のシュートは花吹雪を突き破り、土洲の横を通過しゴールネットにボールが叩き込まれた

雷門 2-1 ギャルズ

シュートが決まった直後に、古株が試合終了を告げるホイッスルを響かせる。2対1で雷門が勝利した

『ゴール!! ついに雷門中が勝ち越した!! そしてここで試合終了ー! 2対1で、雷門中逆転勝利ー!!』

一之瀬の新たな必殺技で勝利した雷門。こうして、一之瀬の結婚騒動は幕を閉じた。が、この試合で一之瀬により惹かれた浦部は、更に一之瀬に猛アタックを仕掛けるのであった

「やつぱりダーリン最高やわ〜! あんな凄いサッカー出来るやなんて〜! もう一生放さへん!!」

「ちよ、ちよつとそれじゃ話が…!?」

一之瀬の受難は、まだまだ続く…

「ダーリ〜ン!!」

「うわあああつ?! 円堂ー!! 土門ー!!」

『あはは…』

ついに一之瀬も必殺技を完成させたか……。いい感じだ。また歯車が一つ噛み合った。

それにこれFFIになったらどうなるんだろ……

まあーいつか!

第24話 イブシロン戦に向けて

俺達は今、ナニワランドのお城の奥に来ていた。大阪ギヤルズCCCとの試合後に、彼女達があそこまで強くなったのに何か秘密でもあるんじゃないかと目金が尋ねた所、浦部さんが一之瀬が知りたがっているという理由で訳を言いたがらないチームメンバーに頼み込み、俺達を此処まで連れて来たのだ。

ついに、エイリアの特訓場に行くことが出来るのか。次のイブシロン戦までまだ時間ある。必殺技の他にもそろそろ新しいタクティクスの練習をするか。

「下に何かあるの?」

「でも、さつき風丸と一緒に調べた時は行き止まりで何も無かったぞ?」

「と、思うやろ?」

そう言つて、浦部さんは手摺りの一部を下げた。直後、俺達のいた場所が下へとゆっくり落ちていく。落ちた先には、巨大な地下施設が用意されていた

「これは…」

「此処がウチ等の練習場やで」

「此処が……!」

浦部さんに案内されて、施設を見て回る俺達。色々なトレーニングマシンがあり、その一つを目金が実際にやってみる事に。ベルトコンベア式のランニングマシンで、左右に傾いたり上下の坂を作ったり、時間経過でレベルが上がって障害物。障害物に足を取られて目金がランニングマシンの後ろに用意されたマットに倒れる

「なんなんですかこれは！凄すぎますよ!?!」

「せやろせやろ!」

倒れた目金は驚きながらも浦部さんの説明を聞く。何でもこの施設は浦部さん達が偶然見つけたらしく、それから勝手に使わせてもらってるだけなのだとか。よくもまあー何処の誰のかもわからんやつを使うよな…:

「大丈夫やって！今まで誰も文句言うてきいへんし、怒られたら謝ればええやん」

「これだけの施設、もしかしたら…」

「まさか、エイリア学園の…?」

「エイリア? ああ、あのサツカーで地球を支配するとか言うてる連中か。あははっ! そんなに訳ないやん! ウチ等ずつと此処使つこうてるんやで? 奴等のもんやつたらすぐ取り返しに来るんちゃうか?」

「(きつとここでイプシロンとかが練習をしていたんだろな。そしてもうここには現れないということは必要ないってことだよな)」

浦部さんの話からエイリア学園への考察をしている間に、円堂が此処で特訓したいと皆に告げる。鬼道達もイブシロンとの試合までの残り3日間、此処で今まで以上の特訓が出来ると確信しており円堂の考えには賛成を示し、此処で特訓する事に決定した。因みに、最初は此処で特訓する事を渋っていた浦部さんだったが一之瀬が一言頼むとあっさり承諾した。ちよろい。後、浦部さん本人が申し出てチームに加わった。危険な戦いだと一之瀬は止めさせようと説得したが浦部さんの意思は固く、一之瀬が折れるしかなかった

それから俺達はトレーニングマシンの特訓を開始した。目金が挑んだ物の他にも、ゴール前に設置されたマシンを突破してシユートを決めるマシン、前後にベルトコンベアが動いている中攻守のフォーメーションを維持するマシン、不安定な足場の上に立つて発射されるボールをキャッチするマシン等があり、浦部さん達では攻略出来なかったという最高レベルのクリアを目指す

「くそっ、もう1度だ!」

「やってやろうじゃねえか!」

「攻守の切り替えを意識するんだ!っ、戻れ!!フォーメーションを崩すな!!」

「くうく、手強いぜ!でもそれだけに、燃えてきた!」

途中で失敗したり上手くないながら、トレーニングマシンの特訓によつて短期間

ながらも少しずつ、しかし確実に強くなっていくのを実感する俺達であった

「鬼道、そろそろ新しいタクティクスを練習してみないか？」

「どこでか？」

「ああ。柔と剛はきつとエイリア学園も対応してくるはずだ。それに手札は沢山あった方がゲームメイクはしやすいだろ？」

「ふっ……いいだろう。」

鬼道の許可を得たため新しいタクティクスの練習を始めた。

練習が終わりキャラバンに戻ると円堂以外の雷門イレブンのメンバーがキャラバンの影から何か眺めているのを見て、俺もこっそり見ることにした。

円堂と木野さんが会話していた。：皆で出歯亀してるのか？

「1つのボールを皆が力を合わせてゴールに運ぶ。たったそれだけの事なんだけど、難しくって、面白くって、楽しくって、ワクワクするんだ！」

「見てる私達にも分かるよ」

「試合だけじゃない、特訓も楽しい。やればやったぶんだけ上手くなるのが嬉しいんだ。」

昨日の自分を越えたって感じですか」

「昨日の自分を越えるのが楽しい…ふふっ！円堂君らしい」

2人の会話に、で顔を合わせて頷き合うと、キャラバンの影から出て2人に話し掛けた

「楽しいのは円堂だけじゃないぜ！俺達も昨日の自分を越えるのが楽しい。だからどんな特訓にも耐えられるんだ」

「俺も、昨日の自分を越えるっス！まずは腹筋2回っス！」

「おいおい、今まで1回しか出来なかったのかよ」

突然出て来た俺達に少し驚いた表情をしていた円堂が、俺達の言葉を受けて笑って告げる

「よーし！じゃあ、今日も特訓開始だ!!」

『おおっ!!』

円堂の言葉に返事をして、昨日の自分を越える為に特訓を開始する。

そして、あつという間に時が流れいよいよ明日はイブシロン戦となる。

それぞれ修行の成果も出ており新たに必殺技を習得したやつもいた。

「よし！明日は頑張るぞ!!」

『おおっ!!』

試合前の準備は万全。これで明日のイプシロンとの試合を全力で挑める。今度こそ、勝つんだ！

デザームが告げた、10日後の日がやって来た。突如として黒いサッカーボールが空から落下し、淡い赤紫色の光を放つとデザーム達が姿を現した

「イプシロン！」

「時は来た。10日もやったのだ、どれだけ強くなったのか見せてもらおうか」

そう告げた直後に、俺達のいる場所の下から、サッカーグラウンドが姿を現す。やはり此処はエイリア学園と関係のある場所だったようだ

「地下にグラウンドもあったんやな」

「やっぱり此処は、エイリア学園の……」

グラウンドを確認していると、カメラでもあるのかデザームが俺達ではなく、何処か別の場所を見ながら声を響かせる

「我々エイリア学園の強さを、改めて地球の民達に知らしめる時が来た。この試合により、我々に歯向かう愚かさを噛み締めるがいい。愛するサッカーで、自らの弱さを否が応でも知るだろう。そして、我々にひれ伏すのだ！」

「勝手な事言いやがって……！」

デザームの発言に、染岡が拳を握って怒りを滾らせる。前回は全く仕事をさせてもらえなかったからな

染岡の言葉に円堂と俺が応えた後、俺達は瞳子監督の所に集まって作戦を聞く

「序盤からどンドン攻めて行きなさい。今の貴方たちなら勝てるわ。これを最後の戦いにするのよ。必ず勝ちなさい！」

『はいっ！』

「いくぞ！俺達のサッカーを見せるんだ！！」

第25話 イプシロン再び！

前回イプシロンと戦ったフォーメーションと同じフォーメーションで挑む。

木暮も前回同様後半からのスタートとなる

『雷門中对エイリア学園ファーストランクチームイプシロン！2度目の対決、勝利の女神が微笑むのはどちらでしょうか！』

審判の古株さんが笛を鳴らし、エイリア学園のキックオフで試合開始。ゼルからボールを貰ったマキユアが上がり、それを阻止しようと土門、一之瀬、栗松が進路を塞ぐ。するとマキユアは、宙返りでボールを蹴り上げて自身も跳び上がるとボールに追い付き、オーバーヘッドの体勢でボールを蹴る

「メテオシャワー！」

『うわあああつ?!』

蹴った瞬間、流星群かと思えるような衝撃波が地面に向かって何発も落下し、近くにいた3人が衝撃波によって倒される。直後に地面に着地したマキユアがボールを持って再び上がっていく

「止めてみせる！」

しかしすぐに風丸がマキュアの前に立ち、行く手を阻む。突破を試みるマキュアだが、風丸はその動きに完全に対応し、マキュアを抜かせない

「っ、しつこい……!」

「マキュア!」

足止めされているマキュアに財前と壁山が迫る中、ゼルが左から上がってマキュアにパスを要求。マキュアは右に風丸達を誘導した後に、ゼルへとパスを出した

「ガニメデプロトン!はあっ!!」

距離があるが、雷門の中盤が完全に空いているのもあってかゼルがシュートを放つ。強烈なシュートが円堂に迫る。

「任せろ!マジン・ザ・ハンド改!」

「なんだと!」

ボールは見事に円堂の手に収まる。すかさず円堂は鬼道へとパスを出した

「行け、鬼道!カウンターだ!」

「行くぞ!必殺タクティクス柔と剛!」

ボールを受け取った鬼道はタクティクスで一気に攻め上がりそして染岡と士郎へとボールが繋がった。

「行くぜ!ワイバーン!」

「ブリザード！」

放たれたシュートは一直線にゴールに向かって飛んでいく。

デザームも最初から必殺技を使ってきた

「ワームホール」

ワイバーンブリザードはワームホールにより止められてしまったがボールの落下地点は勢いよくボールがめり込んでいた

「奴等のシュートにここまで威力が!?!」

「以前より、1人1人のパワーが格段に上がっている！」

2人の言葉を聞いて、ゼルは気付く。何故デザームがすぐに雷門を倒しにいかず、この廃棄された施設を雷門に使わせたのか。その理由は…

「…まさか、10日間の猶予を与えたのは奴等が強くなるのを待つ為!?!イプシロンを率いる貴方が、何故!?!」

「…最高だ」

小さく笑って呟くデザーム。それからボールを仲間に渡してイプシロンの猛攻が開始されるが、雷門はそれを真っ向から迎え撃つ

「フレイムダンス！」

「っ、メトロン！」

「やらせるか! ボルケイノカット!」

ゼルがメトロンへとパスをしようとするがすかさず土門がボールをカットしボールは風丸へと繋がったのだ

「疾風ダツシュ改!」

「くっ……!」

ボールを受け取り、風丸は炎を纏って一気に加速。クリプトを抜き去った

「(いける…特訓の成果だ! こいつ等と対等に戦えてるぞ!!)」

風丸がボールを持って駆ける。その後も互角の勝負を繰り広げ、試合は白熱していく

「ガニメデプロトン!!」

「マジン・ザ・ハンド改!!」

「皇帝ペンギン!」

『2号!!』

「ワームホール!」

以前は複数人で凌いだゼルのガニメデプロトンを、円堂が1人で完全に受け止める。次いで鬼道、一之瀬、染岡で放った皇帝ペンギン2号を、デザームのワームホールに止められた。互いに1点も許さないまま、試合が続く

「やらせない! スピニングフェンス! 行け! 高梨!」

「任せろ！スプリントワープ！」

俺は一気にゴールへと向かって走り出す。

もうすぐで前半も終わる。だからその前になんとか一点をもぎ取る！

「行くぞ！ハアアアアア！」

「ハア！パーフェクトペンギン！」

「あれは!?!」

「新しい必殺技か！」

新必殺技に驚く雷門イレブン。そしてデザームはニヤリと笑い必殺技を使った

「ワームホール！」

「いっつけえー！ー！ー！」

「なんだと!?!」

『ゴォー！ー！雷門中、先制点だ！高梨の新必殺技パーフェクトペンギンが炸裂しデザームのワームホールを打ち破った！』

そしてここで前半戦終了です！』

ベンチに戻り、円堂達は円状に座って作戦会議を行う

「高梨！ナイスシュートだ！」

「完成させてたんだね、蓮」

「ああ、俺もお前には負けてられないからな」

「後半もこの調子で頑張つて!」

「任せとけ! 1点も入れさせるもんか!」

「必ず奴等を、止めてみせるでヤンス!」

「俺達の力を見せてやろう!」

「俺達は確実に強くなつてる! 絶対に勝つぞ!!」

『おおっ!』

円堂の言葉に全員で返事をした後、瞳子監督は次の作戦を指示する

「栗松君は木暮君と交代よ。後半はより守備を固めなさい」

「俺の順番か……!」

「頼むでヤンスよ、木暮!」

「任せとけて!」

こうして、後半戦は栗松と木暮が交代し試合が始まろうとしていた

第26話 ついに決着!?

「いよいよ、後半戦が始まる。ポジションは栗松のポジションの所に木暮が入った。やってやる……!」

顔に汗を浮かばせながら、ポジションに着いた木暮が呟く。前の試合で最後のプレー以外何も出来ていなかった事が、自分の体にプレッシャーを与えている事に木暮は気付いていなかった

染岡が士郎にボールを渡して後半戦が開始。追加点を狙って、染岡がボールを持って駆け上がり、対峙するクリプトをフェイントで抜けたがケイソンに阻まれた

「アステロイドベルト!」

「ぐああつ!」

ケイソンが石の礫を出現させて染岡に向かって放ち、直撃を受けた染岡は吹っ飛ばされ、ボールを奪われてしまう。奪ったボールをケイソンが即座にクリプトへ送る

「止める! フレイムダンス!」

「くっ!」

「風丸!」

「疾風ダツシュ改!」

一之瀬からボールを受け取ると同時に、風丸が加速し一気にタイタンを抜き去る
「なっ!」

風丸は加速したまま一気に右サイドから上がっていった。

そしてボールは俺へと来た

「任せろ!」

「マキュア、あいつ嫌い!」

俺はボールをもらいマキュアをひとりワンツで交わした。

そして俺は士郎と共にゴールを目指した

「行くぞ、士郎!今度こそ決めるぞ!」

「うん!」

「ホワイトダブルインパクト!!」

「ワームホール!」

前回のイプシロン戦よりも威力の上だったホワイトダブルインパクトがゴールを襲
う。

威力の上があった必殺技はワームホールを打ち破りゴールネットを揺らした。

『ゴールール!雷門追加点だ!つき放した!』

雷門2ー0イプシロン

ホワイトタブルインパクトは見事ワームホールを破りゴールを決めた。

「よしっ！やったな土郎！」

「やったね蓮！」

俺と土郎はハイタッチをし喜びあつた。ゴールを決められたイプシロンの面子は驚いていたがデザームだけは笑つていた。

「つく……このままでは終わらせてたまるか！」

反撃をしようとする、マキュア、メトロンが3人同時に攻めてきた。

3人の連携に一之瀬、土門、鬼道も抜かれてしまった。

「っ、しまった！」

「ガイアブレイクだ！戦術時間2、7秒！」

『ラジャー!!』

デザームの指示を受けたゼル、マキュア、メトロンが横に並ぶと、3人は構えを取つて気を放出し、ボールを宙に浮かせて地面から岩を出現させる。そして岩がボールを包むように集まり、岩の塊となったボールを跳び上がった3人が空中で同時にシュート。蹴つた瞬間、岩が砕けて中からボールが発射された

『ガイアブレイク!!』

「俺が止めてやる！旋風陣!!」

放たれた強烈なシュートを止めようと木暮がシュートの軌道に入り、逆立ちの体勢から横に高速回転。ガイアブレイクを足で挟んでから回転で威力を殺し、止めようとするが

「えっ……うわあああっ!!」

木暮が足で受け止めようとした瞬間、旋風陣の回転そのものがシュートの威力に押しされて弱まった所為でボールを挟む為の足が弾かれて木暮の体勢が崩れてしまい、回転が弱まった木暮の背中にボールが直撃し、木暮の体を押しながら円堂目掛けてシュートが飛んでいく

「木暮……っ、ぐああ!!」

マジン・ザ・ハンドでシュートを受け止めようとしていた円堂は迫って来る木暮を見て木暮の体を優先し、必殺技の発動を止めて自身の体をクツション代わりに木暮を受け止め、そのままゴールネットに体ごと叩き込まれてしまった

雷門2ー1イプシロン

『ゴール!!イプシロンが1点ももぎ取ったー!!』

「どうしよう、俺の所為で……ひっ!!」

普段とはかけ離れた、不安な表情で自身を責める木暮。そんな木暮の肩に後ろから手

を置かれ、木暮は円堂から怒られると思い、目を瞑る。だが、次に聞こえて来た言葉は木暮の思っていたものでは無かった

「ナイスファイトだ木暮！」

「えっ…」

「失敗を恐れずどんどん挑戦していけ！」

そう言った円堂の表情はどこまでも明るく、木暮は啞然として円堂の顔を眺める。そして円堂は立ち上がった後に左手を上に掲げ、皆に向けて告げる

「今度はこっちの番だ!!追加点取るぞ！」

『おおーっ!!』

「(キャプテン、皆…)」

円堂の言葉に、木暮以外の雷門イレブン全員が手を掲げて返事をする。そんな皆を見て、木暮は両手で自身の頬を叩いて気合を入れ直し、頬から伝わる痛みに堪えながら立ち上がると、円堂を見やつて頷き、自分のポジションへ戻っていく。そんな木暮を見て、雷門メンバー全員が軽く笑みを浮かべた

そこからは文字通り、激闘と呼べる試合が展開された。同点、そして逆転を狙う雷門と、エイリア学園の強さを知らしめる為に更なる得点を狙うイプシロン。どちらも疲労状態になりながらも、1歩も譲らない

「ヘビーベイビー!!」

「お、重い!」

「行かせないっす!ザ・ウォール!」

「ぐおっ!」

ケンビルが重力を操って浦部が運んでいたボールを急激に重くし、一気に一之瀬に接近して重力操作を解除し、ボールを奪う。その直後壁山がザ・ウォールでボールを奪い鬼道へとパスをした

「みんな行くぞ!新しいタクティクスを!」

「「おう!!」」

残り時間は10分を切った所で新しいタクティクスを行った

「吹雪!ゴール前まで上がれ!!土門、一之瀬、風丸、高梨、染岡、行くぞ!!」

「「「おう!」」」

「必殺タクティクス!ドリブレイズ!」

攻撃メンバーの前方に燃え上る炎を纏い勢いよく敵DF陣の間を交差し、突破した。

「決めろ、吹雪!」

「吹き荒れる!エターナルブリザード!」

「もう入れさせんぞ!!ドリルスマッシャー!!!」

デザームが右手を気を溜めながら上に上げると、突如右手に巨大なドリルが出現。それを振り下ろしてシュートをドリルの先端で迎え撃ち、ドリルを回転させる。そして：エターナルブリザードの威力がドリルの回転によって完全に殺された状態で宙に浮かされ、デザームがドリルを解除して右手で落ちて来たボールをキャッチした

『!?!』

「何っ…?!」

フルパワーのエターナルブリザードを止めた事に雷門は驚愕し、士郎も信じられないのか目が揺れている

「あんな凄い必殺技を持っていたのか!」

「ふっ…私にドリルスマッシュャーまで使わせるとはな。

やるではないか雷門中よ。行け!お前達ガイアブレイクだ!戦術時間3.5秒!」

『ラジャー!!』

デザームは前線のゼルへとパスをした。

「「ガイアブレイク!!」」

再びガイアブレイクが円堂へと迫る

「止めて見せる!ゴッドハンド…V!」

ガイアブレイク対ゴッドハンドV。

徐々にガイアブレイクの威力が弱まり見事円堂はキャッチした。

そしてキャッチしたのと同時に古株さんが試合終了の笛を鳴らした。

「か、勝った!」

「んーーーーー勝ったぞーーーーー!!」

「よしー!」

「馬鹿な…私が負けただと…?ありえない…あつてはならぬ…!」

負けたデザームが、負けを認められないのか何度も地面を叩いていた。無言でデザームの所へ歩いていく

「我々はエイリア…イブシロンなのだ!!」

身体に力を入れて起き上がろうとするデザーム。その前に立った円堂は、デザームに右手を差し出した。それに気付いたデザームが顔を上げると、円堂は微笑みながら告げる

「地球では、試合が終われば敵も味方も無い。お前達をしている事は許せないけど…俺は、サッカーの楽しさをお前達にも分かってほしいんだ」

「…」

「ん…?へへっ!」

「…!次は、必ず勝つ…」

立ち上がったデザームが笑う。円堂を見て微かに笑い、円堂と握手を交わすべく左手を差し出した。そして2人の手が繋がる：直前で、銀色の光が2人の横から放たれた。

突然の謎の光に俺達が驚きながら警戒していると、白のユニフォームを着ており銀髪の逆立った髪をしている男が現れた。そしてもう一人青白いユニフォームに白い髪を風に靡たせたような髪型の男が光の中から姿を現す。

「な……」

「っ、カイト様！ガゼル様！」

謎の男の登場に円堂が驚いているとデザームが男の名を呼び、カイトが話し出した。「私はマスターランクチーム、ギャラクシーを率いるカイト。君が円堂か。こんなやつらに負けたのかデザームよ」

「そして、我々はマスターランクチーム、ダイヤモンドダスト率いるガゼル。情けないぞデザーム」

「っ……！」

「今回の負けで、イプシロンは完全に用済みだ」

言いながら閉じていた目を開いて円堂を見やり、次いでデザーム達に視線を移したカイトが、黒いボールを高く蹴り上げた。それを見て、デザームが1度円堂を見て何故か

離れ出した

デザームが距離を取り出した事に円堂が気付いてデザームの方を向くと、デザームが微かにだが、優しげに笑う。それを見て円堂がデザームの意図に気付いたような表情を浮かべた。その瞬間、カイトはそのままオーバーヘッドでデザーム達のいるところへとシユートをした。デザーム達の中心まで飛ぶと一際大きな青白い光を放つ

「うわっ!」

その光に円堂が咄嗟に目を庇う。暫くして光が収まると、デザーム達の姿は跡形もなく消えていた

「そんな…っ!!」

デザーム達が消えた事に気付いた円堂が怒りを露にして睨みながらカイト、ガゼルの方を見やるが、先程までいたはずのカイト、ガゼルはいつの間にか姿を消していた。しかし、グラウンドにはいなくなったはずのカイト、ガゼルの声が響いていた

「円堂守。君と戦える日を、楽しみにしている…」

ガゼル、カイトの声が消えてから暫くして、周囲に散っていた不穏な雰囲気が無くなる。…どうやら完全に姿を消したようだ。軽く息を吐いて張っていた緊張の糸を緩めると、鬼道が呟いた

「ダイヤモンドダストのガゼル、ギャラクシーのカイト…。一体後どれくらいエイリア

学園にはチームがあるんだ……」

第27話 裏ノート...？

俺達は、理事長の連絡があり円堂大介さんの裏ノートがあるという情報を聞き今俺達は福岡にやって来た。初めて来たのに懐かしさを感じる市街地を抜けると、目的地である陽花戸中に到着、出迎えてくれた校長先生の話聞きに円堂と瞳子監督そして雷門さんが校内に入っていく。そして暫くして、裏ノートと呼ばれる物を持って帰って来た。

皆でノートを見るのかと思っていたが、その前に陽花戸中の校長先生が陽花戸中サッカー部の人達を紹介したらしく、全員でキャラバンを降りて陽花戸中サッカー部と向き合う

「俺は陽花戸中キャプテンの戸田。君達の活躍は良く知ってる。俺達皆、君等のファンさ」

「そんな、ファンだなんて…」

「宜しく頼むよ」

「ありがとう」

ファンだと言われて照れていた円堂が戸田と握手を交わし、円堂が他の陽花戸中サッカー部のメンバー達にも声を掛けた

「皆、宜しくな！」

『宜しく!!』

円堂の言葉に返事をする陽花戸中サッカー部のメンバー達。その中で一人だけ色の違うユニフォームを着た、おそらくGKであろう男が何故か他のメンバーの背に隠れてこつちを…正確には円堂を見ていた。あれが立向居か。

まだまだ幼さが残った顔立ちをしていた

「ん？おい立向居、何してんだ？円堂君だぞ、どうしたんだ？『円堂さんに会えたら俺感激です！』とか言ってたのに」

「は、はいっ！」

「…手と足一緒に出てたっス…」

戸田に声を掛けられ、隠れていた男…立向居は顔を赤くして円堂の所に歩いて来た。…赤い顔に手と足が一緒に出ている所から、緊張しているのが分かる

「え、え、円堂さん！お、俺、陽花戸中1年、立向居勇気ですっ!!」

「え、おお。宜しくな！」

「あ、握手してくれるんですか!？」

「勿論さ！」

「円堂さん!!」

目を輝かせて円堂が出した右手を両手で掴んで上下に振りまくる立向居。…アイドルと握手して大喜びするファンみたいな光景だなど、ふと思つてしまった…

「感激です！俺もこの手一生洗いません!!」

「いや、御飯の前には洗った方が良くぞ？」

「ですよね…」

『はははははっ!!』

気が合ったのか、笑い合う円堂と立向居。性格は似てないが、通じる所があるのかも
う親しい感じになっている

「君もサツカー好きなのか？」

「はい！大好きです!!」

「立向居は元々MFだったんだけど、円堂君に憧れてキーパーに変更したんだ」

「それ、本当なのか？」

「は、はい…」

恥ずかしいのか下を向いて指を弄りながら円堂に返事をする立向居。GKになる程
円堂に憧れた訳なのだから、本人に直接言うのが恥ずかしいのだろう

「立向居、あれを見せるんじゃないのか？」

「何だい、あれって？」

「俺が習得したキーパー技です。でも、円堂さんに見せるのは緊張するな…」

「見てみたいな！」

「っ、本当ですか!?!」

立向居の技を見る事になり、シュートは円堂に見せたい技に興味湧いたのか一之瀬が撃つ事になった。ゴール前に立って立向居が準備運動を行う

「どんな技っスかね？」

「わざわざキャプテンに見せたい位でヤンスからね。どんな技か…」

「全国レベルに通用するか、見てもらいたいんじゃないか？」

フィールドの外に立って立向居を眺めながら栗松達が会話をしていると、準備準備を済ませた立向居を見て一之瀬が告げる

「それじゃあ、いくよー!!」

「…お願ひします！」

「ふっ！」

返事を聞いた一之瀬が、立向居の正面に向かってシュートを放つ。それに対して立向居は気を凝縮させた右手を空に突き上た

「ゴッドハンド!!」

『!?!』

巨大な青い右手が頭上に出現し、立向居の動きと連動して一之瀬の放ったシュートを正面から受け止める。右手が消えると、立向居の右手には完全に威力が殺されたボールが収まっていた

「なっ…」

「…ははっ、ゴッドハンドだ!! 凄いよ、立向居! お前、やるじゃないか!!」

「あ、ありがとうございます!」

立向居の技を見て感動したのか円堂が立向居の所に駆け寄り、て両手で立向居の右手を掴んで上下に振りまくる。さつきと逆の光景になっていた

「でも、どうやって…?」

「あいつはゴッドハンドの映像を何度も何度も見て、死ぬ程特訓したんだ」

「見ただけで身に付けたって…」

「凄い才能だな」

「才能だけ、じゃないだろうけどね。あれは相当な特訓をしているはずだ」

戸田の説明を聞いて立向居の才能に驚く鬼道達に、俺は呟く。ゴッドハンドは円堂が大介さんのノートの教えを元に血の滲む様な特訓をして、試合で極限状態に追い込まれて漸く使えるようになった必殺技だと聞いた

『ゴッド、ハンド!!!』

そんな会話をしていると、円堂と立向居が互いにゴッドハンドを出し合って巨大な気の光が空高く放たれた。暫くして光が収まり、円堂と立向居が右手を前に出して向き合った状態で笑っているのを視界に捉える

「凄いよ立向居！お前のゴッドハンドは本物だ！」

「あ、ありがとうございます！俺、もつともつと強くなります！」

「ああ、その為にはもつともつと特訓だ！」

「はいっ!!」

それから、戸田の提案で陽花戸中サッカー部と合同練習を行う事に。その練習の途中で、円堂が顔面にボールの直撃を貰ってダウンしたので木野さんが看病をする事に。

俺は染岡と士郎と3人での新たな必殺技の練習をしている。この先エイリア学園もさらに協力になってくるし何より原作には出てこなかったマスターランクチームのギヤラクシーってチームも出てきたからな。

一体どんなチームなんだよ!?

まあいい。今はこの技を練習をしよう。この技は原作にはなかったオリジナルの技なのだ。

さて、いよいよジエネシスとご対面だな。今の俺達の実力がどこまで通じるか試させてもらおうか！

第28話 ジエネシスの脅威

そして次の日、12時前。空が雲で覆われて暗い雰囲気の中、俺達は円堂が試合の約束をしたと言うチームが来るのを待っていた。急遽今日の朝に円堂に試合の件について話され俺達は瞳子監督の指示のもと試合に向けて準備を始めた。俺はその時の瞳子監督の表情に疑問を抱きながらも準備を済ませる事にした。

陽花戸中の面々は雷門中の試合が見れると知りベンチに座り楽しみにしながら座って待っていたのだ。

「円堂君。その男の子、本当にヒロトと名乗ったの?」

「はい、そうですけど…」

「そう……………」

円堂の答えに不安そうな表情で黙る瞳子監督。やはり不安なんだろうな

「12時になりました!」

そんな事を考えていると、音無さんが時計を片手に時間になった事を告げた。その時、突如グラウンドに不穏な雰囲気と共に霧が漂い出した

「これって…エイリア学園!?!」

「…来たー！」

突然の黒い霧に皆が困惑している中、鬼道がグラウンドの中央を見て告げ、俺達も視線をグラウンドに向ける。するとグラウンドから光が放たれ、光が収まるとそこにはエイリア学園の新たなチームが現れた。そして、その先頭に立っている赤い髪の男は円堂が言っていたエイリア学園のヒロト…:

「やあ、円堂君」

「まさか…ヒロト!?!」

「何やこいつ等、この前の奴等とちやうやんか…」

「エイリア学園には、まだ他のチームがあつたつて事か…!」

驚愕する俺達に向かって、ヒロトが言う

「これが俺のチーム…エイリア学園、ザ・ジェネシスつて言うんだ。よろしく」

「ジェネシス…? お前、宇宙人だったのか…?」

「どういう事だ円堂?」

「ヒロト…」

エイリア学園の者だと知って動揺している円堂に、ヒロトは笑みを浮かべて告げた

「さあ、円堂君。サッカー…やろうよ」

ヒロトがエイリア学園の者だった。それを知って動揺している円堂の後ろで、土門が
呟いた

「どういう事なんだ？どうして円堂の友達が、エイリア学園に？」

「円堂さん……」

「……ままと騙されたみたいですね」

土門の言葉に返事をせず、円堂は黙ってヒロトを見つめていた。すると、目金が皆に
向かって話し掛けた

「騙された？」

「奴等の目的は、友達になった振りをして円堂君を動揺させる事」

「そういう事だったんですね！」

「宇宙人の考えそうな事です」

「それは違うよ」

立向居と会話をする目金の推測を、ヒロトは軽い口調で否定した。

「俺は、ただ君達とサツカーをしたいだけ。君達のサツカーを見せてよ」

そう告げたヒロトの後ろで、ヒロトのチーム……ジエネシスのメンバーが喋り出した

「いいのかわ？許可も無しにこんな奴等と試合して」

「グランがやるって言うんだ。仕方ないだろ」

「グラン？それが本当の名前なのか？」

円堂の問いに、ヒロト：もとい、グランは笑みを浮かべたまま何も言わない。それを見て、円堂が拳を握って告げる

「お前とは、もつと楽しい試合が出来ると思ってた。けど、エイリア学園と分かった以上、容赦はしないぜ!!」

「勿論だよ」

指を差して試合に挑む意思を告げた円堂に、グランは楽しそうに口元を上げた

『雷門ファンの皆様、お待たせしました！此処、福岡の陽花戸中から雷門中对エイリア学園第3のチーム、ジェネシスとの1戦をお送りします!』

「イプシロンを倒したら、終わりかと思っていたでヤンス…」

「こうなったらしようがねーだろ。イプシロンの時と同じで勝つだけだ」

「うん、そうだね」

染岡：。。。やはりこの状況で染岡が残っているのは心強いな。流石は雷門の初期メンバーなだけはある

「鬼道。フォーメーションはどうする？」

「まずは、イプシロンと戦ったフォーメーションを試す。いいですよね？監督」

「ええ、任せるわ」

「行くぞ！みんな！」

『おおっ!!』

円堂を先頭にグラウンドへと走る。

F
W

高梨 風丸 染岡 士郎

M
F

鬼道 一之瀬

財前 土門

D
F

壁山 栗松

G
K 円堂

ベンチ：目金、木暮、浦部

最初にイプシロンと戦った時と同様、超攻撃的フォーメーションを組んだ雷門。

「(さて、今の俺たちはどこまでやれるか。試せる。いい機会だな。ここで新しいタク

「テイクスを試すか……」

俺がそう考えている間に審判の古株がホイッスルを鳴らし、雷門のキックオフで試合開始となった。土郎からボールを受け取った染岡が攻め上がろうとする。そして、目の前に接近して来たウィーズに一瞬でボールを奪われた

「なにっ!?!」

染岡は油断を一切してなかった。イプシロンとの試合を経験し、ジェネシスも同等かそれ以上のチームと考えてしつかりボールをゴール前まで持っていく事を第1にプレーしていた。ただ染岡が想像していた以上に、ウィーズが速かったのだ。

俺達は慌ててボールを取り返すべく鬼道が指示を出した。

「一之瀬!」

鬼道の指示を受けた一之瀬がウィーズを止めようとするも、追い付けずあっさり抜かれてしまう。しかも他のジェネシスのメンバー達がウィーズと同等のスピードで、ディフェンスに戻ろうとする鬼道達を引き離しながら一斉に上がって来た

「な、何ですかあのスピード!?!」

「アーク!」

「コーマ!」

「ウルビダ!」

「グラン！」

ベンチから試合を見ている音無が思わず呟いてしまう程のスピードを維持したまま、ジエネシスは高速パスで雷門DFを翻弄。ボールの動きを追うだけで精一杯な雷門はパスカット出来ずグランにボールが渡り、土門をあっさり抜いたグランがゴール前まで到達する

「いくよ！ 円堂君!!」

「来い！ ゴールは割らせない!!」

「ふっ！」

グランがゴール前からシュートを放ち、それに対抗するべく円堂が全力で迎え撃とうとする

「マジン・ザ・ハンド改!! ぐっ！」

マジン・ザ・ハンドでシュートを受け止めようとするが止められずマジン・ザ・ハンドが打ち破られたがボールは軌道がずれポストに当たり跳ね返りジエネシスのローイングから試合が始まる

「嘘だろ…?」

「何だよ、今のシュート!?!」

「信じられない…マジン・ザ・ハンドが、あんなに簡単に破られるなんて…」

「マジン・ザ・ハンドが…」

啞然とした表情を仲間達が浮かべていた。スピードも確かに速い、そして正確パス、そしてノーマルシュートであの威力のシュート。こいつらはイプシロンとは比べ物にならないくらい強いぞ！

「何てパワーだ…これがジェネシスのパワー…けど、負けない!!絶対にはゴールはや許さない!!」

「ふっ…それでこそ円堂君だ!!」

ジェネシスのスローインで試合再開。今度はこちらからボールを奪い攻めようとし、俺はアークからボールを奪い鬼道へとパスをする。

「行くぞ、鬼道!」

「ああ!必殺タクティクス柔と剛!」

鬼道から土門、一之瀬、そして俺へとパスを出そうとするが「もらった!」

俺へのパスをウルビダがカットしボールを奪われてしまった。

やはり対策はしているか…

「遅い」

栗松と壁山がボールを奪おうとするがウルビダのスピードについて行けずそのまま

ゴール前まで一気に進まれ、グランに再度パスを出した

「いくよ、円堂君！」

「今度は止める！」

「ふっ！」

先程と同じシュートを放つグラン。今度こそ止めようと、円堂は先程以上に力を込めて迎え撃とうとする

「マジン・ザ・ハンドオ改!!ぐううう」

さつきよりもなんとか耐えられているがボールの勢いを止めることは出来ず円堂ごとゴールに押されてしまった

雷門オーレジエネシス

『ゴーロール！先制点はジエネシスだ！』

それから、雷門は防戦一方だった。なんとか一点で抑えられているが円堂もいつまでもつかかわからない。なのでシュートブロック出来る壁山、栗松、財前、土門にはゴール前についても少しでもシュートの威力を抑えてもらうことにした。

俺と鬼道はなんとかボールを取ろうと相手を探りチャンス伺う。

きつとやつらは油断しているはずだ。だからきつとチャンスはあるはずだ。探せ、探せ、探すんだ……

ボールはアークからコママへと渡りドリブルで上がってくる。くツ… 何処だ？穴はどこにある？

俺は更に神経を集中させやつらの動きを観察する…

これは!?

ジェネシスのパスルートのパターンを見つけ俺はその隙を狙うことにした。

次にパスをするとしたら… あいつだな!

俺はそいつの所まで全力で走った

「よし、そろそろ）ウルビダ!」

「よっし!もらったぜ!」

「なに!?!」

俺はコママからウルビダへとパスをカットし一気に反撃をしかける

「みんな上がれ!点を取りに行くぞ!」

『『おう!』』

鬼道の指示でみんなが一斉にゴールへと目指し走り出した。

「通させないっば!」

クイールがボールを奪いにくるが俺はそれを

「スプリントワープ!」

必殺技で交わした。

「スピードなら負けるわけには行かない！そうだろ風丸！」

俺は風丸へとパスをした。すると、風丸も

「ああ！速さなら俺達のが上だ！」

「……」

ハウザーが風丸を止めに行くが

「疾風ダツシユ改！」

あの時よりも更に速くなった風丸をハウザーは止めることが出来なかったのだ

「行け、吹雪！」

ボールは風丸から士郎へと渡る。士郎もトップスピードでキープ、ゾーハンを交わし

ゴール前に出た

「行くよ、染岡くん！」

「ああ！ワイバーン！」

「ブリザード!!」

「ふっ……」

士郎、染岡の渾身のシュートはネロが両手で簡単に受け止められてしまった。

だが、これでいい。俺たちがボールを奪いシュートを出来るとみんなに思い込ませる

ことが大事なんだ。

これによりみんなの精神的ダメージを失くすんだ

そしてここで前半が終了した

第29話 ジエネシスの脅威後編！

「大丈夫か？みんな」

俺はすぐにゴール前を守ってくれていたみんなに声を掛けた。

「ああ、なんとかな」

「なんとか一点で抑えられたっすけど後半もこのままだとおれらの体がもたないッスよ」

「つく…」

なんとか大丈夫そうだったが一人右足を気にしているやつがいた。

「監督」

「ええ。後半は栗松君の代わりに木暮君が入るわ。木野さん栗松君にアイシングを」

「は、はい！」

栗松は何処かで足を捻ってしまったため木暮と交代することになった。

俺と鬼道は後半の作戦を立てることにした。

「どうする鬼道？必殺タクティクスは向こうに攻略されている。それにDF陣がいつまでもつか…」

「ああ。わかっている。後半はカウンター速攻狙いでなんとか1点を返すんだ。やつらの多くは前線へと出て来ている。そこを利用するんだ。」
「わかった。風丸、士郎、染岡。何としても一点をもぎ取るんだ。そのための作戦を伝える」

俺は3人を呼び作戦を伝えた。

暫くすると後半戦が始まる。フォーメーションも少し変更することにした

F
W

風丸 士郎

染岡 高梨

M
F

鬼道 一之瀬

D
F

壁山 木暮 財前 土門

G K 円堂

DFを中心としたカウンター出来るフォーメーションに変更したのだ。そしてFWもある作戦のためこういう形になった

古株さんの笛合図で後半戦がスタートした。

ジエネシスからのボールで始まり向こうはいきなり全員で攻めてきた。ゴールは破れないとふんだんだろう。

ボールはウルビダからコーマへそしてクイールへとパスをどんどん繋げていった。

「行かせないー！」

「遅いッポ」

一之瀬がDFしようとするがクイールのスピードに追い付けず抜かれてしまう

「グラン！」

そしつづいにボールはグランへと渡ってしまふ。俺達FW陣は戻らず鬼道からのパスが来ることを信じて待っていた

「行くよ、円堂くん」

前半の時よりも威力のあるシュートが雷門ゴールへと向かっていた

「ザ・ウォール！ぐわあー」

「ザ・タワーー！きやあー」

壁山、財前がシュートブロックするがグランのシュートを止めることが出来なかったがこれで少し時間を稼ぐことができた

「もう、ゴールはわらせない。ゴッドハンドV!!」

円堂のゴッドハンドVで見事ボールをキャッチした。そして作戦通り速攻をしかけるため鬼道へとパスをし、鬼道はすぐに染岡へとパスをした。

「行くぞみんな!」

「「おう!」」

「ワイバーンクラッシュ!」

まずは染岡のワイバーンクラッシュを撃つ

「行くぞ士郎!」

「ああ!」

「ホワイトダブルインパクト!!」

俺と士郎は染岡のワイバーンクラッシュにシュートチェインをし更に威力を上げた。

そして最後は……

「任せろ!ハアツ!刹那ブースト!」

風丸の刹那ブーストで更に威力を上げたのだ

「くっ……プロキオンネット!なに!?!」

雷門1ー1ジエネシス

『ゴール雷門追い付いた！雷門FW陣が見事ジエネシスからゴールを奪った』

よし、なんとか追い付いた。だが、これでもうこの技は使えないな。

これはやつらの慢心があつてこそその作戦なのだから。

ゴールを奪われたことによりジエネシスは前半よりも更に攻撃的なサッカーになってきた。ギリギリファールにならないようにしながら

「今度は本気でいくよ、円堂くん。流星ブレード!!」

グランの必殺シュートが円堂を襲う

「くっ間に合わない。マジン・ザ・ハンド改！ぐわあー!!」

シュートのスピードにゴッドハンドVが間に合わないためマジン・ザ・ハンドで対抗するがすぐに破られゴールへと突き刺さってしまったのだ。

雷門1ー2ジエネシス

『ゴール！ジエネシスグランの必殺シュートが決まり突き放したー。雷門イレブン追い付けるかー!?!』

くそつ。ここでもう撃ってくるのかよ。流星ブレードを。

ゴッドハンドVならまだ可能性があつたがやはりマジン・ザ・ハンドだとキツイか。

どうする?今のままだとゴールを奪うのは難しい。ならやることは次への布石を撃つ!

「鬼道。奈良でのジェミニストームとの試合の全員FWをしたのを覚えているか?」

「ああ。覚えているが……まさか!」

「ああ。今の皆の状態でゴールを奪うのは厳しい。だから次の試合への布石を撃つ。」

「一理あるが、それだと円堂が……」

「俺なら大丈夫だ!ゴールは任せてくれ!」

「円堂……分かった。やってみよう」

F
W

高梨 風丸 染岡 士郎

鬼道 一之瀬 土門 財前

壁山 木暮

M
F

D
F

G
K

円堂

中盤をがら空きに全員FWにした。

これにより怪我の回避、そして情報収集、円堂に経験を積ませることが出来る。

「へえ面白いことを考えるんだね。でもその考えは甘いよ」

雷門からのキックオフで始まったがすぐにグランへとボールを奪われた

「くそっ!」

「流星ブレード!」

「(マジン・ザ・ハンドは通用しない…!残るは、あれしか…!!)パツと開かずグツと握つて…ダンツ、ギューン…ドカーン!!

正義の鉄拳!!ぐわあー!」

雷門1ー3ジエネシス

まだ未完成の状態である正義の鉄拳では歯がたたずボールはゴールへと突き刺さった。

それからはボールを奪われてはグランの流星ブレードが円堂を襲う。

次々へとゴールを許し点差が離れてきていた

雷門1ー10 ジェネシス

「ハア、ハア……」

円堂は疲れきっていた。

この状態で流星ブレードを受けるのは不味いな。

「風丸。俺とお前で試合終了までボールをキープし続けるぞ」

「ああ。わかった。このまま終わらせるわけにはいかない！」

雷門のキックオフ。染岡から士郎そしてすぐに風丸へとパスをした

「疾風ダツシュ改！」

「疾風ダツシュ改！」

風丸は疾風ダツシュでボールをキープし続けた。

「高梨！」

ボールを取られそうになると俺へとパスをしボールを奪われないようにした

「スプリントワープ！」

「グラビティション！」

俺は一人を必殺技で交わすが、交わし終わる直後ハウザーによりボールを奪われてし

まった。

「くそっ！後少しで試合終了だったのに」

ハウザーからコマ、ウルビダ、ウォーズそして再びグランへと渡った。

「これで最後だ円堂くん。流星ブレード！」

「もうこれ以上決めさせない。ダンツ、ギューン……ッく……しまっ……ドカーン！」

円堂はこの試合の疲労からかそれとも何処かを痛めてるのかでギューンのタイミングが少し遅れてしまった

「ぐぐぐ……負けるかあ！いつけえ！」

円堂の正義の鉄拳は破られたが見事ボールはコースから外れ得点とならなかった

「今の感覚……」

そこで古株さんが試合終了の笛を吹き試合終了となった。

結果は負けてしまったが得るものが沢山あった

気づいたらジエネシスはいなくなっていたので俺達は疲労からその場に座り込んだのだ。

第30話 いざ沖繩へ!

ジエネシスが去ってから数日後陽花戸中で暫く練習をしていると瞳子監督の携帯に響木監督から電話が入った。暫くして電話を終えると、瞳子監督は俺達に告げる

「沖繩に、炎のストライカーと呼ばれる人がいるそうよ」

「炎の……まさか、豪炎寺?！」

炎のストライカーと聞いて、円堂が真つ先に行方不明の豪炎寺の名を呼び、鬼道に視線を向ける。鬼道も間違いないと思ったのか、口元を上げて頷く

「ハイッー」

「よーし! 待ってろ、沖繩! 豪炎寺!!」

右拳を空に掲げ、沖繩に向かうと大声で告げた。瞳子監督は炎のストライカーが豪炎寺だと確定していないと指摘する。しかし円堂は間違いないと豪炎寺だと言い切り、俺達は、豪炎寺を探して沖繩に向かう事になったのだった。

ようやく会うことが出来るのか。炎のストライカー豪炎兎に!

俺もドキドキしながら沖繩へと向かったのだ。

福岡を出た俺達は船に乗って、豪炎寺がいるという沖繩に向かっていた。現在瞳子監

督が一人で先に沖縄に向かって探し、俺達はキャラバンを船に乗せて後から合流する手筈だ。その間、古株さん達が俺達の保護者を担当してくれている

「今確認して来たが、瞳子監督の方沖縄に着いたそうじゃ。これから先に調査をしておくらしい」

「豪炎寺さんに会ったら、ファイアトルネードを受けてみたいですす！」

そう言ったのは、円堂の隣に立つ立向居だ。彼は数日練習を行い、なんとマジン・ザ・ハンドを完全にマスターし、俺達と一緒に戦いたいと志願していたのだ。瞳子監督が承諾した事で、俺達のチームに加わっていた。

「そうか。でもあいつのシユートは、そう簡単には止められないぜ？」

「本当に豪炎寺君なのかな？」

「俺は信じたいね。奴との再会を」

「うーん！輝く太陽、青い海…まるでウチ等の愛を祝福しとるようやねダーリン!!」

「あはは…」

豪炎寺の会話から一転、浦部さんが一之瀬へ身体を寄り添わせて熱いアタックを仕掛け、一之瀬が視線を浦部さんから逸らしながら乾いた笑いの表情を浮かべる。苦労しているようだが、無理に人の恋愛に首を突っ込むと絶対に碌な事がないと分かっているので放置する。

「ダ〜リ〜ン!」

周りの皆も一之瀬と浦部さんから視線を逸らして無視していると、木暮がこちら側に向かつて走つて来て、笑いながら音無さんの後ろに隠れた。右手にペンらしき物を持っているのが見えた

「うっしっし!」

「木暮君? 何、どうしたの?」

「木暮——!!!」

突然自分の後ろに隠れた木暮に音無さんが理由を尋ねた。すると、怒号と共に財前さんが姿を現す。その顔には鼻と頬に落書きがされており、何者かにイタズラされたのだろう。誰がやったかは既に分かっているが

「見ろ! ベンチでウトウトしてたらこれだ!!」

「うっしっし!」

「木暮君! 待ちなさい!!」

「待て〜!」

イタズラの犯人である木暮が笑いながら逃げ出し、音無さんが財前さんと共に叱りながら後を追う。見慣れて来た光景に苦笑する皆であった。因みにこの後、音無さんと財前さんが木暮を捕まえてたった状態で腕を組むと、身長差から木暮は女の子2人に持ち

上げられる形になる。その状態で仕返しとして額と頬に渦巻きマークの落書きが施された木暮を周りに見せ付けるといふ罰を執行し、俺達以外の乗客に見られて苦笑されてしまい、顔を赤くした木暮は船にいる間は大人しくなった

木暮のイタズラで少し騒々しくなったものの、船に乗ってのんびりと体を休めながら沖繩に向かっていた俺達だったが、ここで問題が発生してしまう。海中の珊瑚が綺麗でもっと近くで見ようと船から身を乗り出した目金が船から落ちてしまい、パニックを起こし溺れそうになっていた目金を近くでサーフィンをしていたピンク色の髪に褐色肌の男が助け、船から一番近い島である場所に目金を連れて来たのだ。船が船着き場に泊まった後で俺達は急いで船を降りて目金と目金を助けにくれた男の所へ向かい、目金の安否を確認する。

「ありがとう！君は目金の命の恩人だ！」

「よせよ、礼を言われる程じゃねーって」

「そうですよ。僕だって泳げるんですから…」

「馬鹿野郎！海を甘く見んな！！海は命が生まれる場所だ！命を落とされちゃ堪んねーよ！！」

「っ、はい…ごめんなさい」

「まっ、とにかくさ。無事でなによりだ。じゃあな」

そう言つて、目金を助けてくれた男はサーフボードを片手に立ち去つていった。その後もう1度船に乗つて沖繩にいかうとしたのだが船は1日1便しか来ないという事で、俺達はここで1日を過ごす事になってしまったのだ

「さあ、やるぞ!やる気さえあれば、そこがフィールドだ!!」

『おおっ!!』

そんな訳で、空いた時間で練習をしようと円堂が皆に声を掛け、砂浜で練習を行う事となつた。木材とネットで即席のゴールを2つ作り、円堂と立向居がGKを務めそれぞれで練習を始める。

「パツと開かずグツと握つて…ダン!ギューン…ドカーンッ!!!」

円堂は鬼道のシュートを相手に正義の鉄拳をマスターしようとして練習しているが、やはり何か足りない部分があるのか、途中で消えてしまう

「まただ…ギューンで、何なんだろう?」

「焦るな、円堂。究極奥義と名付けられた技だ。簡単には覚えられないはずがない」

「そうだな…究極奥義。身に付けたら、どんなすげーシュートだって防げるんだろな。絶対覚えて見せるぜ!」

「いやっほーう!」

究極奥義を覚えんと、右拳を握つて意気込む円堂。すると、海から突如声が聞こえて

きた。その声に円堂達が練習を止めて海を見ると、サーフボードに乗ったピンク色の髪に褐色肌の男が波から飛んで、俺達のいる砂浜に姿を現した。先程目金を救ってくれた男だと俺が気付くと、男の横にサーフボードが大きな音を立てて砂浜に落ちて来た

「…ん？よお、また会ったな。サッカーって、砂浜でもやるもんなのか？ま、いつか。頑張れよ」

俺達が砂浜でサッカーをしている事に意外そうな表情を見せるも、すぐにサーフボードを片手に俺達のいる場所から離れ、サーフボードを立てて日陰を作ると男は砂浜で寝始めた。

男の行動に少し驚いた円堂達だったが、気を取り直して練習再開。砂浜に足を取られたりしながらもなんとかバランスを保ち走っていた。

「ワイバーン、クラッシュユ!!」

「マジン・ザ…!!」

染岡が放ったワイバーンクラッシュユをマジン・ザ・ハンドで止めようとする立向居だったが、シュートの速度が想定以上だったのか発動が間に合わず、ボールがゴールに入った

「くっ…！もつとマジン・ザ・ハンドを素早く出せるようにならないと…もう一度、お願いします!!」

「おうっ！ガンガン撃っていくから覚悟しとけ！」

「はいっ!!」

そんなシュートを相手に、立向居は止めてみたいと思つたのか目に闘志を宿して構え、それを見て染岡は嬉しそうにしながらシュートを撃つ。

きつと立向居と円堂を重ねてるんだろうな

そして向こうでは財前さんが浦部さんに一緒にバタフライドリームをやらぬかと提案。最初はバタフライドリームは自分とダーリンの技だと拒否していた浦部さんだったが、一之瀬がやってみなよと言うとあっさり承諾。立向居相手にバタフライドリームを試す事になった。

しかし中々上手く行かず今度こそと放つたシュートはタイミングが合わず、放つたシュートが男のサーフボードに当たつて男の上にサーフボードが落ちるといふアクションが あつたが、男は良い波が来る時間だったので起こしてくれて助かつたと逆に財前さんに礼を告げる

「大丈夫なのか？」

「ん？ああ、いいっていいって！んなこたあ、海の広さに比べりやちつぽけな話だ。じゃあな」

心配する財前さんにそう告げて、男はサーフボード片手に海に向かつていった。その

際に、浦部さんが男と塔子さんを見て意味深な笑みを浮かべていた。それから暫く2人のバタフライドリームの特訓は続く。シュートの精度自体は上がっていくのだが、軌道が定まらずゴールに中々ボールが入らない。それでも順調に完成に近付いていく

『バタフライドリーム!!』

すると、シュートを撃つ際にズレが起きたのか、シュートの軌道が大きく左に逸れ、海の方へと飛んでいってしまう。飛んでいった先には、サーフボードに乗って波から飛んだ男の姿があった

「っ?!?おとおおっ!!」

突如飛んで来たボールを、男は飛んだサーフボードの上から蹴り返した。そのシュートは波を貫いて、立向居のいるゴールに向かって一直線に飛んで来る

『!?!』

「っ!なんてパワーなんだ…うわっ!?!」

放たれたシュートに皆が驚く中、咄嗟に受け止めた立向居はシュートの威力に押し負け、後ろに倒れてしまう。そのまま、ボールがゴールネットに直撃して砂浜に落ちた

すげーなあいつ。かなり距離があったにも関わらず、一直線にゴールまで飛んで来た飛距離といいシュートの威力といい、並の選手を大きく超えているぞ。

「ああー、ビックリしたぜ。急にボールが飛んで来やがってよ」

「ねえ、君! サッカーやってるのか!？」

男に円堂が駆け寄り問い掛ける。先程のシュートからサッカー経験者なのかと思つたのだろう

「そんなもん、一回もねーよ」

「一回も!？」

だが、男の返事はサッカーの経験無しという事だった。その言葉を受けて驚く円堂だったが、少しして嬉しそうな表情を浮かべて再度尋ねた

「サッカー、やってみないか？」

「ああ？」

「あんな凄いキックが出来るんだ。やったらすっげー楽しいぜ!？」

「…はははっ! 冗談は止せよ、俺はサーファーだぜ?」

「でもさ、ちよつとぐらい…」

「わりーな、興味ねーんだ」

「そっか…」

サッカーをやらないかと問う円堂だったが、男はサーフィンに夢中なようでサッカーをする気はないらしく、円堂の言葉を遮り立ち去ろうとする。すると、先程まで

黙っていた鬼道が口を開いた

「やらなくて正解だ。ド素人がいきなり俺達のレベルに付いて来られるはずがないからな」

「…何？」

「幾ら身体能力が優れていようと、やった事のない者がすぐに出来る程、サッカーは簡単じゃない」

鬼道の言い方が癪に触ったのか、男は鬼道の言葉に反発する

「へっ！さっきの見ただろ！ちゃんと蹴り返したじゃねーか!!」

「一度だけだがな」

「っ…!!」

鬼道の言葉に、男が表情を歪ませる。一瞬触発な雰囲気が出ていた。

「お兄ちゃん…あっ…」

音無さんが鬼道の行動の意図が何か分かったような表情を浮べていた

「よし、決めた！おい、サッカーやってやるぜ！」

「本当か!!」

「ああ！この俺様に二言はねえ！」

「そうか、歓迎するぜ！えっと、名前は？」

「俺は綱海！綱海条介だ!!」

綱海がサッカーをやると宣言した際に鬼道が微かに口元を上げたのを、俺は見た。サッカーをする気のない綱海にサッカーをやらせるのが目的で、あんな言い方をして煽っていたのだ

それから綱海を加えて練習再開。当初はボールを蹴るキック力こそ凄いがそれ以外はまだで初心者だったのだが、鬼道の指導を受けてボールとのタイミングを合わせる事で次第にその運動神経の凄さを俺達に見せ付けていく

「ツナミブースト!!」

その極めつけが超ロングシュート、ツナミブーストを放ち円堂からゴールを奪うのだった。それから練習が終わるまでずっと、サッカーを楽しそうにする綱海の姿があった

そんな綱海に影響されてか、塔子さんと浦部さんは練習の中でバタフライドリウムを成功させ、円堂も綱海のシュートから正義の鉄拳のヒントらしきものを掴めたようだ。いつもの正義の鉄拳と少し違う感じがしていたらしく、ギューンの答えが見つかるのはそう遠くないのかもしれない

その日の夜。とある民宿に泊まる事になった俺達の所に綱海がやって来て、釣ってきた魚を刺身にして振舞ってくれた。その際に俺達よりも一歳歳上である事が発覚した

り、皆でトランプしたりしながら一晩を過ごした。そして次の日の朝、俺達は再度沖繩に向けて船に乗るのだった。

なんで綱海は俺達の場所がわかったんだ??

第31話 炎のストライカー

「雷門イレブン、いよいよ沖縄に上陸だー！」

『おおっー!!』

古株さんの言葉に、全員で返事をする。キャラバンに乗って船から降りた俺達は、ついに沖縄に到着した。窓から見える綺麗な海を眺めながら、響木監督から教えてもらった場所へと向かう。さて、見つけられるかな？

「田堂さん。炎のストライカーの噂はきくと豪炎寺さんだって、俺信じてます」
「ありがとう、立向居！」

少しして、炎のストライカーの目撃情報があつた場所に到着。キャラバンから降りた俺達は周囲を見渡す

「俺はもう一度、豪炎寺とサッカーしたい。宇宙人を倒す為にも！」

「俺も早く会いたいです。豪炎寺さんに」

「そんなに期待していると、違った時のショックが大きいよ。うっしっし！」

豪炎寺に思いを馳せる田堂と立向居を茶化す木暮だったが、無言で後ろに回った音無さんによって首根っこを掴まれ連行された。木暮が連れていかれた後に、鬼道が2人に

告げる

「探すしかない。地上最強のサッカーチームになる為にもな」

「うん！」

「響木さんの情報だところら辺にいるはずだ」

「ああ！だから、ここでキャンプを張って徹底的に探すぞ！皆で聞き込みだ!!」

俺は風丸達と一緒に聞き込みをしたが情報は一切手に入らなかった。上手いこと変装して溶け込んでるのか。みんなが上手く誤魔化しているのか…:

情報が入らなかつたため一度キャラバンへと戻ると円堂と一緒に見たことのないやつがいた。

「宜しくな、雷門イレブン！」

「何で割烹着…?炎のストライカーって、この人？」

名前は土方雷電といい円堂と鬼道、立向居の3人が彼を連れて戻って来たのだ。因みに土方は綱海と同じで俺達よりも1歳年上なんだとか

「いや、そうじゃないんだけど…:土方は、凄いディフェンス技を持つてるんだ！」

「雷門の円堂にそう言ってもらえるとは嬉しいねえ、はっはっはっ!!」

楽しそうに皆に告げる円堂。気を良くしたのか土方が豪快に笑う。そんな土方の肩に手を置き、円堂は続けて皆に言う

「それで、皆に紹介しようと思ったんだ。俺達のチームに入ってもらおうと思って！」

「おっと、そいつは出来ない相談だ」

「え？」

円堂はチームに土方を加えたいと思っていたようなのだが、土方がこれを拒否。鬼道が理由を問うと、土方には5人の弟、妹がおりその面倒をみなくてはならないといけな
い為、沖縄を離れられないのだと言う。その理由に納得した俺達に、土方がここが襲わ
れたなら力を貸すと言い、この辺りでサツカーの練習に向いている場所を教えてくれた

「おーい！」

「炎のストライカー、見つけたぜー！」

「えっ!？」

「豪炎寺がいたのか!？」

すると、遅れてきた土郎と土門が俺達の所にやって来た。2人の言葉に円堂と染岡が
反応し、皆も豪炎寺が見つかったのかと期待する。しかし2人が連れてきたのは豪炎寺
ではなく、炎のような髪型が特徴的な赤い髪の男だった

「お、誰だ？」

「こいつは土方、近くに住んでるんだ。だから、色々聞こうと思ってさ」

「どうも」

「どうも〜」

土方と土門、土郎の顔合わせもそこそこに、土郎が連れて来た赤い髪の男を俺達に紹介する

「でも、その必要はなくなつたよ。炎のストライカーはこの南雲だ」

「つーわけだ。俺は南雲晴矢。キャプテンの円堂だろ？宜しくな」

「あ、ああ…宜しく」

赤い髪の男…南雲に返事をする円堂だったが、その表情は若干落ち込んでいた。炎のストライカーが豪炎寺だと思つていたので、内心では少し落ち込んでいるのだろう。周りの様子を見ると、周りの皆も一緒だった。

「こいつ、俺達があちこち探しているのを聞き付けて、自分達から売り込んで来たんだぜ？」

「この辺に住んでるの？」

「まあね」

財前さんの質問に軽く答える南雲だが、土方が怪訝な表情を浮かべて南雲に顔を近づけて質問する

「ホントかあ？見ねえ顔だなあ…」

「…俺もあんたを見た事ねえな」

視線をぶつけ合いながら、ギスギスした雰囲気漂わせる土方と南雲。そんな2人を、正確には南雲を木暮が険しい表情で見つめているのに気付いた音無さんが話掛けた。

「どうしたの木暮君？」

「あいつ匂うんだ、嫌な感じの奴って匂いが…」

「そうなの？木暮君」

音無さんの問いに頷きで返事をし、南雲を目を鋭くして凝視する木暮。

「見せてやれよ、さっきの！」

「強力なシユートだったよね」

「ただ見せるだけじゃあつまらねえなあ。俺をテストしてくんねえか？」

土門と土郎の言葉を受けて、南雲は円堂達にテストを提案した。自分がチームに相應しいかどうか、その目で確かめてほしいと告げる

「雷門イレブンVS俺！どうよ？あんた等から1点取れば俺の勝ち。テストに合格だ」

「なんだと…？」

「テストしてくれって言う割に、随分仕切るよねこいつ…」

「あはは…」

南雲の提案に染岡が顔を顰め、財前さんのツツコミに木野さんが苦笑する。しかしテ

ストの条件からして、円堂達全員を相手にしても点を取れるような物言いなのが気になった。

きっと試してるんだろうな。グランの言っていた円堂がどんなやつなのかを

「大した自信ね」

「自信があるから言ってるんだ」

「よし！やろうか、テスト！」

「おお、なんか緊張するっス！」

円堂はテストに賛成のようで、他の皆もテストをする事に反対はないようだ。瞳子監督も止める様子はないため俺からは特に何も言わずこのまま進めた。

「立向居。キーパー、やってみるか？」

「いいんですか!？」

テストという事で立向居に経験を積ませたいのか、円堂が立向居にキーパーを任せようとする。すると南雲がそこに待ったを掛けた

「おっとそりゃ無しだ。俺は宇宙人をやっつけた奴等とやりたいんだ。マジで頼むぜ」

そう言っつて、南雲は円堂に向けて不敵な笑みを浮かべた

キャラバンを止めていた場所から少し離れた場所にあるサッカーグラウンド。そこ

で円堂達は南雲の要望通り1対1でテストを行うべく、南雲と対峙していた

F
W

染岡 士郎

風丸

浦部

M
F

鬼道

一之瀬

財前

土門

D
F

壁山

栗松

G
K

円堂

控え：高梨 木暮 目金 立向居

いつものフォーメーションとは少し変わり南雲の実力を測るため少しDFよりのフォーメーションとなった。ちなみに俺は南雲のプレーを観察するためベンチで目金とともにビデオを撮ることにした。他のメンバーはベンチで瞳子監督と木野さん達マネージャー組、そして土方と共にテストを観戦する

「準備は良いかね？」

「んなもんとつくに出来てるよ」

審判を務める古株さんの確認に返事をして、南雲は円堂を指差し大声で告げた

「円堂！覚悟しな!!」

「あいつつ…俺達は眼中にねえつてか!」

南雲の発言に、染岡が怒った様子を見せる。染岡が南雲を睨み付けた。それを受けた南雲は、不敵な笑みを浮かべる

古株さんがホイッスルを鳴らし、キックオフ。染岡と浦部さんが南雲からボールを奪おうと駆け出そうとした

「ふっ!」

『!?!』

「何や!?!」

だが、染岡と浦部さんが駆け出すよりも先に南雲はボールを踏み付けて回転を加え、跳ね上がったボールを高く蹴り上げた。その高さにみんなが驚いている間に、南雲はボールに向かって跳び上がり、ボールの所にまで到達する

「こんなのさつきは見せなかつたぞ!?!」

「跳んだ!?!あんなに高く跳びましたよ!!」

「すげえな、あいつ」

「空中戦が得意なんでしょうか?」

南雲の跳躍力に驚く俺達。南雲が空中でボールを蹴り、炎を纏ったシュートが放たれる。それを見て鬼道が指示を出す

「塔子、ディフェンスだ！風丸は跳ね返ったボールの確保を!!」

「おおっ！」

「任せろ！」

シュートの前に塔子さんが立ち塞がり、風丸が塔子の前に出ていつでもボールを拾いにいけるよう構える

「ザ・タワー！」

シュートを止めようとするがそこには空高く跳んでいたはずの南雲が急降下して一之瀬と鬼道の間に着地すると同時に再度跳び上がり、なんと自身の放ったボールに追い付き、再びボールを蹴ってシュートを加速させた

「うわあ!？」

加速されたシュートが塔に激突し、一瞬で塔が崩壊。塔子さんが衝撃で後ろに吹き飛ばされる。塔を破壊した際の反動でボールは再び跳ね上がっており、ボールの着地点に向かって風丸が走る

「もらった！」

「甘えよ!!」

「な…!?!」

風丸があと1歩の所でボールに触れるというタイミングで、南雲が地面に着地すると同時に3度目の跳躍。風丸の目の前から猛スピードでボールを搔つ攫い、そのまま高く跳んでいく

「なんてスピードだ!?!」

「だったら、着地する所を！フレイムダンス！」

「アイスグラウンド!!」

今度は一之瀬と士郎が南雲に仕掛ける。地面に着いた瞬間を狙って一之瀬が一気に加速し南雲からボールを奪おうとする。これを南雲は体を回転させてあっさりかわすと、次いで士郎が放った氷を、ボールを蹴り上げてから跳んで避ける。蹴り上げたボールを取ろうと士郎が跳ぶも、ボールは士郎の跳んだ高さよりも更に上へと飛んでおり、南雲がボールを足で受け止めて士郎を跳び越えてしまう

「くっ…!」

「ボルケイノカット!!」

「ザ・ウォール!!」

これ以上いかせまいと土門と壁山がディフェンス技を放つが、先程同様に2人の届かない場所にまで跳び上がって回避する南雲

「地面に足が着いてるよりも、跳んでる時間の方が長いかも……」

「ボールのコントロールも、絶妙ですよ！」

流星はエイリア学園マスターランクチームなだけのことはあるな。

そしてゴール前まで辿り着いた南雲は空中でボールを蹴り上げると地面を力強く踏んで先程までよりも更に高く跳躍する

「紅蓮の炎で焼き尽くしてやる！」

跳び上がった南雲の後ろに太陽が出現し、そこから溢れた炎をボールが纏うのと同時に、南雲がオーバーヘッドの体勢からシュートを放つ

「アトミックフレア!!」

炎を纏ったシュートが円堂に迫る。それに対し円堂は様子を見るためマジン・ザ・ハンドで対抗する

「よし、来い！マジン・ザ・ハンド改!!」

背後に金色の魔神を出現させ、ギリギリまで引き付けてから右手を前に突き出してシュートと激突する。

「ぐっ……く……っ!?!うわあああ!!」

マジン・ザ・ハンドが南雲のシュートに対抗出来たのは、ほんの微かだった。その直後にシュートの威力に負け、ゴールネットに炎を纏ったシュートが円堂の身体ごと直撃

した。その光景に皆が声を失う中、円堂は立ち上がると嬉しそうに南雲に声を掛けた
「すっげーな南雲！」

「当たり前だ。俺が入れば宇宙人なんざ余裕なんだよ」

「正に炎のパワー……」

「アトミックフレア……凄まじい威力のシュートでしたね」

「監督！」

「豪炎寺君じゃなかったけど、彼なら強力な戦力になりますね！」

「……」

南雲のシュートの威力を見て、ベンチにいる皆は南雲のチーム入りに賛成のようだ。瞳子監督は無言のままだが、俺も南雲のような強力なストライカーがチームに入ってくれるのは喜ばしいが南雲がエイリア学園じゃなかったらの話だけどね

「テストは合格か？」

「勿論！うちのチームで、一緒に戦おうぜ！宜しくな、南雲！」

円堂が笑って南雲に手を差し出し、南雲も口元を上げて円堂の出した手を掴み握手を交わした

「マジン・ザ・ハンド、悪くねえ……」

「ん？」

円堂は嬉しそうにしながら瞳子監督に話し掛けた

「監督！南雲をチームに入れます！いいですよね!？」

「大きな戦力になる事は認めましょう。…ただその前に、幾つか質問があるわ」

「いいぜ」

南雲の返事を聞いて、瞳子監督が南雲を見つめながら質問を告げる

「これから一緒に戦っていく以上、私には貴方達の身柄を預かっていく責任があります。まず、貴方はどこの学校の生徒なの？」

「……」

吉良監督が質問した内容を聞いた瞬間、笑っていた南雲が顔を険しくして無言で瞳子監督を睨み付けた。暫く無言が続いていると

「エイリア学園だよ」

「!？」

その時、聞いた事のある声が聞こえて来た。その声に俺達が反射的に声のした方を見やると、高い建造物の上に、グランが立っていた

「ヒロト！っ!？」

「円堂、落ち着け!」

グランの姿を見て、咄嗟にグランの所へ向かおうとした円堂を鬼道が腕を掴んで止め

る。そして皆は南雲を見やった。今のグランの発言からすると、南雲の正体は…

「なあ、エイリア学園ってどういう事だよ？」

「まさか、君は…！」

「…ちつ。あーあー！つたく、邪魔すんなよグラン!!」

財前さんと一之瀬が南雲に問い掛けると南雲が舌打ちして周囲に荒々しい言葉と霧囲気を放ち、その霧囲気を察して俺達は南雲から距離を取る。そして南雲は忌々しそうにグランを睨み付けた

「雷門イレブンに入り込んで、何をするつもりだったんだ？」

「俺はグランのお気に入り達がどんな奴か、見に来ただけよ」

「え…!？」

「騙されちや駄目だよ、円堂君！」

いつもの口調ではなく、今回はいつもよりも強めの口調で話していた。グランが建造物の上から黒いサッカーボールをこちらに向けて蹴り飛ばした。それを受け止めようと構える円堂だったが、円堂の前に南雲が跳んでボールの前に立ち塞がると、黒いサッカーボールを腹で受け止めて空に上げ、次いで跳び上がって竜巻を起す。竜巻が消えると、胸に紫色の円形の石のような物が付いた、赤と白を基調にしたユニフォームを着た南雲が姿を現す

「あれは!」

「エイリア学園!」

南雲の姿を見て円堂と鬼道が叫ぶ。

南雲は空中で黒いサッカーボールをグラン目掛けて蹴り飛ばし、それをグランは蹴り返す。蹴り返されたボールを足裏で受け止めた南雲は、俺達の前に着地する

「南雲、お前…」

「俺か? こつちが本当の俺、バーンってんだ。覚えときな」

「バーン?」

「エイリア学園、プロミネンスのキャプテンだ」

「プロミネンス…?」

「また新しいチームか!」

これでダイヤモンドダスト、ギャラクシー、ジェネシス、プロミネンスと、最低でも後4チーム、もしかしたらそれ以上のチームを倒さないとエイリア学園に勝った事にならないと理解したからだ。そんな俺の前で、バーンはグランに向けて話を続ける

「グランよお、こいつ等はジェミニストームを倒した。イプシロンとも引き分けた。そして、お前等ガイアから1点を取った。まだまだ強くなるかもしれねえ、だからどれだけ面白い奴等か近くで見てもやろうと思った。俺は俺のやりたいようにやる。もし俺等

の邪魔になるようなら……潰すぜ。お前より先になあ！」

話しながら、バーンは円堂に指を差してグランを睨み付けていた。

そう考えていると、グランが建造物の上から俺達の所まで一気に降りて来た。土煙と突風が吹き荒れる中、俺達はなんとかその場に堪える。暫くして土煙と突風は収まり、グランとバーンは黒いサッカーボールを中心に対峙していた

「潰すと言ったか？それは得策じゃない。強い奴は俺達の仲間にしてもいい。違うか？」

「仲間？こんな奴等をか？」

「仲間だつて……？」

仲間にするというグランの言葉に困惑した表情を見せる円堂。そんな円堂を見て、バーンが口元を上げて言葉を紡ぐ

「教えてやろうか？豪炎寺つて野郎もな……」

「……っ！豪炎寺だど!？」

「お喋りが過ぎるぞ、バーン!!」

「好き勝手やつてるお前に言われたかねーな！」

バーンの口から豪炎寺の名が出た事に鬼道が驚きの声を上げると同時にグランが強く叫んでバーンの言葉を遮ろうとし、次いで黒いサッカーボールを蹴る。その瞬間、黒

いサッカーボールから白い光が放たれ俺達は咄嗟に目を庇う。光が消えると、グランとバーンの姿はどこにも見当たらなかった

俺達はその場で立ち尽くしてしまった。そしてこの時、俺達は気付いていなかった。ゴールの後ろの森の中からオレンジ色のパーカーのフードを被った者が、俺達を眺めていた事に……

第32話 大海原中へ！

自身を炎のストライカーだと呼んでいた南雲晴矢の正体は、エイリア学園プロミネンスのキャプテンであるバーンだった。それはつまり、炎のストライカーは他にいるかもしれないという事でもあった。調査が振り出しに戻っただけだと鬼道が告げ、引き続き炎のストライカーを探すことになった。

そして次の日

「さあ！今日も張り切って特訓だ!!」

『おおーっ!!』

昨日使ったサッカーグラウンドに集まった俺達。炎のストライカー探しを木野さん達マネージャー組に頼み、次のエイリア学園との戦いに備えて各自で特訓を行う円達。土方は野菜の差し入れを持って来てくれた。

「疾風ダツシュ改!」

「スピニングカット!!」

風丸と栗松は1対1で勝負をしてお互いを高めあっていた。よかつた〜普段通りの姿

で特訓を行っているのをみて安心した。

円堂は鬼道と一緒に正義の鉄拳の習得を目指している。立向居は引き続き染岡との特訓。

それぞれが特訓をしていた。
すると、

「円―堂―!!」

「ん?」

最近聞いたばかりの声が聞こえた。円堂達もその声が聞こえたのか、特訓を中断して声のした方を見やる

「い―い―やっほ―い―い―う!!!」

「綱海―!」

声のした方を見やると、波から飛び上がった綱海がサーフボードに乗ってこちらに向かって落ちて来た

綱海がグラウンドに勢い良く着地を決め、その横にサーフボードが縦に突き刺さった。しかも目金の真横に

「よお!探したぜ、円堂!!」

「ちよつと！危ないじゃないですか！いきなりサーフボードで飛んで来て!!」
「わりーわりー。お前等見たら、すつ飛んで来たくなつてな」

目金に注意されると、綱海は笑みを浮かべたまま謝罪する。謝罪を受け目金が黙ると、綱海が円堂に話し掛けた

「それより円堂。俺達のチームとサッカーやらねーか？」

「俺達のチーム？」

円堂が問うと、どこからか取り出した水色のような濃い黄緑色を基調としたユニフォームに着替えた綱海が返事をする

「俺、サッカー部に入つてよ」

「え…？サッカー部に!？」

驚く円堂に、綱海が説明しだした。綱海がサッカー部に入った理由は、この前のサッカーがなんか面白かったからという理由であった。本人はノリで入部したらしい。それで入部した際にチームの者達に俺達の事を話したらしく、俺達雷門中と試合がしたいと言い出したのだとか。綱海ももう一度サッカーがしたいと思っており、俺達を探していたのだ

綱海の話聞いた円堂達は試合に乗り気だったのだが、瞳子監督が現れて試合の許可を認めないと発言。エイリア学園から強い敵が次々と現れている現状で、練習相手にな

るかも分からない地元ของทีมと試合している時間などないと告げる

そんな瞳子監督の話に、綱海が反論する。なんでも綱海の入った大海原中サッカー部は沖縄でもピカイチの実力校で、フットボールフロンティアにも出場する予定だったらしい。だったってのは監督が地区予選の決勝の時期に行われた村祭りでもりまくって試合の事を忘れてしまい、集合時間に間に合わず不戦敗というものだった

「ま、そういう事もあるよな!」

『ありません!!』

瞳子監督を除く女性陣から総ツツコミをくらいつつ、綱海は円堂に試合をするように懇願。それを受けて円堂は試合をしたくなかったのか、他の皆と共に瞳子監督に試合の許可を求め、瞳子監督は呆れた表情で好きにきなさいと告げた。試合の許可を貰うことができた。

そして俺達は大海原中へと移動をした。

「此処が俺達の、大海原中だ!」

『ええっ…!?!』

「此処が学校ー!?!」

大海原中に着いた俺達が見たのは、綺麗な海の上に水上コテージと呼ばれる、海の上

に建てられた校舎と、中央にでかかど設置された巨大なサッカーグラウンドであった。大海原中を一通り巡って海を眺めたりしていると、何故か隠れていた大海原中サッカー部のメンバーが現れ、大海原中の監督さんがハイテンションで円堂達を歓迎してくれた。

それから綱海がサッカー部のメンバーを俺達に紹介してくれたのだが：どの人も癖が強いというか、ノリを重視しまくっているというか：夏未さんが頭が痛くなつて来て、先に帰ろうとするぐらいにはテンションが凄かったと述べておく。

その後、互いに試合について確認し合い、円堂達雷門中と大海原中の試合が漸く始まろうとしていた。

第33話 ノリノリサッカー!?

「よし、皆！気合を入れていくぞ！相手はちよつと変わってるが、戦う時はいつも真剣勝負だ!!」

『おおっ!!』

「皆ー！頑張ってるねー!!」

円陣を組んで円堂が皆に檄を飛ばし、各自ポジションに着いていく

F W

浦部 風丸 染岡 士郎

M F

鬼道 財前

一之瀬 土門

D F

壁山 栗松

G K 円堂

ベンチ：木暮、目金、立向居、高梨

今回は練習試合ということもあり俺はベンチで浦部さんがスタメンで出場している。そして新しい必殺技のバタフライドリームを試すため財前さんは一之瀬と交代している。

『両チームがポジションに着きました！まもなく試合開始です！』

「さて、FFに出場出来るほどの実力があるかお手並み拝見だな」

「皆、ガンガンノツてけよー!!大海原、あいや！大海原、あいや!!」

全員がポジションに着くと向こうのベンチから監督さんの大声が響いて来た。

「…やっぱり帰るわ」

『夏未さん!』

向こうのノリに付いていけず帰ろうとする雷門さんを木野さんと音無さんが引き止めている間に、審判の古株さんがホイッスルを鳴らして試合が始まった。

まああのノリは苦手だろうなー

「皆！ノツてくぜ!!」

『おうっ!!』

「ヘイッ！」

「ヨッ、ハイッ!」

大海原中のキックオフで試合開始。綱海の言葉に全員で返事をし、雷門ゴールを目指して上がっていく…かと思いきや、池宮城からボールを受け取った古謝は頭でリフティングを行う。何度かリフティングをしてから東江へとヘディングでパスを出した。浮かせたボールを足で止めると、染岡の方に体を前にしたまま右足を大きく伸ばして後ろへとパスを出す

「ヨッ・イエー!!」

「何なんですか、あれ…?」

そして東江からのパスを受け取った渡具知が後ろ足でボールを蹴り上げると、頭の上にボールを置きながら体を左右に揺らす。通常のサッカーではやらないプレーに音無が困惑した表情で声を漏らす。それは他の雷門のメンバーも同じで、大海原中のプレーに虚を付かれていた

「トウントウクトウントウクトウクトウク…」

そんな中、1人フィールドでリズムを取っている者がいた。綱海曰く大海原中サッカー部で1番ノリが良い男だという、MFの音村だ。彼は何故か腕を組んだまま動かないでいた。

「うおーっ!皆ノッてんなー!こいつは俺も負けられねえぜ!!渡具知!」

「セイツ!」

ここで綱海がDFラインから前に飛び出し、渡具知に声を飛ばす。それを受けて渡具知から送られた高いボールを、綱海は跳び上がった両足でキャッチした。凄いプレーではあるが、今の状況では意味があるとは思えない行動である

「ナイスキャッチー!!」

『イエーツ!!』

しかし大海原的にはこのプレーが良かったのか、監督含め大海原のメンバー全員が大声で盛り上がっていた。無言で立ち去ろうとする夏未を木野と音無が必死に引き止めてる間に、漸く大海原が雷門陣地へと攻め込んで来た。

これはある意味厄介なチームだな……

「ノツてけよー!それっ!!」

「何がノツてけや!そんなノリでウチ等に勝てると思つたら大間違いや!!」

「トウントウクトウントウクトウクトウク:プログラアツペンポ!8ビート!!」

綱海からボールを受け取った古謝を止めようと、浦部が迫る。その時、ずっと黙ってリズムを取っていた音村が突然何かの指示のようなのを告げた。すると、古謝は接近して来た浦部をあつさりとかわす

「えっ!?!」

「だったら私が！ザ・タワー!!」

かわされた事に浦部が驚き、今度は塔子がドリブルで上がって来る古謝を止めようと必殺技を発動させる

「アンダンテ！2ビートダウン!!」

「ヨウツ!!」

『?!』

だが、再び音村が指示のようなのを告げた直後に古謝が突然ドリブルで上がるのを止め、ザ・タワーからの落雷が落ちる手前で後ろへとパスを繰り出し、雷門のデイフェンスをまたもかわす

「どうなってるんですか、これ…?」

「まるでこっちの動きが読まれてるみたいですよ…」

試合を眺める立向居と目金が大海原の動きに驚いている。成る程…リズムを図りそのリズムをずらすことにより交わしているのか…

さて、どうする?天才ゲームメーカー

大海原の動きに慣れず次々と交わされていた?池宮城がチャージを仕掛けた栗松をかわして、雷門のDFラインに迫る

「わしもいくぞー!うおおおっ!!」

ここでDFの宜保が前に出て来て、池宮城と古謝のいる所まで一気に爆走。池宮城がボールを空へと蹴り上げ、宜保が池宮城と古謝の手を掴むとその場で体を横に勢い良く回転させる。そして宜保が2人を空に向かってぶん投げた。投げられた2人は上昇しながら体勢を整えると、落下してくるボールに向かって同時に踵落としを叩き込む

『イーグルバスター!!』

「よしっ! 決まったぜ!!」

「円堂君!」

2人の後ろに鷲が現れ、空中からボールと共に雷門のDF陣の上を通過してゴールを強襲する。点を取ったと確信した綱海が拳を握って叫んだ

「マジン・ザ・ハンド改! はあっ!!」

迫るシュートに、円堂がマジン・ザ・ハンドで対抗。真正面から魔神の右手をシュートにぶつけ、ボールを完全に受け止めた。その直後、大海原のメンバー全員が先程同様大声で盛り上がり出した

『イエーツ!!!』

「イエーツ、て…止められたんですけど」

「ナイスセーブだ! 円堂君もよく止めたぞー!!」

「すごいな円堂、あんなシュートが止められるなんてよ…。うおおおっ!! なんだかこっ

ちもノツてきたぜ!!」

「いくぞー!それっ!!」

円堂がボールを蹴って、雷門の反撃が始まる。かと思われたのだが、大海原を相手に雷門は攻めあぐねていた。どうした事か、ボールが上手く繋がらなくなっていた

「16ビートー!」

攻めようとするれば、音村の指示を受けた大海原のメンバーによってボールを奪われ、攻撃が途絶えてしまう。守ろうとしても、プレスやチャージを仕掛けても全てかわされてしまう。ボールを大海原にキープされたまま、追い込まれていく

「よしっ!」

古謝から喜屋武へのパスをカットした一之瀬が攻め上がろうとする。そこに、綱海が駆け上がって来た

「任せろ!!くそっ…なんで取れねえんだよ!」

止めようとした綱海だったが一之瀬はこれかわし、ゴールを狙って前線へと走る。そこに、音村の声が響く

「8ビートー!」

「うわっ!」

音村の声が響いた直後、東江が一之瀬からボールが奪ってしてしまう。取り返そうと鬼道

が動こうとした、その時だった

「トウントウクトウントウクトウクトウク…」

「…！（まさかあいつ…！だが、そんな事が本当に出来るのか…？）」

鬼道の隣を通過した音村が小さく呟いている事に鬼道が気付き、ある考えが頭を過ぎる。普通ならありえないその考えの答えを知るべく、鬼道は音村を凝視する

「ボルケイノカット！」

「アダージョ！4ビートダウン！！」

土門のデیفエンス技を簡単に東江がかわす。それを見て音村が軽く口元を上げたのを、鬼道は見逃さなかった。

「（なるほど。そういうことだったのか！）」

『イーグルバスター！！』

「マジン…ええ？」

雷門のデیفエンスを突破して宜保、池宮城、古謝の3人が再び空からのシュートがゴールを襲うも、狙いが荒かったのかボールはゴールの上を通過していった。雷門のボールとなったタイミングで、鬼道が皆を集めてボールが繋がらない理由について話し出した

「リズムを凶ってる?」

「そうだ。俺達が抜こうとしたりチャージを掛けようとしたその瞬間に、奴はプレーのリズムを割り出し、そこから逆算して仲間に指示を出している」

「それで、幾らやってもボールが取れなかったのか」

「でも瞬間について、そんなの何秒も無いぞ?一瞬でリズムなんて、本当に凶れるのか?」
「あいつにはな。恐ろしいリズム感だ」

一之瀬の問いに答えながら、鬼道は音村を見やる。瞬時にこちらのプレーのリズムを読み取り、逆算して行動するタイミングを指示出来る程、ずば抜けたリズム感を持っている事を評価していた

「いいな皆、少しずつタイミングをずらしていくぞ」

『あぁっ!』

説明を終え、試合再開。円堂からボールを受け取った鬼道が上がっていくと、前から渡具知が迫って来た。それを見て、鬼道が一之瀬へとパスを出そうとする

「一之瀬!」

「16ビート!」

「(来た!タイミングを…!)ふっ!」

『…!』

音村の指示を受けた渡具知がスライディングを仕掛けた瞬間、鬼道がドリブルの速度を少しずらした。すると先程までかわせなかったスライディングの回避に成功し、鬼道から一之瀬へとボールが繋がった

「8ビートー！」

「よし、タイミングを……！」

今度は赤嶺が音村の指示を受けて一之瀬に迫る。これを一之瀬は鬼道同様タイミングをずらす事で突破。この試合で初めて、ゴール前までボールを持っていく事に成功する

「いかせんー！」

「それっー！」

宜保がゴール前に立ち塞がったのを見て一之瀬はその場で反転し、後ろから上がって来ている浦部さんと財前さんの前方へボールを高く上げる

「バタフライドリームだ！」

「塔子ー！」

「うんー！」

一之瀬の言葉に、浦部さんと財前さんがボールの所まで跳び上がって手を繋ぎ、浦部さんが左足で、財前さんが右足で体を外へと広げながら同時にボールを蹴る

『バタフライドリーム!!』

空中から放たれたシュートは、不規則な軌道をしてゴールへと迫る。それに対してGの首里が必殺技で対抗する

「ちやぶだいな返し!」

首里が地面に両手をつつまみ上に向かって振り上げ、守るが地面に罅が入った瞬間一気にそれが広がり粉碎される。そしてボールはゴールネットへと叩き込まれた

雷門1ー0 大海原

『ゴール! 雷門先制ー!! ついに均衡が破られましたー!!』

「やったな!」

「ああっ!」

「ナイスシュート!」

『イエーツ!!』

バタフライドリームが決まった事に浦部さんと財前さんが喜び、円堂がゴール前から2人に労いの言葉を飛ばす。すると、大海原のメンバー達が大声で盛り上がっていた。相手が点を取っても変わらないようだ。そんな大海原のノリに雷門のマネージャー達が呆れていると、前半戦終了のホイッスルが鳴った

『(ト)でホイッスル! 1対0、雷門リードで前半終了だ!!』

ハーフタイムに入り、ベンチで休憩を取る両チーム。円堂達は大海原中が自分達の想像以上の実力を持つ相手だった事に驚きながらも、後半に向けて準備していく

「FFに出場したつてのは強ち間違いではないようだな。後半はこつちから攻め込むぞ。」

『おおっ!』

「そろそろFW陣も仕事を頼むぜ」

「ああ任せとけ!こつちからバンバン決めてやるからよ」

「うん、任せといて」

「任せろ!」

俺はFW陣の元に行き声を掛けた。どうやら後半は安心できるな。

「ウチ等やつて後半でも活躍したるで、なあ塔子!」

「うんっ!」

「俺も負けてられないな……!」

「皆燃えてるねえ……ま、俺もだけど!」

やつぱりいいよな。純粹にサッカーを乐しめるのは。最近はいりりア学園との戦いで中々乐しめるサッカーを出来なかつたからな。

ハーフタイムが終わり、後半戦が開始した。

浦部からボールを受け取った染岡が駆け上がり、攻め込む。1番近い位置にいる古謝が行く手を阻もうとすると、染岡は口元を上げてボールを後ろへと送った。ボールを受け取ったのは、士郎だった。

「さあー行くよー!」

士郎にボールが渡るとトップスピードでぐんぐん上がって行つた。音村がタイミングを図るが前半にはなかった士郎のスピードに上手くリズムを図れなかったのだ。

「行くよ、染岡くん!」

「ああ!ワイバーン!」

「ブリザード!」

「ちやぶだいたい返し!なにっ!」

近距離から放たれた強力なシュートに対して、首里が先程同様に円形状の地面をぶつけてワイバーンブリザードを跳ね返そうとする。しかし互いの必殺技がぶつかる。しかしすぐに打ち破りゴールへと突き刺さった

雷門2ー0大海原

『ゴール!雷門、追加点だー!!』

「よっしやあっ!!」

『イエーツ!!!』

シュートを決めて、嬉しそうに吼える染岡。そんな染岡のノリが良かったのか、やはり大海原は盛り上がっていた

士郎の速攻で調子を取り戻したのか、後半になって雷門がどんどん攻め始める。ドリブルしてくる相手を止める事にまだ慣れていない綱海を狙う事で、前半よりもボールを長くキープし続け、隙を突いてゴールを狙う

「キャン！4ビートだ!!」

対して大海原は、雷門の攻撃にドリブルには人海戦術を、パスには音村の指示による確なタイミングでカットを仕掛けて雷門の攻撃のリズムを崩そうとしながら、前半とは違う選手を使った新しいリズムを駆使して攻撃に転じていく

「フレイムダンス！風丸!!」

「疾風ダツシュ改!!」

「っ……!」

必殺技で池宮城からボールを奪った一之瀬が風丸にパス。ボールを受け取った風丸が必殺技で更に加速。スピードで音村を抜き去る

そして再びシュートチャンスが訪れた

「ハァ！刹那ブースト……!」

「ちゃぶだいい…… なにつ!」

『ゴォール! 雷門追加点! 決めたのは風丸だあ!』

大海原も反撃をしようと宜保がドリブルで上がるが木暮が阻止。木暮はボールを奪うと、相手陣地に攻め込んでいる財前さんへとボールを飛ばした。もう1度バタフライドリームを狙って飛んで来たボールを追う財前だったが、そこに1つの影が迫っていた

「旋風陣!!」

「うおっ!」

「塔子!」

「どりゃあああつ!!」

「綱海!」

試合の中にサーフィンとはまた違う一体感を感じていた綱海が、ここに来て飛び上がり、試合開始直後に見せた空中での両足キヤッチで塔子へのパスをカットした

「渡具知!」

「いいで綱海!」

「おうっ!」

「これでまた、リズムが変わったね」

「…」

綱海のプレーでまたもリズムが変わった大海原。点数では雷門が押しこそいるが両チームほぼ互角の試合展開となり、後半も残り時間僅かまで迫っていた

「おおおおおっ!!!」

「っ!?!」

大海原のディフェンスを抜け出した一之瀬から、一度抜かれた綱海が必死に後を追ってボールを奪う事に成功する。前線へとパスを出そうとして、雷門がパスを封じるように各選手へマークに付いていた

「くそっ、これじゃパスが出来ねえ……!だったら、撃つしかねえだろ!!」

誰にもパスをすることが出来ない綱海はドリブルもせずその場でシュートを撃とうとしていた。

綱海がフィールドに津波を巻き起こしてボールの上にサーフィンのように乗った状態から、オーバーヘッドキックでゴール目掛けてシュートを放った

「ツナミブーストツ!!」

「マジン・ザ……(っ、間に合わない!)」

D Fの位置からの超ロングシュートが、凄まじい勢いでゴールに向かって迫る。円堂は即座にマジン・ザ・ハンドの発動体勢に入るも、既にシュートは目前まで来ており間に合わない判断。その時円堂はシュートを止めようと、咄嗟に実行した方法で右拳を

前に向かっぎューーンと突き出していた

「…っ!?!のわっ!!」

次の瞬間、綱海のシュートと円堂の右拳がぶつかる。少し拮抗するが円堂の身体が後ろへと弾かれた。円堂は直ぐに上半身だけ起こしてボールの行方を追おうとして、ボールがゴールラインの手前で止まっている事に気付く。その直後、古株さんが鳴らしたホイッスルの音がグラウンドに響き渡る

『試合終了ー!雷門、2対0で逃げ切りましたー!!』

「今のはこの間の…」

試合終了を聞きながら、円堂は綱海のシュートを弾こうとした時に、右拳にこの前と同じ感覚があったのを思い出しながら、自身の右手を凝視するのであった

第34話 完成？究極奥義？

「それじゃあ始めろぜ。まずはパドリングからな」

「パドリング？…あ、それか！」

「頑張れよ、円堂」

「おうっ！絶対正義の鉄拳、完成させてやるぜ!!」

水着に着替えた綱海が、サーフボードの上に腹這いになって両手で水をクロールのようにかいて浜辺から海へと前進していく。その後を、綱海と同じく水着に着替えた円堂が追っていった

大海原中との試合を終えて、円堂が最後に綱海のシュートを防いだ際に見せたあの動き…あれこそ正義の鉄拳の動きなのではないかと立向居や木野さんは推測し、ついに究極奥義をマスター出来たのかと皆で喜び出した。しかし肝心の円堂は無我夢中でやつたらしく覚えてないとのことだった。

すると綱海が来て、サーファーが波にのまれそうになった時にボードから吹っ飛ばれないようにする時の動きだと教えてくれた。円堂は綱海にその動きをマスターする為にサーフィンを教えてくれないかと頼み出した。綱海は素人がやって簡単に出来る動

きではないので止めた方が良いと言うが、正義の鉄拳を覚えたい円堂は熱心に頼み込んだ。その熱意に折れたのか、手は抜かないという条件付きで綱海が円堂にサーフィンを教える事となった

そして試合終了後、砂浜にて大海原中サッカー部と一緒に皆がバーベキューを楽しんでいる中、一足先に食べ終えた円堂と綱海が早速サーフィンの練習を始めていた

「ああ………のれない」

「でもそこに16ビートが加われれば……」

「右の守りが甘くなる!」

「ピンゴ!」

バーベキューを楽しんでいる者もいれば、瞳子監督を口説こうとしていたのに当の本人がこの場にいなくて意気消沈している大海原中の監督さんや、鬼道と大海原中の音村の2人が放していたりと思いきいに過ぎしていた。

それから数日後。円堂が試合で見せた動きをサーフィンで成功させ、正義の鉄拳をマスター出来たかどうか確認する為、皆で大海原中のサッカーグラウンドに集まっている

た。ゴール前には円堂が、フィールドには鬼道、染岡、一之瀬が立っている

「行くぞ、円堂！」

「来い！」

俺達が見守る中、鬼道、染岡、一之瀬が駆け出し、円堂へ向かってシュートを放つ

「皇帝ペンギン！」

『2号!!』

5匹の紺色のペンギンがボールと共に円堂目掛けて放たれる。それに対し円堂は、左足を大きく上へ上げてから地面を力強く踏み付け、サーフィンでマスターした腰の動きを使つて握り締めた右手を前へと突き出す。その瞬間、気で形成された右拳が回転しながら出現した

「正義の鉄拳!!」

気で形成された右拳が、円堂の動きと連動してシュートへ飛んでいき激突。そして皇帝ペンギン2号を拮抗する事なく、容易く弾き飛ばした

その光景に、俺を含め皆が驚愕する。あの円堂大介さんでも完成出来なかった不可能な技……究極奥義、正義の鉄拳を円堂はついに完成させたのだ。シュートを弾き飛ばして笑みを浮かべる円堂を見て、皆で円堂の所へ集まる

「円堂君！」

「出来たんスね、とうとう!究極奥義、正義の鉄拳が!!」

「円堂!」

「やったな、円堂!」

皆で究極奥義の完成を喜んでいると、立向居が近くにいない事に気付く。振り返ると、立向居は円堂の所にかけて付けず、何か考えている様子だった

「何だろう、この感じ…?」

立向居は少し迷ったような表情を見せていた。その時だった。突如、空から何かが飛来してグラウンドに激突した

『!?!』

「(この光…まさか!?)」

突然の衝撃に驚きながらも、見た事のある青と白色の光に俺達は身構えながら襲来して来た何かを見極めようと目を凝らす。土煙が晴れると、そこには黒いサッカーボール。

【雷門イレブンの諸君。我々ダイヤモンドダスト、そしてギャラクシーは10日後に沖縄で待っている。来なければ、黒いボールを無作為に沖縄に撃ち込む】

「何だって!?!」

「無作為にだど!?!」

ガゼルの告げた実質的な脅しに、円堂と鬼道が驚きの声を漏らす。その後ろで、今の会話の意味が分かかっていないのか壁山が首を傾げていた

「無作為って？」

「出鱈目について事ですよ！もしそんな事されたら、沖縄が滅茶苦茶に!!」

「ええ〜っ!?!大変っス!!」

目金の説明を受けて状況を理解した壁山が驚くと同時に、黒いサッカーボールが突然崩れて灰となつて散つてしまう。

「ダイヤモンドダスト、ギャラクシーか。この2チームが同時に試合するととなるとメンバーが足りないぞ」

「ああ。聞いた話では杉森達もメンバーが揃つてなく今のままだと足を引つ張つてしまふとのことで来ないらしい。」

杉森達は来れないか……。さて、綱海は協力してくれるとのことだし、土方も沖縄に来るつてことなら手伝つてくれるはずだ。

と、なると後足りないのは6名程か。

「円堂、メンバーの補充は俺に任せてくれないか？心当たりがあるんだ」

「わかった！高梨に任せるぜ！」

よし、これでメンバー集めが出来るな。メンバーを集めるのには響木監督の協力が必要だな。

早速俺は響木監督に連絡を取りメンバーを集めを頼んだ。頼んだメンバーは………秘密だ。

さて、俺も連絡をするか。とりあえず不動だな。司令塔はもう一人必要になる。そして後一人戦力として欲しいのは……神様だな。

第35話 新メンバー加入!

メンバー集めは順調に行われていた。不動にも連絡が付き響木監督達と一緒に来るといいだ。

もう一人の方もなんとか連絡が付き向こうからは是非手伝わせてくれとのことでもらった。

明日には全員合流が出来るとのことだった。

そして、次の日

「待たせたな、円堂。」

「えっ! 響木監督?! どうしてここに?」

「ああ。高梨にメンバーの補充を頼まれてなここまで連れてきたんだ。お前達出てきていいぞ」

響木監督に呼ばれ出できたの

半田、マックス、佐久間、源田、不動、アフロデイの6名だった

「半田! それにマックスも!」

「もう怪我はいいんスカ!？」

「ああ。俺とマックスは一番に怪我が完治し来れることになったんだ。」

「そういうことだからまたよろしくねキャプテン」

「ああ!」

円堂率いる雷門イレブンは半田、マックスの復帰に喜んでいた。

鬼道は佐久間、源田の合流に喜んでいた。

禁断の技を1回しか使ってなかったのが項をそうしたため早々に復帰が出来たとのこと。

そして、皆の視線は不動、そしてアフロディへ

「何をしに来た不動!」

「何をつて俺も呼ばれたから来てやったんだよ」

「呼ばれた? 誰にだ」

「不動を呼んだのは俺だよ、鬼道」

俺は鬼道にあのときの不動のことを鬼道に話した。最初は納得していない様子だったが佐久間が禁断の技を1回しか撃ってないことも含めて考えるところしぶしぶ納得していた

そして最後はやっぱり

「アフロデイ：：：」

「やあ久しぶりだね、円堂くん」

「：：：」

「僕も君達と戦うために来た：：：君達と共にエイリア学園を倒すために！」

君達がエイリア学園と戦っている姿を見て僕の中で沸き上がる闘志を抑えられなくなったんだ。僕を雷門の一員に加えてほしい」

「ちよつと待て！いきなり何言ってるんだ。訳わかんねーよ」

「あのゼウス中の選手が仲間になるなんて：：：」

「疑うのも無理はない。でも信じてほしい。僕は神のアクアに頼るなんて愚かなことは二度としない。僕は君達に負け学んだんだ。再び立ち上がることの大切さを、人は倒れる度に強くなれる」

「本気なんだな？」

「ああ」

「わかった。その目に嘘はない。」

「ありがとう円堂くん」

円堂はアフロデイの言葉を信じ仲間になることを承諾した。

佐久間、源田は反論するかと思われたが沖繩に来るまでに響木監督の元なんとか和解

はしたらしい

さて、これでは豪炎寺が戻ってくるのを待つだけだな。

「それじゃあチーム分けを発表するわ。まずダイヤモンドダストと戦うメンバーは

FWー浦部 染岡

MFー鬼道、一之瀬、風丸、半田、マックス

DFー土門、壁山、栗松

GKー円堂

以上よ

そして次にギャラクシーと戦うメンバーは

FWー佐久間、吹雪、高梨

MFーアフロディー、不動、立向居、

DFー津波、土方、財前、木暮

GKー源田

以上メンバーで戦ってもらいます。

ダイヤモンドダストチームには私が、ギャラクシーチームには響木さんが監督をするわ。

各チームしっかりと練習をすること、いいわね！」

『『『はい!!』』』』

こうしてエイリア学園が来るまでチームで練習をすることになったのだ

まずはチーム全体を高めるため総合練習から始まった。このメンバーだと上手いことと不動は司令塔として指示を出すことが出来るはずだ。

後はキーパーの源田にはフルパワーシールドよりも強力な必殺技を身につけてもらわないとな

なんとかビーストファンクを改良出来ないか考えていると響木監督が源田を呼び個別特訓をすることになった。

ここは元祖雷門イレブンの響木さんに任せるとしますか

「さて、不動。フォーメーションはどうする？」

「つつてもよ。即席のチームでフォーメーション組むのは難しいんだよ。それだったらあの瞳子監督って人の同じフォーメーションのがいいんじゃないか？」

「確かに変にフォーメーション組むより慣れたポジションでやった方がいいか。」

「ああ、そういうことだ」

俺達のフォーメーションは瞳子監督の指示通りのままに行くことにした。

そして俺達は再び特訓に戻り練習を再開した。

今回確実に試合に勝つためにもやつらのデータにない技を使う必要があるな。

この前のジェネシスもいくつか対応してきていたしマスターランクチームとなると
そう簡単にはゴールを奪えないしな

つということだ

「アフロデイ！俺と一緒に必殺技の練習をしないか？」

「ああ、いいだろう。僕をこの場所に招待してくれたのは君だしね。勿論力になるよ」

そう。俺が個人的に呼んだのは不動ともう一人アフロデイなのだ。アフロデイのドリブル技、シュート技はどれも強力な技だ。マスターランクチームを倒すにはこいつの力は必要になってくるからな

俺とアフロデイは個別に新しい必殺技の練習を始めたのだ。

それからギャラクシーが来るまでの間は毎日チームでの特訓に励んだ。即席のチームなのだからチームプレーを意識し練習をしていた。

立向居に関しては体力も少なく必殺技もないため基礎練習と必殺技の特訓もしてもらった。

覚えられるかは立向居次第だな。

そして10日後、いよいよギャラクシーとの試合の日がやってきた

「さあそろそろ時間だ。お前達準備はいいか？」

『『『はい!!』』』』

その時辺りが暗くなり黒いサッカーボールが落ちてきた。

青白い光を放ち、光がなくなるとギャラクシーのメンバーが立っていた

「さて、いよいよ試合の時だ。覚悟はいいかい？」

「ああ、勝負だ！ギャラクシー！」

ギャラクシーとの戦いが今始まろうとしていた

第36話 VSギャラクシー1

俺達が待っているグラウンドにはギャラクシーが現れた。白のユニフォームに銀色の逆立った髪が目印なカイトを中心としたメンバーが立っていた。

どいつも見たことのない顔をしたメンバー。

完全に原作では出てこないオリジナルのチームだった。

「円堂守はいないのか。まあいい。ジェミニストーム、イプシロンに勝った貴様らのお前達の実力を見せてみる」

「ああ、絶対に勝つ！」

「君たちには負けないよ」

試合開始前俺達はベンチの前に集まっていた。

響木監督曰くやつらの力は未知数であるため最初から攻めて行けとのことだった。

ここ数日で俺達は確実にパワーアップはしている。後はどこまであいつらに通用するかだね

俺はキャプテンマークを右腕につけ円陣を組んだ

「いよいよギャラクシーとの勝負だ。あいつらの実力は未知数だが俺達のサッカーをすればきつと勝てるはずだ。この試合…勝つぞ!!」

『『『おお!!』』』』

F W 佐久間 士郎 高梨

M F アフロデイ 不動 立向居

D F 津波 土方 財前 木暮

G K 源田

今回のフォーメーションは3ー4ー4のフォーメーションを組んでいる。G Kは源田が行うため立向居にはM Fに入ってもらった。

F W カイト キーン

M F アレク キラー ヒソカ コンドル

D F ネテオ キース ダズ カイン

G K ネオ

相手チームは2ー4ー4の防御よりのフォーメーションだった。

『さあーいよいよ始まりです。雷門セカンドチーム対マスターランクチームギャラク

シーとの試合が今始まります。実況は私角間王将がお送り致します!」

何で角間さんがここにいるんだ? まあ気にしてもしょうがないか

『さあー雷門イレブンからのキックオフで試合開始です』

俺は佐久間にボールを渡し試合が始まった。佐久間はすぐに不動にボールを渡し前線へと上がっていった

「さあお手並み拝見だ」

チームギラクシーはボールを取りに来ることなくその場を動かなかった。

「つち舐めやがって!」

不動は苛つきながらもドリブルをして上がっていく

「決めろ! 吹雪!」

不動は前線にいる吹雪へとパスをした。

「うん、行くよ! 吹き荒れる。エターナルブリザード!」

士郎の渾身のシュートがキーパーのネオを襲う。

「ふっ」

ネオは何と必殺技を使うことなく両手だけでエターナルブリザードを止めてしまったのだ。

何てやつだ…。あいつはデザーム以上のキーパーだぞ…。これはそう簡単にはゴー

ルを奪えそうにないな

「どんまいだ士郎！」

「う、うん！」

ボールはネオからキースへとボールが渡った。

キースはニヤツと笑うとボールを一気に前線にいるカインへとボールが渡った。

「な、なんてキック力だ！」

「あれがDFとはね」

佐久間とアフロデイも流石のキック力に驚いていた。

カインを止めるべくDF陣が迎え撃つ

「ここは行かせねーぜ！」

まず始めに綱海が行くがドリブルで簡単に交わされそのまま財前さんも交わされてしまったのだ

「俺に任せとけ！スーパーしこふみ！」

土方は必殺技を放つがカイトのスピードに交わされてしまうのだ

「行くよ！オラ！オラオラオラオラオラオラオラオラオラ！ザ・エクスプロージョン！」

カイトの強力な必殺技が雷門ゴールへと迫ってくる

「旋風陣……うわあああ！」

木暮が止めようとするがすぐに吹っ飛ばされてしまったのだ

「止める！フルパワーシールド!!ぐわあああ！」

フルパワーシールドで止めようとするも威力を抑えきることが出来ずゴールを許してしまった

雷門0ー1ギヤラクシー

『ゴーール！ギヤラクシーが先制だ！強力なシュートにフルパワーシールドが破られたあ』

「何て強力なシュートなんだ…」

「フルパワーシールドがあんな簡単に破られるなんて」

「ああ。流石マスターランクチームだ。一筋縄では行かないな」

雷門ボールで試合が再開する。

相手にボールを渡さないよう細かくパスを行い

少しずつ前線へと上がっていく。

ギヤラクシーの面々もボールを奪いにきたのだ

「そのボール貰う… エアーバレット…」

空気を圧縮しボール見たいにしその空気を相手にぶつけボールをヒソカが奪った。

ヒソカはすぐにボールをカイトへとパスを出した。

「DF！ゴール前を堅めるんだ！」

俺はカイトからボールを奪うのではなくシュートの威力を落とすためゴール前を堅めるよう指示を出した。

あいつからボールを奪えないなら源田が止められるよう少しでも威力を落とすことに専念した

「ふっ…無駄だよ。そう簡単には止められないさ！」

ゴール前でカイトを迎い撃とうしたがカインは逆サイドにいたキーンへとパスを出したのだ。

「貰った！バイシクルホーン！」

意表をつかれた源田はボールに飛び付いて止めようとするも間に合わず再びゴールを許してしまったのだ

雷門0ー2ギヤラクシー

『ゴーール！ギヤラクシー追加点だ！雷門突き放されたー！』

「くそっ！」

源田は地面を叩きつけ悔しがる。

このままじゃヤバイな…… 完璧にあいつらのペースにのまれてしまっているな。

何とかこっちに流れを持ってこなければ……

そのためにはネオからゴールを奪うしかない!

俺は佐久間にボールを渡し士郎と共に前線へと上がった。

ボールは佐久間からアフロデイへと渡る

「行くよ…ヘブンズタイム」

アフロデイは指を鳴らし時間を止めた。止まっている間にアレクとコンドルを抜くそして再び指を鳴らすと解除され、小さな竜巻がアレクとコンドルを吹き飛ばした。アフロデイはヘブンズタイムを使いギラクシーを次々と抜き去った。

そしてゴール前まで辿り着きネオとの1対1の勝負になったのだ

「行くよ!ハア!ゴッドノウズ・インパクト!!」

「止める!リバースワールド」

ネオは右手を前につき出すと空間を止めボールを跳ね返そうとするが進化したアフロデイの必殺技を止めることが出来ずゴールを許した

雷門1ー2ギラクシー

『ゴール!ゴールを奪ったのはゼウス中のアフロデイだ!』

「ナイスシュートだアフロデイ!」

「なんてやつなんだ。神のアクアなしで更にあの技を進化させるなんて…」

まさかアフロデイがここまで強くなっていたなんて。

だが、これで流れはこつちに傾くはずだ

「ふうーん。少しはやるみたいだね。でもそれもここまでだ！」

ギヤラクシーからのボールでスタートした。キーンがカイトにボールを渡すとカイトは一気にゴールへと向かった

「行かせねーぜ！」

再び綱海がボールを取ろうとするが

「遅いよー！」

カイトはトップスピードで綱海を交わした

「ザ・タワーー!!」

「スーパードリブル！」

財前さんと土方が必殺技で止めようとしたが

「ジグザグストライク!!」

カイトの光速のジグザグのドリブルを止めることが出来ず財前さん、土方までもが抜かれてしまった

「これで止めたよ。ハア！オラ！オラオラオラオラオラオラ！ザ・エクスプロージョン！」

再びカイトの必殺技がゴールへと迫る

「源田!」

「止めてくれ!」

「任せろ!もうゴールはやらせはしない!」

源田が心臓へと右手をかざすとドクンっ!と鼓動が響く。

その目には野獣のような獐猛さが宿り、背後に現れた暗い緑色をした狼のようなオーラが吠えた。

「ハイビーストファング……!!」

シュートに向かって飛びかかる源田はその両手をまるで野獣の牙のようにボールへと叩きつける。

ボールの威力を少しづつ抑えているが源田もボールの威力に押されてしまうがなんとな防ぎきることが出来たのだ!

「な、なんだと!」

止められたことにカイトは驚いていた。まさか止められるとは思っていなかったんだらうな。

ここで前半が終了した

第37話 VSギヤラクシー2

前半が終了した。得点はアフロデイのおかげで1点を返すことが出来たが1-2でまだギヤラクシーが勝ってる。

やつらはまだ必殺技を使ってきているやつは少ないためまだ油断することは出来ない状況である。

カイトのあのシュートは源田がなんとか止めてくれてはいるが何発も撃たれたら源田もいつまでも耐えられないからな。

「みんな、後半の作戦を伝える。後半DF陣はボールを取りに行かなくていい。ゴール前に固まり少しでもシュートの威力を削ってほしい。少しでも削れば源田が止めてくれるからな」

「おっしや！任せとけ！」

「ゴールはもう割らせない！」

「そして次にFW陣だ。後半やつらはきつとアフロデイにマークを厳しくしてくるはずだ。だから後半はアフロデイを囷に使い俺らでゴールを奪うぞ」

「神を囷に使うとは…いいだろう。」

「うん、任せてよ」

主な作戦はこんな感じだ。簡単だがシンプルで動きやすい。きつとギヤラクシーのやつらは後半何とか追加点を取りに来るはずだ。

気を付けておかないとな

「高梨、ちよつといいか？」

「ん、佐久間？」

『さあーまもなく後半戦が始まります。雷門は逆転することは出来るのでしようか！今ギヤラクシーのボールでキックオフです！』

「我々マスタートランクチームが負けるなどあっていいはずがない！」

キックオフの笛と共にカイト、キーンがドリブルで仕掛けてきた。すぐさま俺、士郎で対応しようとするがボールを持ったカイトにあっさりと抜かれてしまった。

「行かせるか！キラーズライド！」

「ふん、遅い！」

不動がキラーズライドでボールを奪おうとするがカインはジャンプでそれを交わし

そのままキーンへとパスをした。

パスをしたのと同時にカインは一気にゴール前まで上がったのだ。

「通させません！」

立向居がキーンの前に立ちはだかるが経験不足ということもありあっさり股抜きで交わされた。

立向居を交わしたキーンはそのまま必殺技を放つ

「バイシクルホーン!!」

「DF! シュートブロック…… いや、これは!？」

ゴールへと一直線に進んでいたボールは途中で曲がりカイトの元へ

「もう遅いぜ! おら! おら! おら! おら! おら! おら! ザ・エクスプロージョン!」

まさかシュートチェインをしてくるとは…… 頼むぜ源田!

「ザ・タワーーーーー!!」

「スーパーーーーこふみ!」

「旋風陣!」

DF陣がそれぞれ必殺技でシュートブロックを試みるがただでさえ強力な必殺技にキーンのパイシクルホーンの威力が加わっているため

「「「うわあーーーーー!」」」

あっさりとは破られてしまったのだ

「くっ…… 任せろ！」

源田が心臓へと右手をかざすとドクンっ！と鼓動が響く。

その目には野獣のような獯猛さが宿り、背後に現れた暗い緑色をした狼のようなオーラが吠えた。

「ハイビーストファング……!!」

シュートに向かって飛びかかる源田はその両手をまるで野獣の牙のようにボールへと叩きつける。

「な、なんて威力なんだ……ぐわああああ!!」

源田の新必殺技であるハイビーストファングが破られギャラクシーに追加点を取られてしまう

雷門1ー3ギャラクシー

『ゴール！ギャラクシーが雷門イレブンを突き放したー。雷門イレブンは追い付けるのかあー!!』

シュートチェインとはやられた……DF陣、それに源田も疲労が溜まっていつてしまふ。ここは俺達でどうにかしないと……やるしかない

『さあー雷門ボールで試合再開だー!』

俺は佐久間にボールを渡すと、佐久間は直ぐに不動へとボールを託した

「みんな行くぞ！何としても1点を取るんだ！」

「「ああ!!」」

不動はドリブルで上がるがすぐさまヒソカがボールを奪いにくる

「そのボール… もらうよ… エアーバレット…」

ヒソカが空気の塊をぶつけようとするが

「そう簡単には渡さねーよ！行け、アフロデイ！」

「神に命令か… いい度胸だ」

空気の塊をぶつけられる直前にアフロデイへとパスをすることによりボールはまだ雷門ボールのままである

すぐに今度はアレク、コンドルがアフロデイの前に立ちはだかるがアフロデイの必殺技で上手く交わすことが出来た。そのままアフロデイはドリブルで上がるが前半の得点もありマークが厳しくつく。

何とかパスコースを探すが3人がかりのDFに中々パスを出すことが出来ずにいた。

「くっ…」

「アフロデイくん！」

その様子をみた土郎は自らアフロデイの元へと行きアフロデイのヘルプをしそのま

ま士郎がボールを持ち運んだのだ。

そしてゴール前には俺と佐久間がいた。俺は目配せで士郎へと合図を送る。

「頼んだよ、蓮！」

「それは読んでたぜ！」

ダズがパスコースを読んでいたのかボールをカットしようとするがボールはカーブしそのまま佐久間の元へとボールが渡った

「行くぞー！これが俺の新必殺技だ！ピイイ！」

佐久間は指笛をしペンギンを呼び出す。赤黒いペンギンで一瞬皇帝ペンギン1号かと思っただがペンギンの色が違うためそのまま佐久間を信じることにした

赤黒いペンギン5体は空を舞うとそのまま佐久間の右足へと噛みついた。

そして佐久間はその状態でボールを空中へと上げオーバーヘッドをした

「皇帝ペンギン……0！」

「決めさせない！リバースワールド！」

キーパーのネロは時空を止め、止めようとするが威力を抑えきることができず破られ佐久間のシュートはゴールネットを揺らしたのだ

雷門2ー3ギャラクシー

『ゴールー！雷門1点を返した！佐久間の新必殺技が炸裂！』

第38話 VSギャラクシー3

「まさか我々が2回も得点を許してしまうとは……面白い……面白いぞ雷門イレブン！
これがデザームの言っていたことか！」

カイトは先程までと違い笑っていた。楽しそうにしているのだ。デザームが言っていたこと……か。今のあいつは心からサッカーを楽しんでいるんだな。

だが、俺達は負けるわけには行かない！何としても後2点もらおうぞ！
俺はちらつとあるやつに目配せで合図をした。

やるぞ！という合図を送ったのだ。

「行くぜ、お前たち！」

『『『はい、カイト様！』』』』

「絶対勝つぞ！」

『『『ああ！』』』』

ギャラクシーチームからのボールで試合が再開される。カイトからキーンへそしてボールはネテオへ

「行くよ、キース、ダズ、カイン！」

『『あぁ！』』

「必殺タクティクス！タクティクスサイクル！」

4人で陣形を変えつつ前線へ突破する。

止めに幾度にもその選手を行動不能になった。

ネテオ、キース、ダズ、カインはそのまま4人でドリブルをしながら前線へと上がって行こうとしていた

「やらせねーよ！」

そこへ何と綱海がボールを奪いに来ていた。ゴール前にいると思われていた綱海がここまで来ているとは思わず反応が遅れてしまい綱海はキースかボールを奪って見せた

「頼んだぜ、不動！」

「へっ少しはやるじゃねーか！」

綱海からパスをもらった不動は相手ゴール陣内へと斬り込んでいた。

相手の動きを見た不動は数秒すると俺にパスを渡してきた。

俺は前を向くことから空きになっていた。決定的なシュートチャンスなのだ

「行くよ、アフロデイ！」

「あぁ！修行の成果ってやつだね！」

俺は黒いエネルギーを集めボールを上蹴った。アフロデイは黄色い翼を生やし上空へと飛び、俺は周りに6体の黒いペンギンを出現させてから上空へと飛んだ。

アフロデイは左足で、俺は左足のオーバーヘッドでボールを蹴る

「ペンギン・ザ・ゴッド&mp;デビル!!」

黒いペンギンと金色のペンギンがゴールへと向かう。

「リバース…うわぁー!!」

ネオが必殺技を発動する前にボールはゴールへと吸い込まれていった。

雷門3ー3ギャラクシー

『ゴールー! 雷門追い付いた! 決めたのは高梨とアフロデイだ。これで3対3の同点。さぁー勝利の女神が微笑むのはどちらでしょうか!』

なんとか同点に追い付くことが出来た。これも綱海のおかげだな。そして不動の視野の広さにも助けられたな。これで後1点…なんとしても1点をもぎ取る!

そこからは両者とも攻防戦が続いた。ボールを奪っては奪われシユートを撃つが止められとお互いに決め手にかけていた。

刻々と時間だけが過ぎていきあつという間に試合終了のホイッスルが鳴ったのだ

『試合終了! 3ー3の引き分けだあ!』

引き分け……か。勝つことは出来なかったがマスターランクチーム相手に同点は上々だ。

「……」

「……」

「カイト様……」

「我々エイリア学園にとつて引き分けは敗北と同じ。だけど俺は満足だ。久しぶりに楽しいサッカーが出来た。」

「カイト様……はい！」

カイト含むギャラクシーイレブンが俺たちの前まで来た。全員の顔を見ると試合前と比べてどこか明るい顔をしていたのだ

「ありがとう雷門イレブン。久しぶりに楽しいサッカーが出来たよ」

「ああ、俺達も楽しかったぜ！次やるときは負けないからな！」

「!?!?!?!?! ああ、次こそは僕たちが勝つて見せるさ」

俺とカイトは握手をした。

その後すぐにカイト達は黒いサッカーボールを取りだし何処かへと消えていった。まいった

さて、
円堂達はどくなってるのかな？

第39話 VSダイヤモンドダスト1

『お待たせしました！エイリア学園マスターランクチームダイヤモンドダストと、雷門中の試合が今正に始まるうとしています！』

F W 浦部 染岡

M F 鬼道 一之瀬 風丸 半田 マックス

D F 土門 壁山 栗松

G K 円堂

ベンチ：目金

浦部がボールを染岡に渡して、キックオフ。早速点を取ろうと染岡が攻め上がろうとして…ガゼル、バレン、アイキユ、クララの4人が左右に移動する。そして染岡からGKのベルガまでフィールドががら空き状態となる

「何だ!？」

「っ……!」

まるで染岡にシュートを撃たせる為にがら空にしたかのようなダイヤモンドダス

トの行動に、こちらを舐めていると判断し顔を締めた染岡がその場でシュートを撃つ。弾丸の如きシュートが右から左へと軌道を変えて、ゴールの左上端に向かって飛んでいく

「決まったでー！」

シュートの威力とベルガとの距離から先制点を取ったと確信したと浦部が呟いた、その時だった。ベルガが一足跳びでゴールの左端まで移動して右手で豪炎寺のシュートを受け止め、着地と同時に右手を大きく後ろに引く

「ふんっ！」

「ぐっ…!？」

そして、ベルガは右手で掴んでいたボールを円堂目掛けて投げた。投げられたボールは一直線に円堂の所へ向かい、円堂がこれを両手で受け止める。受け止めた円堂は、ボールから伝わる威力を感じ取り、ベルガの強肩に驚いていた

「ゴールからゴールに投げってくるなんて…それにこの威力…なんて奴だ。よしっ!…なっ!？」

今度はこちらの番だと円堂がボールを投げようとして、フィールドを見てまたも驚く。なんといつの間にかガゼル達ダイヤモンドダストのメンバーが、雷門陣地に入り込んでいた。ベルガがボールを投げている間に侵入して来たのだと分かると同時に、その

スピードに驚愕する雷門

「っ、土門！」

「一之瀬！」

円堂がボールを土門に投げ渡し、土門から一之瀬へとパスが送られる。だが、土門のパスは一之瀬が受け取る前に割って入ったきたりオーネにカットされてしまう

「何?！」

すぐに取り返そうとする一之瀬だが、リオーネのテクニクで一之瀬にボールを触れさせず、宙返りによるパスでガゼルへとボールを飛ばす

「ふっー！」

「ぐう……っ!!」

跳び上がったボールを受け取ったガゼルがシュートを撃つ。真正面からだったのもあり、何とか両手でシュートを受け止める円堂だったが、ゴールラインギリギリまで押し込まれていた

「ビリビリ来るぜ……！」

「ふんっ……」

汗を流しながらも、ボールから伝わる威力に口元を上げる円堂。そんな円堂を見て、ガゼルもまた微かに口元を上げた。そんな2人を、観客席から眺めている者達がい

「…つまらん試合だ」

「どうかな？見ててよ、円堂の熱さが分かるから」

眺めていたのは、バーンとグランであった。ガゼルの相手を試すような行動を見て不満そうに呟くバーンに対し、グランは軽い笑みを浮かべて試合を：正確には円堂を見つめる

ボールを受け取り攻め上がった栗松からブロウがボールを奪い、そのブロウから鬼道がボールを奪い返すも、即座に接近して来たガゼルにボールを奪われてしまう。ダイヤモンドダストのスピードを活かした素早いプレスが攻撃に転じようとする雷門を封じ、圧倒していく

「なんて動きなの！」

「大丈夫でしょうか…」

「皆、頑張つて！」

マネージャー達が心配する中、再度放たれたガゼルのシュートを円堂がゴールに押し込まれそうになりながらも受け止め、投げたボールを受け取った木暮が一之瀬にパス。そこから一之瀬が、前線へ向かって上がっていく

「リカー！」

「よっしゃー！」

一之瀬から浦部にパスが通り、そのまま一気にゴール前までいこうとする。だが、浦部がボールを受け取ろうとしていた時にクララが前に出て来ており、既に浦部との距離を縮めていた

「フローズンスティール！」

「きゃああつ!!」

近距離では避ける間も無く、浦部がクララのディフェンス技の餌食となる。フィールドを凍らせながらのクララのスライディングを受けた左足が凍り、浦部が転倒。何とか受身をとって負傷は免れるも、冷気でダメージを負ったのか立ち上がろうとする浦部の左足は震えていた

「くっ……! (左足に力が入らへん……!)」

「それが凍てつく闇の冷たささ!!」

立ち上がれない浦部にガゼルが告げている間に、ボールを奪ったクララが一之瀬のチャージをかわしてフロストへのパスが繰り出される。これを土門が跳び上がってカットし、ボールを半田へ送る。ボールを受け取った半田が、染岡に声を送ると共にボールを前線まで蹴り飛ばした

「染岡!」

「任せろ! ワイバークラッシュユ!!」

半田が蹴り上げたボールを受け取り、即座に染岡がシュートを放つ。そのままシュートはベルガ目掛けてまっすぐ飛んでいく。

「ふんっ…アイスブロック!」

キーパーのベルガは右手に冷気を溜め飛んできたボールに冷気を込めて殴ることによりワイバーンクラッシュが氷らされてしまった。

「バレン!」

「ドロル!」

「ブロウ!」

ベルガの投げたボールを受け取ったゴツカからバレンにボールが送られ、素早く正確なパス回しでダイヤモンドダストが左サイドから雷門のデイフェンスを翻弄。ボールを持つ相手に追いつけない雷門の守りを突破し、ゴール前まで攻め込まれてしまう

「フリーズショット!」

攻め上がったブロウは左足でボールを踏みつけるとフィールドが氷、そのままシュートを放つとボールに冷気を纏い更に氷のフィールドになったことによりスピードが増しゴールに迫る

「正義の鉄拳!!だあああっ!!」

「鬼道!」

冷気を纏ったシュートに、円堂が究極奥義で対抗。ボールと拳が激突した瞬間に力を込めて右拳を一気に前に突き出し、ボールに纏っていた冷気を粉碎して大きく弾き返す。弾かれたボールを壁山が拾い、鬼道へパス。そこから鬼道は染岡へボールを送ろうとするが、バレンとアイキユウのマークが付いていてパス出来ない

「(ならば……!) 浦部!」

「っ、任せとき!」

鬼道からボールを受け取った浦部が、バレンが染岡のマークに付いた事で空いた中央からゴール前まで上がっていく。そして接近して来たクララがデイフェンス技を使う前に、後ろから上がって来た塔子と共にシュートを撃とうとする。その際に大きく跳ぼうとして、左足に力を込めた浦部が一瞬だが辛そうな表情を浮かべた

「(ぐっ……!) いくで、ローズスプラッシュユ!!」

「アイスブロック!」

赤い薔薇を纏ったシュートを放つ。それに対してベルガは冷気を集めて凍らせた右拳で、シュートに殴り掛かる。ベルガの右拳と正面から激突。すると、シュートが四角い氷に覆われて止まめられてしまい、キャッチされた

「(こんな物か?)」

「くっ……!」

「今のシュート…」（浦部さん、もしかしてさっきのプレーで足を…）
「…」

嗤うベルガに対し、悔しそうに顔を歪める浦部。そんな浦部を怪訝な表情で見ていた半田だったが、ダイヤモンドダストの攻撃に備えるべく下がっていく。その際に浦部が辛そうな表情で左足に視線を向けたのを、ベンチの瞳子監督は見た

ベルガがボールを投げ、再びダイヤモンドダストが攻撃を仕掛ける。雷門はボールを奪おうとデیفエンスを固めるもスピードで攪乱されてしまい、鬼道のスライディングをかわしたドリルからガゼルにボールが渡ってしまう

「止めるっスーザ・ウオール!!」

「ウオーターボール!」

『うわあああつ?!』

ガゼルのシュートを阻止しようと、壁山がデیفエンス技を発動する。しかしガゼルは回転しながら高くジャンプし、着地と同時にボールを踏み付ける事で噴水のように噴き出した水流の壁を地面を介して前方に向かって放ち、壁山のデیفエンス技にぶつけて打ち破る。2人を水流の壁で吹っ飛ばしたガゼルがゴール前まで駆け抜け、円堂と1対1となる

「ふっ、凍てつくがいい！ノーザンインパクト!!」

ガゼルが腕組みしてゴールを睨みつけた瞬間、ガゼルの周りに冷気が放出されて空にオーロラが発生。そして冷気で凍らせたボールに接近し、ローリングソバットでボールを蹴り飛ばす

「正義の鉄拳!!」

円堂の正義の鉄拳が、ガゼルの必殺シュートと激突する。激しくぶつかり合う中、次第に正義の鉄拳が押されていく

「ぐうっ…んぐぐっ!!」

押され始めた円堂が更に右拳に力を込めて右拳を前に突き出す。しかしそれでも正義の鉄拳は押され続け、暫くしてシュートの威力に打ち負けてしまい、ゴールにシュートが決まる

雷門オーダイヤモンドダスト

『ゴール!決められてしまったー!!正義の鉄拳が打ち砕かれたー!!!』

『円堂 (キャプテン) !!』

「くっ…!」

「この程度とは…がっかりだね」

「何故だ、じいちゃん。何故なんだ…正義の鉄拳は、最強のキーパー技じゃなかったのか？パッと開かずグツと握って、ダン、ギューン、ドカーン。出し方はあれでいいはずなんだ。なのに、何故…あれじゃ完成じゃないっていうのか？何だ、一体何が足りないんだ…」

そこからダイヤモンドダストの猛攻が続いた

「ノーザンインパクト！」

「やらせないでヤンス！スピニングカット!!」

「俺達で止めてやる！ボルケイノカット!!」

ガゼルのノーザンインパクトが放たれ、シュートを阻止しようとした。それを栗松と土門がシュートブロックで止めようとするが、は2人のブロックを物ともせず突き破ってゴールに迫る

「今度こそ…くううっ…!!正義の鉄拳!!」

正義の鉄拳を放ち、今度こそグングニルを弾き返そうとする円堂。再び正義の鉄拳とグングニルが激突しぶつかり合うが先程同様に円堂の身体が押されていき、ノーザンインパクトに打ち負けてしまう

「うっ…どあああっ!!?」

「入れさせないッス！」

円堂の身体が吹っ飛ばされ、シュートが決まる…かと思われたその時だった。壁山がシュートの前に飛び出て、腹でシュートを受ける。それでもシュートの勢いは完全に落ちず、壁山ごとゴールに入りそうになる

「負けないッス!!うおおおおおっ!!」

だが、壁山は身体を広げてゴールポストとクロスバーで身体を支え、シュートを受け止め続ける。次第にシュートの勢いは弱まっていき、勢いを失くしてボール地面に落ちると同時に、壁山も地面に力無く落ちてしまう。壁山が止めたボールを地に伏した状態のまま両手で掴んだ円堂が、壁山に呼び掛ける

「壁山、大丈夫か!」

「これくらいどうって事、ないッス…っ…!!皆で守って、勝つッスよキャプテン!!」

「壁山…ああ!」

痛みで一瞬だけ辛そうな表情を見せるも気丈に振る舞う壁山に、円堂が頷きで応える。そんな2人を、ガゼルは口元を上げて眺めていた

「ノーザンインパクトを止めるとは…これは面白くなりそうだな」

「ここで前半が終了した」

第40話 VSダイヤモンドダスト2

「正義の鉄拳が破られた…俺に一体何が足りないっていうんだ…俺はどうすれば…？」

「おい、円堂そろそろ後半が始まるぞ」

「あ、ああ…」

考える円堂に、風丸が声を掛ける。それに返事をして、ノートをベンチに戻しにいうとする円堂だったが、その前に風丸が尋ねた

「円堂、気になったことがあるんだがいいか？」

「…ああ、何だ？」

円堂の了承を貰い、風丸は自身を感じていた違和感について話し出す

「正義の鉄拳は凄い技だな。流星は円堂のおじいさんが考えたことだけはあ。だが違和感があったんだ」

「違和感？」

「初めてゴッドハンドやマジン・ザ・ハンドを見た時、あまりの凄さに雷みたいなの衝撃が身体を走ったんだ。でも、正義の鉄拳にはそんな衝撃みたいな物を感じなかったんだ。

まだ成長してない子どもみたいな感じに……」

「子ども……？」

「あつ……いや悪いな。感覚的な事しか言えなくて」

「いや、ありがとう風丸。後半、頑張ろうぜ！絶対勝とうな!!」

「ああー！」

風丸に感謝を述べ、気合を入れなおす円堂。

その頃、染岡、一ノ瀬は鬼道の元へと行き作戦を考えていた。

「鬼道、後半はどうする？やつらのスピードはジェミニストームよりも上だぞ」

「ああ、わかっている。それにキーパーのベルガも相当なキーパー力だ。

だが、後半はこちらから攻めるぞ」

「何か策があるって顔だな鬼道」

「フツ…… ああ、任せておけ」

「さて、半田。そろそろ僕たちも特訓の成果を見せないとね」

「ああ。ここに来れなかった少林たちの分も俺達が頑張らないとなー！」

「ああー！」

その後ハーフタイムが終了し、両チーム共にポジションに着いた。

「見せてやろう。絶対零度の……闇を！」

後半戦が開始し、ガゼルの指示と共にダイヤモンドダストが一齐に雷門に襲い掛かる。これに前半戦を経てダイヤモンドダストの動きに慣れ出した雷門がくらくらいつく

「やらせるか！スピニングフェンス！」

「何っ!?!」

ブロウのドリブルを止めた風丸はすぐに鬼道へとパスをした

「みんな行くぞ！反撃だ！」

鬼道はドリブルで上がる。前半戦でダイヤモンドダストのスピードに慣れた雷門は少しづつパスが繋がるようになってきていた。

ボールは鬼道から一ノ瀬、そして風丸へ

「行かせない……フローズンステイル！」

「その技は何度も見た！ハアツ！行け鬼道！」

ドリブルを阻止しようとクララが必殺技をしてくるが風丸はジャンプで交わし再びボールは鬼道へ

「行くぞ、一ノ瀬！フンツ！」

「ハア！」

「ツイインブースト!!」

「こんな技……ッ!？」

ベルガは必殺技を使わず両手で止めようとする。と直前でボールはカーブし軌道が逸れた。そしてその先にいたのは……

「貰った!ドラゴーンクラッシュ!!」

染岡がいた。染岡はあえてワイバーンクラッシュではなく発動時間の早いドラゴンクラッシュを使うことによりベルガに反応されないようゴールを決めたのだ

雷門リーダイヤモンドダスト

『ゴォール!雷門追い付いたー!ゴールを決めたのは染岡だああ!』

「よおおおし!」

「やったな!染岡!」

「ああ、これも鬼道のおかげだぜ!」

「我々が得点を許すなど……こんなことあつてはならない!」

ダイヤモンドダストのキックオフで試合が再スタートする。

すぐさまガゼルがドリブルで上がったいく

「行かせねーよ!ボルケイノカット!」

「ふっ……この程度の技!」

何とガゼルはボルケイノカットの上をジャンプで交わしたのだそのままゴール前ま

で到達したガゼルが、円堂目掛けてシュートを放つ

「ノーザンインパクト!!」

「今度こそっ！正義の鉄拳!!」

前半同様、正義の鉄拳がガゼルの必殺シュートと激突。激しくぶつかり合うが、正義の鉄拳が次第に押されていく。今度こそ弾き返そうと円堂が右拳に力を込める

「っ、ぐううっ!!」

だがそれでも力の差があるのか、正義の鉄拳はノーザンインパクトに打ち負けてしま
う

「うわあっ?!」

シュートの威力で吹っ飛ばされた円堂の横を、ガゼルのシュートが通過。そのまま
ゴールネットにボールが直撃した

雷門1ー2ダイヤモンドダスト

『ガゼルの必殺シュートが、またも円堂の正義の鉄拳を粉碎したー!!後半開始早々、ダイ
ヤモンドダストが勝ち越しました!!』

「勝つのは、我々ダイヤモンドダストだ!」

「っ……!」

円堂の正義の鉄拳が、2度も続いて破られた。その事実雷門ベンチは苦い表情を浮

かべる

「正義の鉄拳が、2度も破られた…」

「大丈夫よ」

一方その頃…

「っ…」

「はいっ…はいっ、いつでも大丈夫です」

観客席ではフードの男が震える程に強く拳を握って試合を眺めていた。その様子を大海原中のキャンが見ていると、持っている携帯電話が震え出した。電話に出たキャンは、軽い確認を済ませるとフードの男に電話を渡す。電話で会話しながら、反対側の観客席に黒いコートを着た、サングラスを着けたスキンヘッドが特徴的な3人組の男達がいるのを目で確認し、話を終えて電話を切る

「よ、よし。行こう」

キャンとフードの男は観客席を離れて、何処かへと歩いていった

円堂に向けてガゼルがシュートを撃とうとしたのと、同じ頃。大海原中を離れた土方とフードの男は近くの森の中を歩いていた。その2人の後を、黒いコートを着てサングラスを着けたスキンヘッドが特徴的な3人組の男達が追っていた

「いいな、女は無視しろ。用があるのはフードの方だ」

3人組の男達が歩く速度を上げて接触しようとしたその時、突然キャンとフードの男が走り出して男達との距離を引き離す。男達は慌てて2人を追い掛け、曲がり道で1度姿を見失うもすぐにフードの男の後ろ姿を発見する。男達は軽く嗤ってフードの男に近付き、声を掛けた

「久しぶりだね。と言つても、君も私達が見張っていたのを知っていたのだろうから、そんな挨拶も必要ないかな？事情が変わつてねえ。君の意思には関わらず、我々に協力してもらおう事にしたよ。一緒に来てもらおう」

「…」

「っ!？」

3人組の男達の1人が、無言のまま動かないフードの男の肩を掴んだ。その瞬間何か違和感を感じてフードの男から離れる。先程追っていた目的の男と目の前の男で明らかに背丈が違う事に、今になって気付いたのだ

「誰だお前!？」

「現行犯だ。ふっ」

男の言葉に、フードの男だと思われた者が素顔を晒す。フードの男だと思われた者の正体は、鬼瓦刑事だった。更に、気付けば3人組の男達を包囲するように刑事達が姿を

現し、男達が追っていたキャンとフードの男は刑事達から少し離れた所で、スミス達SPフィクサーズによって守られていた

「諦めろ、逃げられやせん」

「くそっ……！妹がどうなってもいいのか?！」

「彼女は我々が安全な所に移した」

3人組の男達の1人がフードの男を脅すも、既に手を打っている事を鬼瓦が告げる。奇襲で無理矢理フードの男を誘拐しようにも、スミス達SPフィクサーズが邪魔で不可能だと判断した男達は、撤退を選択した

「作戦失敗という訳か……！先ず手を引く事にしよう」

「何?！」

その直後、3人組の男達の足元から紫色の光が放たれて、光の中に消えていく

「忘れるな！お前達は常に監視されているという事を!!」

捨て台詞をフードの男に向かって告げ、3人組の男達の姿が完全に消えてしまう。鬼瓦は取り逃がした事に悔しげに顔を歪めながら、刑事達に指示を出す

「くそっ……探せ！まだ近くにいますはずだ!!」

刑事達が一斉に森の中を搜索しに散っていく。それを見届け、鬼瓦さんとフードの男の所に近付き、話し掛けた

「ここまで、よく頑張ったな。これで公に奴らを追う事が出来る。後は任せろ！」

「行つてきて！みんな貴方を待つてるよ！」

「ああ！」

鬼瓦さんの言葉に頷き、フードの男は走り出した。友の待つ、フィールドへ向かつて
：

今度は雷門がダイヤモンドダスト陣営へと攻める。

「攻めるんだ！奴等にシユートチャンスを与えるな！」

『おおっ!!』

一ノ瀬がドリブルで攻め上がる。そこにゴツカが一ノ瀬に近付こうとするのを見た鬼道は道を塞いだ。そしてボールは染岡へと繋がりにシユートチャンスが訪れた。

「俺たちは負けるわけには行かないんだ！ハアアア！ワイバーンクラッシュV2!!」

「アイスブロック!!」

ベルガが冷気を込めたパンチで迎撃し、右拳とボールがぶつかる。

だが進化したワイバーンクラッシュを止めることが出来ずベルガの右拳は弾かれた。だがボールはポストにあたりゴールを外してしまったのだ

「くつつつそおお!!」

瞳子監督待つていた。何かが起きるのをずっと待つていたのだ。

コーナーキックをしたがベルガのパンチングで弾かれダイヤモンドダストのカウンター攻撃。

すぐさまボールはゴツカ、クララ、ブロウそしてガゼルへ

「これで終わりだ！ノーザンインパクト!!」

ガゼルが止めをさすべく必殺シユートを円堂目掛け放つ。

「いやあつ!!」

『まだ成長していない子どもを見ているようでも言うか…』

『腰を入れろ！腰をー!!』

「(まだ成長していない子ども…究極奥義は、未完成…)成長…子供…つ!!」

円堂の頭の中で、究極奥義を知ってから行った行動の記憶が蘇る。そして、1つの答えを見出す円堂は、迫るノーザンインパクトに対して拳を構えた

「(そういう事だったのか、じいちゃん！究極奥義が未完成っていうのは、完成しない事じゃない！子供が大人になるように、常に進化し続けるって事だ!!)くうううあああつ

!!!」

左足を大きく上へ上げ、地面を力強く踏み付ける。唸り声と共に腰の動きを使って握り締めた右手を前へと突き出し、右手から気で形成された右拳が光を放って回転しながら出現し、グングニルと激突した

「正義の、鉄拳っ!!!」

激しくぶつかり合う、正義の鉄拳とノーザンインパクト。先程までノーザンインパクトに打ち負けていたはずの正義の鉄拳が次第にノーザンインパクトを押し返していき、シュートを弾き返した

「何っ!? パワーアップしただど?!」

「そうだ! これが常に進化し続ける究極奥義、正義の鉄拳だ!!」

「円堂君!」

「あれは、正義の鉄拳G2!」

驚愕するガゼルに、円堂が吼える。その姿を見て木野や目金が笑みを浮かべ、シュートを決められなかったにも関わらずガゼルも心底楽しそうに口元を上げていた

「楽しませてくれるな! !だが、技が進化しよう和我々は負けない!」

ガゼルがそう告げた直後、正義の鉄拳で弾かれたボールがサイドラインを割ってフィールドの外に飛んでいく。そのボールを、突如現れたフードの男が足で止めた

「え…?」

突然現れたフードの男に困惑する円堂。倒れていた鬼道達も謎の男に視線を向けていると、フードの男はフィールドに入ってくる

「っ、あれは……！」

フードで隠して顔はつきりと見えない。だが、円堂は近付いてくる男を見て目を見開いていた。そのままゴール前までやって来たフードの男が、フードを上げて隠していた顔を見せた。忘れるはずもない、逆立たせた白い髪が特徴的なその男の名は……

「豪炎寺！」

豪炎寺修也。雷門のエースストライカーがついに、フィールドに……雷門に帰って来たのだった。豪炎寺は円堂をまっすぐ見つめ、軽く口元を上げて告げる

「待たせたな、円堂！」

「いつもお前は遅いんだよ！」

「豪炎寺！」

「豪炎寺！」

「豪炎寺さんが……豪炎寺さんが……っ、帰って来たっスー!!」

笑って円堂が豪炎寺の言葉に返事をし、鬼道達が立ち上がって豪炎寺が帰って来た事を喜ぶ。そして円堂が、瞳子監督に呼び掛けた

「監督！」

「選手交代！10番、豪炎寺修也が入ります！」

円堂の言葉に頷き、瞳子が選手交代を告げる。その瞬間、観客席から今日1番の大歓声が上がった

パーカーを脱ぎ、背番号10番のユニフォームを着る豪炎寺。何もしていないのに、現れただけで周りの雰囲気を変えた。

「豪炎寺修也……！」

豪炎寺を見つめるガゼル発ち。その視線に全く動じず、豪炎寺はダイヤモンドダストを軽く見てから、ベンチにいる浦部の前に向かう

「その足でよくここまで戦ってくれた。後は俺に任せろ」

「……ああ、任せたで！」

F W 染岡 豪炎寺

M F 鬼道 一之瀬 風丸 半田 マックス

D F 土門 壁山 栗松

G K 円堂

試合はいよいよ終盤へと向かう

第41話 VSダイヤモンドダスト3

クララのスローインで試合が再開する。ボールを受け取ったガゼルが、足を負傷しながらも戦った浦部に代わって入った豪炎寺に笑みを浮かべながら迫った

「見せてみるよ！お前の実力を!!」

そう言っただりブル突破を狙うガゼル。だが接触する瞬間、豪炎寺は跳び上がった。ザームの足元からボールを浮かせて、空中で奪う。そして着地と同時に、一気にゴール前まで駆け上がる。そのスピードはジェネシスに匹敵する程であったのだ

「なっ…!?!」

ボールを奪われてガゼルが驚いている間に、豪炎寺はボールを蹴り上げ跳び上がる。そして左に回転しながら炎を纏い、炎が収束された左足でボールを蹴る

「ファイアトルネード!!」

『これは…!?!』

豪炎寺の代名詞とも言えるファイアトルネード。だがその必殺技を見て、円堂と鬼道がある事に気付く。明らかに、前のファイアトルネードと違っていている部分があったのだ
「アイスブロック!!」

迫る炎のシュートを、ベルガはアイスブロックで対抗。炎のシュートに冷気を纏った右拳がぶつかる

「この程度か…っ!？」

シュートを防いだと感じたベルガが豪炎寺を嗤おうとした、その時だった。氷の中から炎が溢れ出し、アイスブロックを粉砕する。そう、円堂と鬼道が気付いたのは、ファイアトルネードの威力が以前とは比べ物にならない程に増している事だった

「ぐあああっ!？」

アイスブロックを打ち破ってなお威力が殆ど落ちていない炎のシュートが、ベルガの身体ごとゴールネットに突き刺さった

雷門2ー2ダイヤモンドダスト

『決まったー!!豪炎寺のファイアトルネードが、ダイヤモンドダストのゴールに突き刺さったー!!!』

「流石は豪炎寺だねー!」

「ナイスシュートだ!豪炎寺!」

「へっ… やっぱこうでなきやな!」

試合に出て早々に点を取った豪炎寺に旧雷門イレブンは喜んでいた。鬼道達も、今の

シユートから豪炎寺がとてつもないレベルアップを果たして帰って来たのだと確信する

豪炎寺の活躍で、絶望的な状況から完全に息を吹き返した雷門。

「何たる失態だ……我々が再び同点にされるなど……我々はマスターランクチームだぞ!!」

後半も残り僅か。次の1点が勝敗を分けると誰もが感じている中、ガゼルがボールを持って攻め込む。強引にドリブル突破を仕掛ける。中盤まで上がるとその前に、豪炎寺が立ち塞がる

「っー!」

豪炎寺の目を見て、ガゼルがドリブルで攻め上がるのを止めてフロストにパスを出す。だがフロストの前には、既に一之瀬が構えていた

「フレイムダンス!」

「ぐわっ!?!」

ディフェンス技でフロストからボールを奪う一之瀬。そこから一之瀬が鬼道にボールをパス。先程点を取った豪炎寺に繋ぐこうとするも、ゴツカとアイキューがマークにしていた

『……!』

鬼道と豪炎寺が視線だけで一瞬会話し、鬼道が豪炎寺の所へ向かってボールを蹴る。それは当然、ゴツカとアイキューの前にボールが飛んで来るのと同じで、2人はパスカットしようと豪炎寺から離れた

だが、ゴツカとアイキューがボールに触れる直前でボールの軌道が突如曲がり、その軌道の先には回り込んでいた豪炎寺がいた。目だけで互いの動きを完全に読み合い、ボールを繋ぐスパープレーに観客の声援が更に高まる

ゴール前近くまで上がる豪炎寺だが、その前にクララ、リオーネ、アイシーが立ちほだかる

今の豪炎寺ならドリブルで突破を出来るだろう。

ドリブルで突破しようとした時

「豪炎寺！」

半田が豪炎寺に呼び掛けた。豪炎寺は半田の目を見て半田にパスを出したのだ

『何ッ!?!』

ダイヤモンドダストのDF陣はパスを出すとは思っていなかったため逆を突かれゴール前がフリーになる

「行くぞ、マックス！」

「あいよー！」

半田とマックスはまずは片手で手を繋ぎその勢いを利用して上に回転しながら飛び、そして両手を繋いだ。

勢いをつけると手を離しマックスは右足、半田は左足でボールを蹴る。その姿はV字になっていた

「レポリューションV!!」

回転の勢いを付けたままのボールは勢いよく回転したままゴールへと向かう

「アイスブロック!!グハツ!!」

ベルガが右拳をぶつけた瞬間回転したボールに右拳が弾かれゴールへと吸い込まれた

『ゴーール!雷門逆転だあ!ゴールを決めたのは復活した半田と松野だあ!』

雷門3-2ダイヤモンドダスト

逆転をすると流れは変わった。豪炎寺はドリブルで攻めようとするガゼルからすぐさまボールを奪い鬼道、一ノ瀬、風丸、染岡と共に上がっていく。

D F陣を交わしボールは再び豪炎寺へと渡る。

豪炎寺が、シュートを撃つ。軽く跳び上がって腕と足を広げると、豪炎寺の後ろに炎の魔神が出現。次いで炎の魔神が広げた手の上に乗った豪炎寺が、両腕で掬い上げるように空中へ放り投げられる。そして空高く飛ばされた豪炎寺が回転しながら炎を纏つ

て上昇し、上空からゴール目掛けて新たな必殺技を繰り出した

「爆熱ストーム!!!」

炎の魔神が豪炎寺の後ろで吠え凄まじい炎を纏ったシュートが、上空からデザームに向かつて放たれた。

「ぐわあああ!!」

ベルガは必殺技を発動する前にボールはベルガと共にゴールへと吸い込まれていった

雷門4ー2ダイヤモンドダスト

『ゴーーーーール!!新しい必殺技爆熱ストームと共に、炎のストライカー豪炎寺修也、此処に大復活だーーーー!!!』

その直後に試合終了を告げるホイッスルがグラウンドに響き渡る。これにより、雷門の勝利が決定した

「いやったーーーー!!!」

勝利が決まった瞬間、円堂が大声で喜び、鬼道達と一緒に豪炎寺の所へ駆け付ける。そして円堂と豪炎寺は無言で互いの手を握って握手を交わし、笑い合った

第42話 帰還

「そこまでだよ、ガゼル」

『…っ！』

突然聞こえて来た声に我に返り、声のした方を見やる。声の主は、フィールドに入つて来たグランであつた

「ヒロト！」

「見せてもらったよ円堂君。短い間に、よくここまで強くなったね」

「…エイリア学園を倒す為なら、俺達はどこまでだつて強くなって見せる！」

円堂の言葉を受けて、悔しげな表情を浮かべているガゼルの近くに移動したグランが、楽しそうに笑つて告げる

「いいねえ、俺も見てみたいな。地上最強のチームを」

「…本当に思っているのか？」

「…じゃあ、またね」

円堂の問いに答えず、笑みを浮かべて別れの言葉を告げるグラン。その直後に、黒いサッカーボールがフィールドに落ちて来て軽く跳ねると、青白い光を放つ。そしてグラ

ンやいつの間にかフィールドに来ていたバーン、ダイヤモンドダストのメンバー達が光に包まれていく。

その直後に、鬼道の横をボールが通過した。ボールは豪炎寺の手元に飛んでいき、これを豪炎寺は両手でキャッチする。そして豪炎寺と鬼道達はボールを飛ばした人物に……

「豪炎寺！」

「円堂……」

「分かってるって！」

「……！」

笑って告げる円堂に一瞬驚いた表情を浮かべた豪炎寺が、薄く微笑んで手に取ったボールを円堂に向かって軽く蹴り、それを円堂が両手で受け止める。そして鬼道達と共に、笑って豪炎寺に言葉を送る

「お帰り！豪炎寺!!」

「皆……」

「待たせやがって！」

「本当っスよ！」

「……ありがとう」

土門、壁山、の言葉に感謝を述べて豪炎寺がこちらに…ベンチの方を見やり、瞳子監督に声を掛けた

「監督…」

「お帰りなさい、豪炎寺君」

瞳子監督も豪炎寺に優しくげに言葉を送る。すると、豪炎寺は瞳子監督へ向けて頭を下げた

「ありがとうございます！」

『えっ!?!』

突然感謝の言葉を述べた豪炎寺に俺達が困惑していると、豪炎寺は話し出した

「あの時…監督がいかせてくれなかったら、俺はあいつ等の仲間に引き込まれていたかもしれません」

「さあ、何の事かしら?」

豪炎寺の言葉をはぐらかそうとする瞳子監督だが、俺は今の豪炎寺の言葉を聞いて、豪炎寺をあの時強引にチームから離脱させたのは理由があったのだと察する。フィールドを見ると円堂と鬼道も瞳子監督の意図を察したようだ

「監督…」

「あいつ等って?」

「そいつは俺が説明しよう」

「刑事さん？」

状況が読み込めない一之瀬が疑問を口にする、鬼瓦さんとキャンが現れ、豪炎寺がチームを離れていた理由を鬼瓦さんが説明する

「豪炎寺が姿を消したのには、訳がある。妹さんが、人質状態になっていたんだ」

「え!? 夕香ちゃんか？」

「エイリア学園に賛同する者と自称する奴等が、妹さんを利用して仲間になるように脅してきたんだ」

「そうだったのか…でも、一言いつてくれれば！」

「言えなかつたんだよ。口止めされてたんだ、もし話したら、妹さんがどうなるか、な…」
「ツチ！ 気に入らねーぜ！」

鬼瓦さんの説明を聞いて、監督になって間もないのに豪炎寺の事情を察していたんだと知ってたんだと。

「だから我々は、チャンスを待つ事にした。時が来るまで、豪炎寺をそいつに預けてな」
「キャンに？」

「う、うん！」

恥ずかしそうにしながら言うキャン。綱海がとても驚いていた。

豪炎寺を匿ってくれた事に感謝しながら、鬼瓦さんの話の続きを聞く

「我々はまず、妹さんの身辺を探った。敵の実態が分からんし、妹さんの事があつたんで慎重にな。調査には色々時間が掛かってしまったが、漸く…妹さんの安全を確保出来たんだ。そつちのお嬢さんから、総理のSP達に協力してもらつてな」

『え？』

「うっ…」

鬼瓦さんの言葉に、皆が疑問の声を漏らして一斉に塔子さんを見やる。皆からの視線に、塔子さんが気まずそうな表情を浮かべて俺達に説明し出した

「実はわたし、真・帝国学園との試合後に鬼瓦刑事に接触してて、事情を聞いてたんだ。本当はもつと早く皆に伝えたかったんだけど、作戦が上手くいくまで皆に話せなくて…ごめんっ!!」

みんなに謝ってから、塔子さんが詳しい事情を話す。奈良で豪炎寺がチームを離れた時の様子がどうも気になっていたらしく、俺達と旅をしている間に財前総理やSPフィクサーズに独自に調べてもらっていた。そんな中、愛媛で沈没する真・帝国学園に残っていた鬼道が俺達と合流した際に、鬼道を連れて来た鬼瓦さんに尋ねて豪炎寺が離脱した事情を知り、豪炎寺を確実に助ける為に、塔子さんは俺達と行動を共にしながら電話で逐一鬼瓦さん達と連絡を取り合つて、作戦を練っていたのだ。

「ありがとう、塔子！」

「うえっ!？」

「ありがとうございませす！刑事さん!!」

前に皆から隠れて電話していた事が気になっていたがそういう事だったのかと思っ
ていると、円堂が塔子さんの所に駆け寄り塔子さんの手を掴んで笑みを浮かべながら礼
を言い、次いで鬼瓦さんの所へ駆け寄って頭を下げた。：手を掴まれた塔子さんが顔を
少し赤くしてたけど、すぐに手を放して鬼瓦さんの所に向かった円堂は気付いてない
だろうだろうな…

「礼は、キャンに言ってくれ…」

「ええっ!？そ、そんなことないよー!」

「いや、お前がいなかったら俺は…お前がいたから、爆熱ストームを完成する事が出来
た。ありがとう、キャン」

「えへへ…」

恥ずかしいのか頬を掻く鬼瓦さんがキャンに礼を言うように告げると、キャンが俺達
から背を向ける。すると、木野さんが豪炎寺に尋ねた

「豪炎寺君、どうだった？久し振りの雷門は？」

「…ああ！最高だ!!」

「へへっ！」

豪炎寺の普段よりも嬉しげな声での返事に、みんなは笑うのだった

「ファイアトルネード改！」

「ゴツドハンドツ!!…くうううっ!？」

その後、円堂達は帰って来た豪炎寺と一緒に練習をしながら高梨達の帰りを待っていた。円堂は豪炎寺のファイアトルネードを受けたり、豪炎寺が帰って来てチームの雰囲気はかなり良くなったのをベンチで木野さん達マネージャーの手伝いをしながら眺めていた

円堂達は試合が終わったため高梨達が大海原中に戻ってくるのを待つことにした

第43話 日常

俺はギャラクシーの試合の後、円堂達がいる大海原中へと向かっていた。

ちなみに、佐久間と源田は先に帝国に戻っていった。その際鬼道によりしく頼むとの伝言を預かった。

俺達が大海原中に着くともう試合は終わっておりその中に一人見慣れない人物がいた。

白いツンツンヘアアの髪型、背番号10番で凄い存在感を放っていた。

「おーい！円堂！」

「あつ！高梨！試合はどうだった？」

「ああ。残念ながら同点だったけど楽しいサッカーが出来たよ」

「そっか……。良かったな！俺達は豪炎寺に戻ってきてくれたおかげで何とか勝つことが出来たぜ！」

「豪炎寺？」

「俺が豪炎寺修也だ。よろしく頼む」

「ああ。俺は高梨蓮だ、こちらこそよろしく」

俺は円堂から詳しい話を聞くことにした。どうやら豪炎寺は妹を人質に取られたらしくチームを離脱し瞳子監督、鬼瓦さんのおかげで無事妹を救出することが出来たとのことだった。

そして報告をした後は練習を行った。ちなみにマックスと半田はまだ完治していないチームメイトの元へと戻り一緒に練習をすることと離脱をした。

俺はこのチームで練習を重ねて行ってきてそろそろ次の段階へと進むべきだと感じた。

今はマスターランクチームとはほぼ互角に戦えているがまだジエネシスには届かないと感じていた。

新しいメンバーも増え、みんなの基礎能力も向上した。そして何より豪炎寺が戻ってきたことにより更に超攻撃的チームになったのだ。

そこで俺は新しい戦術や必殺技などを考えることにした。

そして、練習も終わり夕食の時間皆でカレーを食べることになった。

「うっしっし..」

「木暮くん。もうその手はくいませんからね」

タバスコを持って笑っていた木暮。そしてその隣にいた目金はそれに気付き、壁山の

カレーと自分のカレーを入れ換えたのだ

「さあーいただきます。．．．かああああ!!水ううううー」

「うっしっし．．．どっちも当たりだよ」

見事に目金は騙されタバスコ入りカレーを食べるのであった。そして木暮の視線は豪炎寺へと向いた。

豪炎寺が一口食べたのを見て木暮はニヤリと笑い自分のカレーを一口食べた。

そして段々と顔が赤くなり．．．

「かれええええ!!」

「ああ。皿変えといたから」

流石は豪炎寺。上手く回避してるな

「辛いッスウウウウ!!」

そして、壁山も一口食べ口から火を吹いていた

『『あはははは!!』』

それを皆は楽しそうに見て笑っていた

夕食後、今後の戦いに向けて俺は自分の考えてる戦法について鬼道と話し合う。明日には沖繩を出て船を經由してキャラバンで1日掛けて移動し、明後日の昼頃には雷門中に戻る予定だと瞳子監督は俺達に告げた。ジエネシスに通じるかはわからないが手札

は多いに越したことはないからな。

「なるほど、確かにその通りだが、一体タクティクスなんだ？」

「今考えている必殺タクティクスを更に上のレベルにするためにも帝国学園の意思統一をチームで学びたいんだ。」

「……いいだろう。俺から確認してみよう。」

「それと鬼道達にはやってもらいたい必殺技があるんだが」

「俺達に？」

「ああ……」

俺は不適な笑みで笑うのであった

第44話 新たなる驚異

「戻つて来たぞ〜〜〜〜!!!」

次の日の朝。稲妻町に帰つて来た俺達は、始めにキャラバンを河川敷に止めていた。そこで円堂が、帰つて来た喜びを大声で叫ぶ。次いで俺達の方へ向いて、これからの行動について話し合う

「よしっ!一度家に帰ろう!」

「家かあ!」

「長い事留守にしてたからな」

「お母さん達も心配してるだろうなあ」

「家庭でのリフレッシェも大事だわ」

「いいですよね? 監督!」

「いいわ。1日ぐらい休みましょう」

『やったあ〜!!』

瞳子監督の許可も下りたので、皆で久し振りに家に帰れると喜ぶ。俺達遠征組はどうすればいいんだろうか。すると、同じことを思つた綱海が皆に問い掛けた

「おいおい！俺達はどうするんだよ!？」

稲妻町に着たばかりで泊まれる場所がない綱海の言葉も尤もである。

「皆うちに来いよ！母ちゃんの肉じゃが、最高に上手いんだぜ!!」

「俺、肉じゃが大好きです!」

「俺嫌〜い」

「ウチはダーリンの家に泊まりたくい!」

「あはは…」

「流石にそれはまずいんじゃないかな…?」

皆で楽しく話し合っていると、突然士郎が何かに気付いたのか空を見上げた。それに気付いた土門と俺が声を掛ける

「どうした、士郎?」

「何かあったのか?」

「…ん?」

俺達の会話が聞こえていた円堂が吹雪に続いて空を見上げた、その時だった。突如河川敷のサッカーグラウンドに、空から何かが飛来してグラウンドに激突して土煙と衝撃、そして青白い光が俺達を襲う。これってまさか…!?

「っ…!あれは!!」

光が収まり、落下して来た物を確認した円堂が声を上げる。落下して来た物は、俺の思ったとおり黒いサッカーボールであった。そして先程の青白い光を、俺達は既に見ている

「エイリア学園の黒いサッカーボール……!」

「今の光の色……まさかバーンか!?!」

「へっ……よくわかったじゃねーか」

『!?!』

黒いサッカーボールを見てプロミネンスというチームが此処に来ているのか周囲を見渡しながら確認する。しかしバーンの声が黒いサッカーボールから聞こえた。その事に皆が驚きながらも黒いサッカーボールを警戒していると、バーンの声が更に聞こえて来た

「雷門イレブン!俺らは5日後フットボールスタジアムでお前達を待つ!万全な状態で挑みに来い。俺の紅蓮の炎で焼き付くしてやるからよ!」

黒いサッカーボールが突然崩れて灰となって散ってしまう。

これは大変なことになった。まさかこんな早くにプロミネンスが挑みに来るとは思わなかった。暫くはゆつくり特訓でも出来るかと思っていたんだがそうも行かないな。

だが、5日あれば少しはなんとかなるか……

「監督！」

「……。今日は一日休みにします。まだ疲れが残っているはずだわ。でも、明日からまた特訓をします。いいですね？」

『『はい!!』』

こうして今日は変わらず休みになった。

俺達遠征組は円堂の家に行くことになった。

夕飯も円堂のお母さん手作りの肉じゃがを食べたがあれがめっちゃめっちゃ上手かった。そして、あつという間に俺達の休みは終わった。

「さあ〜今日から特訓するぞー!!」

「円堂。そのことなんだが俺から一ついいか？」

「どうした、鬼道？」

「実は高梨とも話したんだが実践形式で練習をするためにも帝国学園と練習をしないか？」

「帝国学園か！それ、いいな！いいですよね監督？」

「ええ、構わないわ」

こうして俺達は帝国学園に向かい特訓をすることになったのだ